

平成27年度  
研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究  
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

## 挨拶

川越市教育委員会教育長

伊藤 明

平成27年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」としてまとめることになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究の15校及び指定学校研究の9校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

さて、将来の変化を予測することが困難な時代を前に、児童生徒に、自らの生涯を生き抜く力を培っていくことがますます重要となっております。

川越市と川越市教育委員会では、「生きる力と学びを育む川越市の教育」を基本理念とした教育振興基本計画を策定し、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、様々な取組を推進しております。また、各学校においては、「生きる力」を育む教育活動、及び学校・家庭・地域との連携を深めた特色ある学校づくりに取り組んでいただいているところです。

こうした中、研究校では、自校の実態や課題を的確に捉えて研究主題を設定し、指導方法の工夫・改善や校内の学習環境の整備等、教育活動の充実へ向けて着実に実践を重ねてこられました。

それぞれの学校の研究成果は、主体的に問題解決に取り組む児童生徒の増加、仲間と豊かに関わり進んで運動に取り組む児童生徒の増加、学力や体力の向上、望ましい人間関係の構築など、子どもたちのよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の7校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、この集録に紹介された研究内容や成果を、教育活動充実の具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、志を高くもち、自ら学び考え行動する子どもを育成するための取組を尚一層推進していただきたいと思っております。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。挨拶といたします。

研究主題

「豊かなかかわり合いを通して、進んで活動できる児童の育成」  
～話し合いを基盤とした、言語活動・体験的な活動の充実を通して～

川越市立川越小学校

研究のポイント

「話し合い（話し合い）」を実践の中核に捉え、どの教科等においても、どのような活動においても、そして、どのような教育課程においても、この「話し合い」を手段にし友とかかわり、教師とかかわり、地域等とかかわることを通して、子供たち一人一人の豊かな自己実現を目指す。

1 研究の概要

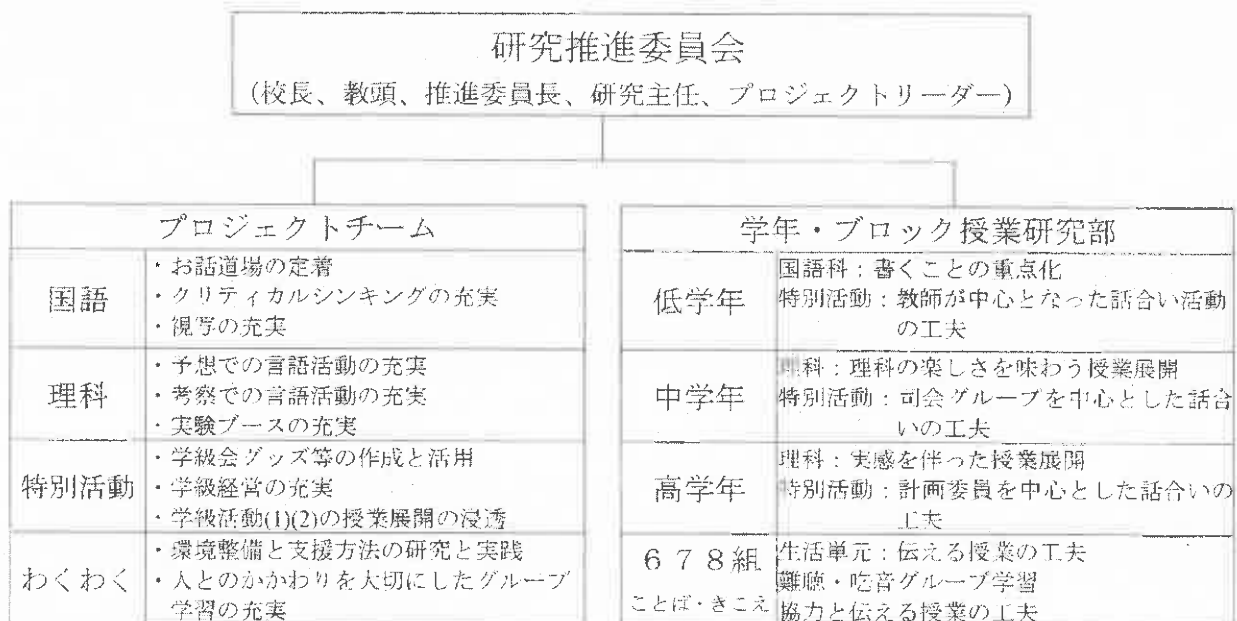
(1) 研究のねらい

本校では、目指す学校像「豊かなかかわり合いを通して、歴史と伝統を育む潤いあふれる川越小学校」にも示されている通り、143年の歴史と伝統を大切に、地域との深い関わりのもと、日々の教育活動を進めている。この2年間は、「話し合い活動を基盤にした言語活動・体験的な活動の充実」に視点を当て、根拠を明確にした話し合い・汎用的な学力の育成・教科等の結びつきを研究の中核としてきた。また、児童同士の意見をつなぐ、教師と児童の意見をつなぐ、児童と地域の方の意見をつなぐなかで人間関係も深まっていく話し合い活動を大切にしてきた。そこで、国語・特別支援教育・理科・特別活動における研究課題を立て、通常学級・特別支援学級・難聴言語障害通級指導教室での具現化を目指し、研究を進めてきた。

(2) 研究主題設定理由

本主題は、今までの研究主題を、より児童目線でもとらえ直したものであり、児童一人一人が躍動感を持って活動する姿の可視化を容易なものへ転換するねらいが含まれている。児童一人一人に確かな学力と豊かな心、健やかな心身を身に付けることをねらい、本主題を設定した。

(3) 研究組織



## 2 研究の内容

### 【課題①】

言葉による表現力を身に付け、学び合う力を高めるために、児童が進んで思考・表現し、話し合うための手立ての工夫を図る。

### 【課題②】

論理的な思考力を育て、学び合う力が高まるために、理科の目標に合わせた、効果的な言語活動の設定と授業改善を行う。

### 【課題③】

「自分から、そして自分たちで」活動できる力を身に付け、自治的能力を高めるために、支持的風土を醸成し、活力ある生活づくりを図る。

## 3 実践事例

課題1は、国語プロジェクト、わくわくプロジェクトが取り組んできた。児童が進んで思考・表現し、話し合えるようになるための手立てとして、月1回、朝学習の時間にお話道場を行ってきた。このお話道場は、テーマを決めて話し合い、話を進める、発表をする、意見を評価する、話し合いをまとめる、それぞれの力を育てる狙いがある。また、他教科でのクリティカルシンキング、すなわち改善・充実のための話し合いの場を計画的に設けた。役割分担し討議することで、考えを深め合う話し合いの力を身に付けることを目指し取り組んできた。音読では、毎日の音読カードだけではなく、発表会を行い、はっきりと話す楽しさや、覚えきった成就感を感じられるよう取り組んできた。月1回朝学習で文ぶんタイムも行っている。この文ぶんタイムは、言葉を正確に捉え、会話文も正確に書けるよう視写を行っている。国語科授業研究では、言語力の育成をめざし、自分の考えなどを書くこと・その考えを、根拠に基づきわかりやすく伝えることに重点を置き取り組んでいる。

また、特別支援学級では、コミュニケーション能力が高められるよう、自己選択の場や、皆に伝えたり人と関わったりする場を意識的に設定し、実態に合わせた支援の方法を工夫し取り組んできた。難聴言語障害通級指導教室では、個別指導を基本にしつつも、グループ学習により仲間意識を高めることや語彙の広がりや蓄積をねらいとし取り組んできた。

- ・ジャッジ…発表者の意見に対して質問や賛成・反対意見を述べる。
- ・スタート（発表者）…自分の考えを発表する。



- ・司会…話し合いを進行する。
- ・まとめ役（記録）…話し合いをまとめて書き、発表する。



特別支援学級



難聴言語障害通級指導教室



お話道場・クリティカルシンキング



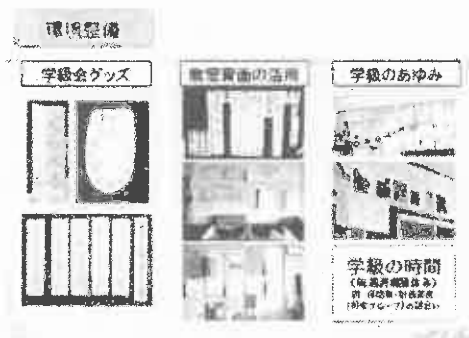
課題2は理科プロジェクトが取り組んできた。論理的な思考力の育成を目指し疑問・問題、予想、観察・実験、結果・考察、レベルアップ会議・まとめの各場面での手立てを考えてきた。1つ目は生活経験や既習内容から根拠を明らかにして科学的な予想を立てることである。予想をもとにして実験をするときの視点を意識できるよう、アイテムも示してきた。2つ目は、科学的な言葉で考察すると、きちんと伝えられる体験を通して、考察文の書き方を指導することである。自分の考察文には結果・課題に対しての結論が書けているか必ず線を引かせている。3つ目は、考察をわかりやすく説明し、話し合うクリティカルシンキングのスキルを身につける場としてのレベルアップ会議である。役割を通して、情報の明確化・論理的説明・批判的思考・行動決定のスキルを高めていくことができると考えた。3年生はワークシートを使い、456年生は自分の力で、ノート見開き1ページで1つの問題に取り組むことを指導している。また、理科ナビという下敷きを児童数分用意し配布して、根拠を明確にした話し合いができるようにしてきた。



課題3は、特別活動プロジェクトが取り組んできた。その際、教育活動を人間関係優先か教科優先かといったバランスを欠いた捉え方をせず、知識獲得と学び方を主軸にした学習づくりと、人間関係づくりを主軸にした生活づくりを車の前輪、心の教育である特別活動と道徳を後輪と捉え、すすめてきた。学級活動(1)では、学級会後の実践に結びつく授業展開を行ってきた。お互いの意見がつながるように、イメージの整理に取り組んできた。事前の活動では、決まっていることを明確にし、提案理由等を可視化し、イメージの共有化を図った。出し合う・くらべ合う・決める段階で、理由を短冊に書く際、国語で学んだ力を生かし、キーワードのみを書くようにしている。また話し合いをし決定したことは、必ず実践し振り返りまで行うことを大切にしてきた。学級活動(2)では、自己決定を実践につなげる授業を行ってきた。つかむでは、資料の活用を、さぐるでは、原因を追及することを、みつめるでは集団思考を、決めるでは自己決定を大切にしてきた。特につかむでは、児童へのアンケートや保護者からの願いなど資料を工夫

し、児童ひとりひとりが自分の問題として捉えることに重点を置いてきた。

環境整備では、まず、学級会グッズを統一して使用するものと、学級文化の広がりにも柔軟に対応できるものと分けた。つぎに「動きのある掲示」を目指し、児童の活動によって常に変化のある掲示に取り組んできた。また、月曜日の昼休みの時間は、「学級の時間」とし、児童が活動する時間を確保している。話し合い活動を通して学んだことは、他教科や地域との関わり、JRC活動をはじめ児童会活動や他学年との関わりに自然と生かされていると考えている。



#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 成果

- ① 言語活動の重要性に気づき、授業改善に取り組むことができた。また、日常的にお話道場等を継続していくことで、話す・聞く・書く力が向上し、話し合いを円滑にする基盤ができてきた。
- ② 思考力を高める手立ての工夫を教師側が捉えることができた。またクリティカルシンキングを取り入れた協議を行い、考えを深めることができた。さらに、話し合いの仕方が定着し、深まりのある話し合いを児童ができるようになってきた。
- ③ 話し合いで決まったことと実践活動が一連の活動として定着してきた。このことにより児童一人一人に「自分から、自分たちで」という意識が高まり、自治的能力・自己指導能力などの生活を改善・向上する力が身に付いてきた。

##### (2) 課題

今後、どの児童にもグループをまとめていくだけの力量を身に付けさせるための一層の具体的な手立てが必要である。また、相手を意識して話し合うことを様々な活動場面で今まで以上に取り入れていく必要がある。さらに、教師が児童の考えを大切に扱う対応が求められる。

## 「子供がうれしくなる国語科指導」

～伝え合い、深め、表現する～

川越市立新宿小学校

### 研究のポイント

- 授業において単元にふさわしい言語活動を構成する。
- 児童が、伝え合い深めることができるよう、効果的に新グループ学習を取り入れる。
- 「物語文」を通して①自分の考えをもつ、②自分の考えを書く、③自分の考えをグループで交流する、④ふり返るという学習過程を基本とし、児童一人一人が「叙述に即して読む」ことができるよう研究を行う。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

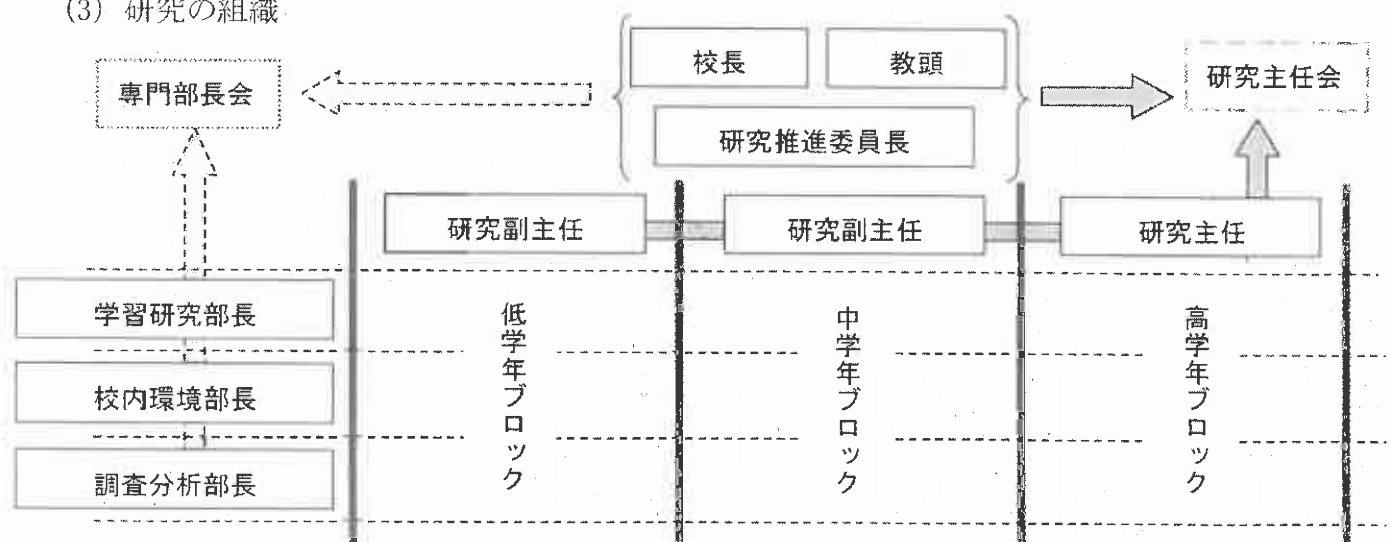
子供たちが意欲的に自らの考えを表現できるように、単元構成を工夫する。また、効果的なグループ学習を取り入れることにより、児童一人一人が伝え合い深めることができるようにする。

#### (2) 研究主題設定の理由

本校の児童は、熱心に読書をしている児童がいるものの、長文の読解や文字を読むことに抵抗を感じる児童も少なくない。また、自分の考えに自信がもてず、発表に消極的な児童も見られる。

そこで、「物語文」の学習を通して、①自分の考えをもつ、②自分の考えを書く、③自分の考えをグループで交流する、④ふり返るという学習を多く取り入れることで、児童一人一人が、「叙述に即して読む」ことができるようになると考え主題を設定した。

#### (3) 研究の組織



## 2 研究の内容

### 研究仮説

#### 仮説①

効果的なグループ学習をすれば、自分の考えを伝え合い深めることができるであろう。

①グループ学習における課題の設定 **視点A** ②グループ学習におけるツールの活用

#### 仮説②

単元にふさわしい言語活動を構成すれば、子供たちは意欲的に自らの考えを表現できるであろう。

#### 視点B

①児童の実態 ②単元で身に付けさせたい力  
③教材・学習内容の系統 ④単元構成

### 本校におけるグループ学習の考え方

従来の、『グループで話し合ってみましょう』からの脱却を図るため、ジョンソン&ジョンソンの5つの原則を基本とする協同的な学習を目指す。

#### グループ学習 5つの原則

##### 相互協力関係の構築

メンバー間・チーム間の協力関係を高める仕組みづくり  
対面的積極的相互作用の向上

対面場面を作る仕組みづくり

##### 個人の責任の明確化

誰かがやるから自分がやらなければならないという仕組みづくり  
社会的スキルの獲得

あいさつや声の大きさ、うなずきなど

##### グループ改善の手続き

自己評価とグループ評価など







#### グループ学習における2種のゴール

拡散型→多くの考えを出し合い、分類・整理する。

収束型→出された考えを絞ったり、まとめていったりする。



### 3 実践事例

低学年ブロック	実践の概要（本発表）
	<p>1月22日（金）1年生  「おはなしのすきなところを見つけて、『音どくはっぴょうかい』をしよう」  共通教材「スイミー」  ペア学習・・・向き合って好きな場面を音読しあう。</p>
	<p>1月22日（金）2年生  「『本のクイズブック』でしようかいしよう」  共通教材「スーホの白い馬」  グループ学習・・・ホワイトボードを活用し、自分が考えたお気に入りの場面の吹き出しについて意見交流をする。</p>
中学年ブロック	
	<p>1月26日（火）3年生  「あの子どんな子？『しょうかい人形』を使って心ひかれる登場人物の物語をしようかいしよう。」  共通教材「モチモチの木」  グループ学習・・・ホワイトボードと付箋を活用し、主人公の人物像を考える。</p>
	<p>1月26日（火）4年生  「どんな様子か想像できる？感じたことを伝える『音読発表会』をしよう！」  共通教材「初雪のふる日」  グループ学習・・・ホワイトボードを活用し、「こわい」と感じた部分が伝わる音読の仕方を考える。</p>
高学年ブロック	
	<p>1月27日（水）5年生  「椋鳩十作品の魅力について『読書座談会』でみんなと語り合おう」  共通教材「大造じいさんとがん」  グループ学習・・・ホワイトボードと付箋を活用し、主人公の心情の変化を考える。</p>
	<p>1月27日（水）6年生  「つなげて、重ねて自分なりの解釈を！『読書座談会』で自分の生き方を見つめよう」  共通教材「海の命」  グループ学習・・・ホワイトボードと付箋を活用し、読書座談会の話題を考える。</p>

## 4 研究部会

### 3部会の研究報告

#### ■ 学習研究部会

成果 単元を貫く言語活動、グループ学習の方法の浸透化を図ることができた。  
課題 身に付けさせる力の系統性を明らかにすること。

#### ■ 校内環境部会

成果 ノートの形式を統一することができた。  
課題 詩の暗唱や並行読書を充実すること。

#### ■ 調査分析部会

成果 学校研究での課題を調査から見いだすことができた。  
課題 高学年の効果を上げる糸口を見いだすこと。

## 5 研究の成果と課題

### 成果と課題

#### 成果

- ・ 2年間の国語科指導の研究により、児童一人一人が達成感を得ることができ、発言などから自信に満ちた児童の様子が見られた。
- ・ 伝え合う、深め、表現する児童の育成を目指し、観点を明確にした具体的な手立てによる研究に取り組んだことにより、本校の目指す子供の姿に近づけた。
- ・ 研究授業を実施し、事後の研究協議や授業反省を行ったことで、授業の課題を明確にすることができ、授業改善につながった。また、研究協議で明らかになった成果と課題を日々の授業に生かすことができた。

#### 全体

#### 課題

- ・ 国語科で学んだ主体的な活動を、他の教科・領域へ繋げていくために、児童がより楽しみながら取り組んでいけるよう、指導の質を高めていく必要がある。
- ・ グループ学習や単元を貫く言語活動の手法を、人事異動による職員構成の変化に応じて、どのように維持・発展させていくかが課題である。



研究主題

「自ら夢中で取り組む、運動好きな今成っ子の育成」  
～仲間と豊かに関わり、笑顔と汗があふれる授業を目指して～

川越市立今成小学校

研究のポイント

- 体育科の授業を通して、子どもたちの身体能力の向上を目指す。
- コミュニケーション能力を高めて児童相互のよりよい人間関係を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

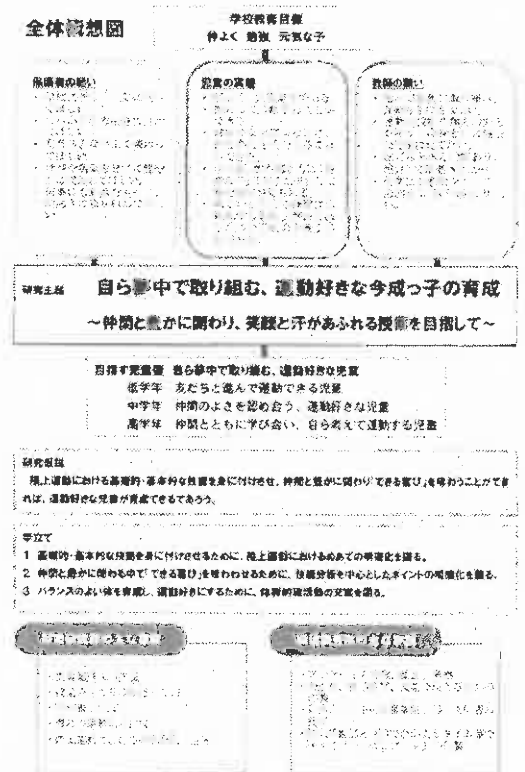
本校の学校教育目標である「元気な子」を目指すためには、子どもたちの身体能力の向上を目指すとともに、コミュニケーション能力を高めて児童相互の人間関係をよりよいものにすることが大切であると考えた。その実践を進めていく上では「体育科」の授業が望ましいと考え、取り組むこととした。

(2) 研究主題設定の理由

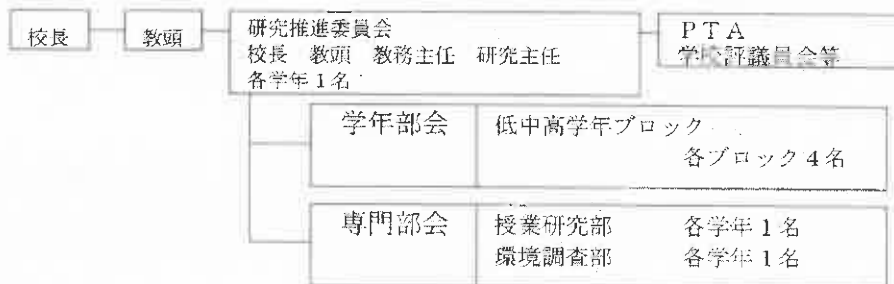
学校の周囲は、水田や住宅地に囲まれ、その中に学校があり、比較的運動をする環境が整っている。しかし、習い事や、遊び道具、遊び方の変化に伴い、運動する子どもとそうでない子どもの二極化傾向が進んでいる。

また、子どもたちを見ると、自分で考えて行動することを苦手としていたり、我慢強さが足りず、人とのコミュニケーションの未熟さから、トラブルになったりする児童もいる。

本研究では、学校教育目標の一つである「元気な子」の具現化を目指し、運動の楽しさを味わわせ、子どもたちの運動技能や体力を向上させること。また、運動の習熟を図るために、互いに学び合うことで、人との関わりや自主性を養うことを目的にしている。そこで、研究主題を「自ら夢中で取り組む、運動好きな今成っ子の育成」、副題を「～仲間と豊かに関わり、笑顔と汗があふれる授業を目指して～」として設定した。



(3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 目指す児童像

自ら夢中で取り組む、運動好きな児童

低学年 友だちと進んで運動できる児童

中学年 仲間のよさを認め合う、運動好きな児童

高学年 仲間とともに学び合い、自ら考えて運動する児童



### (2) 仮説と手立て

#### 仮説1

基礎的・基本的な技能を身に付けさせ、仲間と豊かに関わり「できる喜び」を味わわせることであれば、運動好きな児童が育成できるであろう。

#### 手立て

- ① 基礎的・基本的な技能を身に付けさせるために、陸上運動におけるめあての明確化を図る。
- ② 仲間と豊かに関わる中で「できる喜び」を味わわせるために、技能分析を中心としたポイントの明確化を図る。
- ③ バランスのよい体を育成し、運動好きにさせるために、体育的諸活動の充実を図る。

### (3) 授業のねらい

やって楽しく、わかってできる体育の授業の実践のために、本校における体育の授業においては、「知・徳・体」のバランスのとれた授業を目指すことが大切であると考えている。それは、①やって楽しい（かかわり合い、楽しく運動する力[徳]）②わかること（運動の仕方を理解する力[知]）③できる（身体能力[体]）のバランスのとれた授業を目指すということである。それが、「自ら進んで取り組む、運動好きな今成っ子の育成」につながると考えている。

### (4) 授業実践の視点

体育の授業の実践を進めるにあたり、以下のような授業の観点を取り入れて授業を展開することが大切であると考えている。

夢中で……………子どもが自分のめあてに向かって、何度も繰り返し、練習に取り組む授業

豊かな関わり……………互いを認め、補助や学び合いを通して、心の面での信頼関係を築ける授業

笑顔があふれる授業……………わかること、できることから得られる心の充足感を得られる授業

汗があふれる……………児童が自ら活動し、豊富な運動量が確保された授業

## 3 実践事例

(1) 専門部会の実践

①授業研究部

ア 指導案検討

ウ 慣れの運動例の作成

オ 体育の約束、学習規律の統一

イ 主運動につながる準備運動の立案

エ 運動の系統性分析

平成 26 年度は年間 6 回の授業研究会…指導者を招聘し、「走り幅跳び」、「ボールゲーム (ベースボール型)」、「ボールけりゲーム」の授業研究会を行った。それぞれ、高学年、中学年、低学年で実施し、系統性を重視した。

平成 27 年度は陸上運動系に単元領域を絞り、前期先行授業 3 本、研究発表授業 3 本を実施した。



ジンギスカン体操



めあての確認と振り返り



中学年リズムアップ走り幅跳び



低学年折り返し障害物リレー遊び



高学年 走り高跳び



豊かな関わり合い

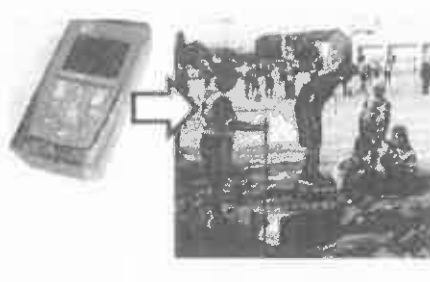
②調査環境部

- ア 教材・教具の整備
- ウ 掲示物の作成
- オ なかよしブックの作成

- イ アンケート実施、集計
- エ 体育教材・教具の活用
- カ 運動教室の実施



児童用トンボ



走り幅跳び測定器



朝マラソン



運動教室



得点板



掲示物

#### 4 研究の成果と課題

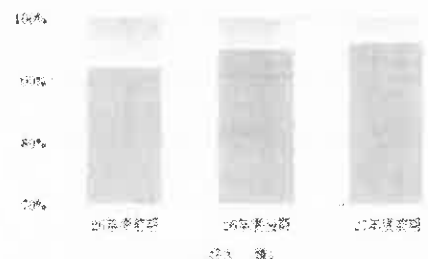
##### 【成果】

- ・ 仲間と豊かに関わり、笑顔と汗があふれる授業を通して、運動好きな児童が増えた。
- ・ 全校でめあて学習を進めたことで、児童の基礎的・基本的な運動の技能が高まり、「できる喜び」を味わう児童が増えた。
- ・ 運動に対する意欲が高まり、進んで運動に取り組めるようになってきた。
- ・ 仲間との関わり合いにおいて、声をかけたり、アドバイスできたりする児童が増えたので、意欲や技能に高まりが見られた。
- ・ 意図的、計画的な指導により、運動が苦手な児童でも運動が好きになる傾向が見られた。

##### 【課題】

- ・ 全体の学習のめあて、チームのめあて、個人のめあてが縦につながるように授業を展開していきたい。
- ・ 学校全体で励ましの言葉や称賛の言葉をたくさん増やし、運動好きな児童をさらに増やしたい。
- ・ 運動の系統性を踏まえて、他領域での効果的な指導方法を確立したい。

運動は好きですか



26年度前期：26年6月に実施  
 26年度後期：26年12月に実施  
 27年度前期：27年7月実施

対象：全児童

# 「主体的に活動できる心豊かな児童の育成」

～認め合い、高め合う学級活動を通して～

川越市立牛子小学校

研究のポイント

- 認め合い、高め合う話し合い【指導の工夫】
- 主体的に活動できる環境【環境整備】
- よりよい生活づくりを目指す評価【工夫・改善】

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

子どもたちの人間関係を構築する力やコミュニケーション能力の向上が学校課題として挙がってきた。そこで研究のねらいとして、以下のような目指す児童像を掲げ、研究をスタートさせた。

- 協力し合って意欲的に活動できる子
- 自分の思いや考えを進んで伝えようとする子
- 友達の考えを理解しようと真剣に聞ける子

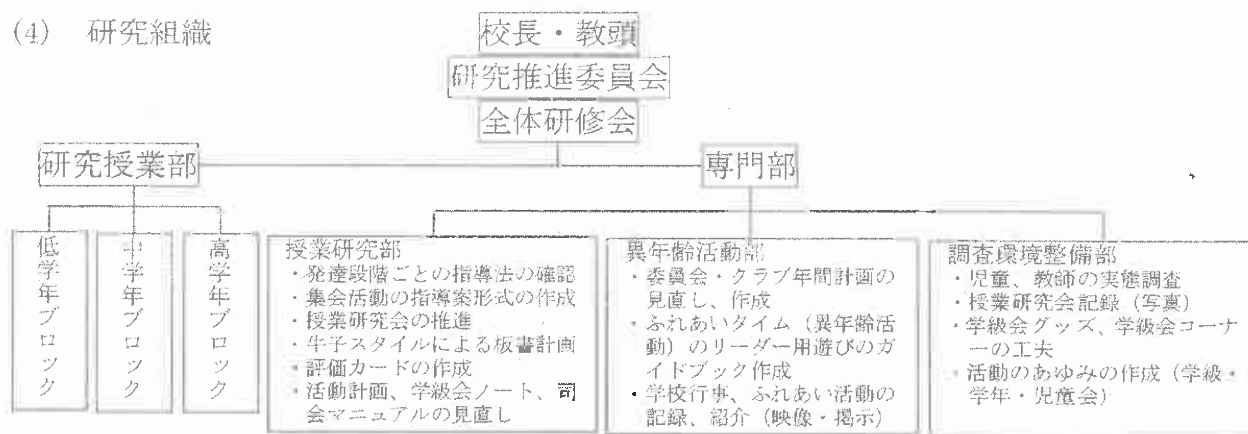
### (2) 研究主題設定理由

本校では2年前まで算数科の学校研究で学力の定着に向けて成果を上げてきた。さらに学力向上を目指すために、児童の意欲ややる気を引き出すことや児童同士の豊かな人間関係を築くことが必要不可欠であると考え、

- ① 自らの意見を持ち自信をもって相手に伝えられること
- ② 相手の気持ちを考え、発表できることを目指した話し合い活動が必要になってきた。そこで児童自ら人との関わり方を学ぶための特別活動（学級会）の学校研究に取り組むことにした。さらに、児童会や高学年の意識を高め、児童自ら取り組む活動を推進し、目指す児童像を実現するため、研究主題を「主体的に活動できる心豊かな児童の育成」、副題として～認め合い、高め合う学級活動を通して～と設定した。



(4) 研究組織



2 研究の内容

(1) 授業実践に向けての各ブロックの目標

目指す 児童像	友達の考えを理解しようと 真剣に聞ける子	自分の思いや考えを 進んで伝えようとする子	協力し合って 意欲的に活動できる子
低学年	話をしている人を見て最後まで聞くことができる	自分の意見を進んで発表することができる	友だちと仲良く活動できる
中学年	話をしている人を見て、自分の考えと比べながら聞くことができる	よりよい学級生活を目指し、自分の考えと友達の考えを関連付けて、意欲的に発表することができる	自分の役割を意識して、友だちと協力して活動できる
高学年	友だちの考えを理解し、よさや問題点を明確にして聞くことができる	よりよい学校・学級生活を目指し、自分の考えを積極的に伝えることができる	互いのよさを認め合い、めあてに向かって、進んで活動できる

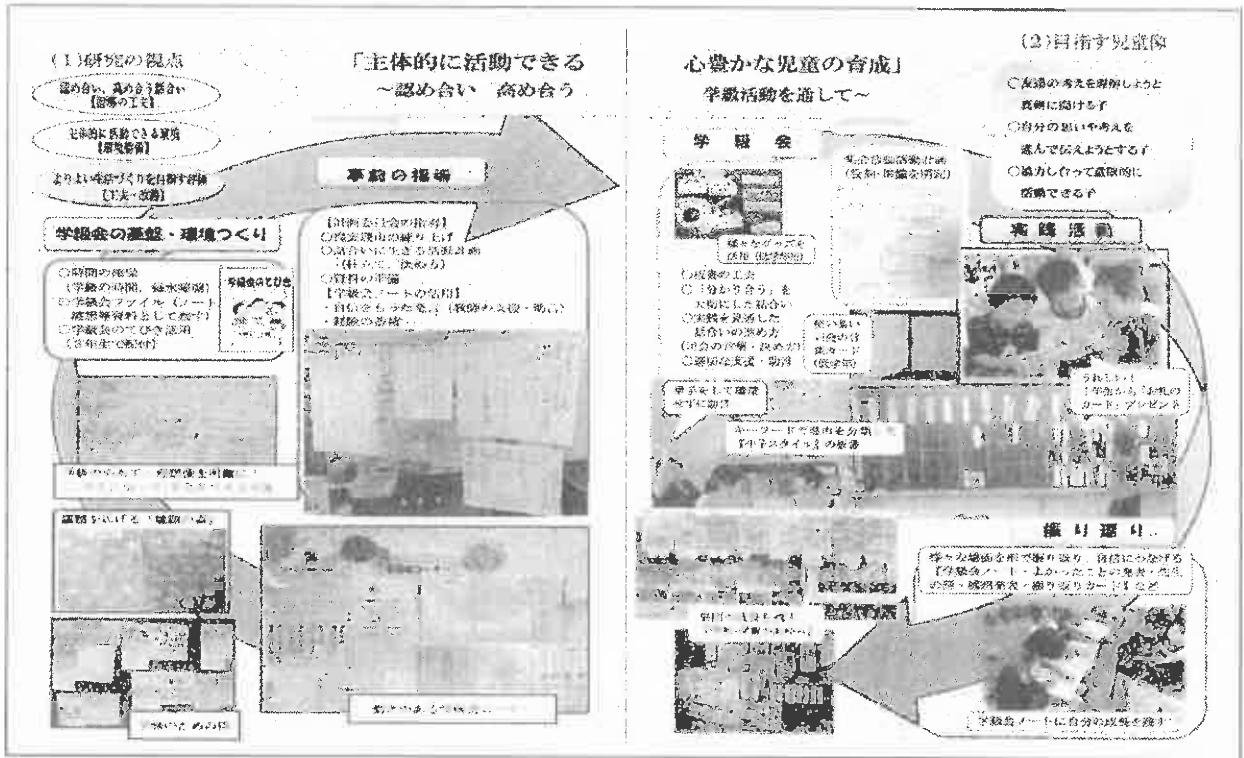
(2) 研究の視点とテーマに迫るための手立て

認め合い、高め合う話合い (指導の工夫)	主体的に活動できる環境 (環境整備)	よりよい生活づくりを目指す 評価 (工夫・改善)
<b>発達段階に応じた 指導法の共通理解</b>	① 学級会グッズ、各種カード類の活用 ② 学級会コーナー、係コーナーの充実(動きのある掲示、交流と係の向上に役立つ場) ③ 活動の時間の確保「学級の時間」(係、計画委員会、ふれあい、児童集会) ④ 学級会ファイルの作成(学級会のでびき、学級会ノート、感想、提案カード、資料等参考に保存) ⑤ 議題を広げる、柱の立て方(「議題の森」、議題の掲示) ⑥ ふれあい活動リーダー用「ふれあいタイムあそびのガイドブック」作成 ⑦ 委員会、クラブ活動の年間計画作成 ⑧ 児童会室の充実	① 評価者 …自己評価、教師による評価、相互評価 ② 評価の場 (対象) …事前の活動 (計画委員) …話合い (個々の児童、計画委員、学級集団) …実践活動 (個々の児童、役割の担当者、様々な集団) ③ 評価方法 …提案カード、学級会ノート、活動の観察、振り返りカード、感想等 …よかったことの発表、集会の感想発表、「先生の話」等 ④ 評価の蓄積 …学級会ノート、日記、ふりかえりカード等 …名簿、座席表を活用した教師の評価 ⑤ 「先生の話」の充実 ⑥ 集団の成長を残す「学年・学級のあゆみ」
① 年度当初の学級経営研修学級活動内容 (2), 「〇年生になって」の実施、全クラス授業公開 ② 計画委員会の指導 (事前指導、活動計画) ③ 提案理由の練り上げ ④ 時間内の合意形成 (決め方、司会の言葉、進め方のパターン) ⑤ 適切な支援・助言 (学級会ノートの朱書き・「先生の話」の観点を明記) ⑥ 話合いの可視化(板書の工夫「牛子スタイル」)		



### 3 実践事例

#### (1) 学級活動の一連の流れ



#### (2) 本研究の主な取組

##### ① 年度初めの共通理解

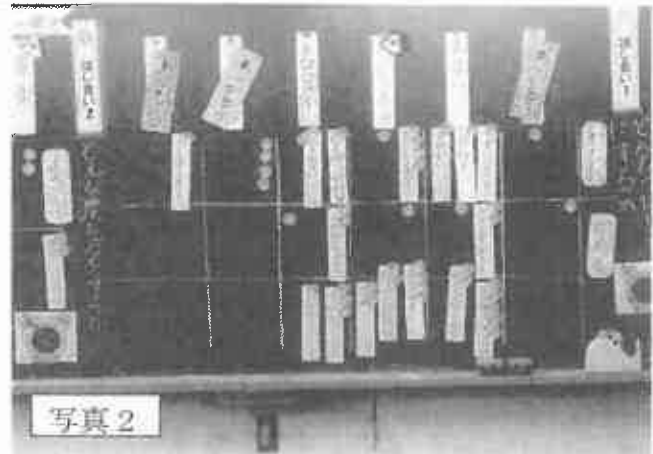
本校は年度初めの学級づくりを大切にし、児童の新しいクラスへの所属感を高めるために指導方法等の統一を春季休業中に図り、学級開きを行った。

② 4月中に、転入職員を含め、教師の指導力の向上と共通理解を図るため研究主任による授業研究会を行う。

③ 決めきる学級会をめざし、中学年では「出し合う」で自分の意見を出す。「出し合う」「比べ合う」「決める」という3段階の話し合いで解決を図ってきたが「比べ合う」が難しいので、ほぼ全員が認めたものを「分かり合う」で決め、どちらかに決めなくてはならない場合「比べ合う」で話し合って決定する。本校では中学年は「分かり合う」写真1を入れ4段階で話し合っている。



- ④ 1時間の中で、いかに決めていくかを考えた時に提案理由からキーワードを見つけ理由を整理し、写真2のように可視化した板書（牛子スタイル）を取り入れ、決めきる学級会を進めた。
- ⑤ ふれあい活動リーダー用「ふれあいタイムあそびのガイドブック」を作成し、ふれあいグループ遊びに生かし、楽しく意欲的に活動できるようにした。



⑥ 指導案形式（抜粋）

- ア 議題 イ 児童の実態と議題選定の理由 ウ テーマに迫るための手立て  
エ 評価の観点と評価規準
- ・ 集団活動や生活への関心・意欲・態度
  - ・ 集団の一員としての思考・判断・実践
  - ・ 集団活動や生活についての知識・理解
- オ 事前の活動 学級会に向けての活動（2週間くらい前から）  
カ 本時のねらい  
キ 展開（活動計画）ク 指導上の留意点 ケ 事後の確認

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 学級会ノートの意見には、めあてに照らした理由を書けるよう支援してきたので、根拠を明らかにして意見を言ったり積極的に発言したりできる児童が増えた。
- 計画委員会を開く時間（学級の時間）を日課表に位置付け、ふれあいタイム（縦割り集団活動）を増やしたことにより活動時間が確保でき、児童の活動が活発になった。
- 年度当初の職員会議で特別活動を基盤とした学級経営について共通理解を図り、全クラスに「学級会コーナー」や「学級会グッズ」などを整え、学級のめあてを立てたり学級の組織をつくったりして、転入職員も含め全校が同一歩調で指導に当たることができた。
- 3年に渡って全クラス学級会を公開し授業研究を行ったことで、児童は学級会の進め方をより確かに理解できるようになり、学級会以外の話し合う場面でもスムーズに話し合いを進めることができるようになってきた。教師も自分のクラスの実態や発達段階に即した指導方法を心掛けるようになった。
- “実践のための話し合い”であることを常に意識して学級会を行い、効率化を図り時間内で解決できるよう黒板の可視化や構造化、原案の提示の仕方等、発達段階に応じて工夫し、1時間の中で“決めきる”ことができるようになってきた。
- 児童の目的意識が高まり、意欲的に学校行事や学級の活動に取り組み、協力して実践できるようになった。活動後にはしっかりと振り返りをし、成長や成果を確認したことによって、次のステップに挑戦していくという姿勢が定着して、友達のよさを認め合い高め合う望ましい人間関係が醸成されるようになった。
- 学校全体で特別活動を推進していく環境や体制が整い、児童にも「自分たちの学級や学校を自分たちの力でよくしていきたい」という意欲の高まりが見られ、学習意欲も向上した。自主学習に進んで取り組むようになり、各種学力調査の結果も向上している。

(2) 課題

- 学級会や実践への活動意欲は高まってきたので、今後も自主的・自発的活動を積み重ね、自分たちで気づき考え、より主体的に活動できる心豊かな児童を育成していきたい。
- 発達段階を考えて指導に当たってきたつもりであったが、研究を深めたことで求めるものが高くなってしまいう傾向にあった。低学年には、教師が十分に学級会の進め方を見せていきたい。
- 今後は、学級活動内容（2）の指導方法について研究を進めるとともに特別活動の研究成果を道徳や教科等へも波及させていきたい。

研究主題

「人とのかかわりを大切にし、よりよく生きようとする子どもの育成」  
 ～道徳の時間を要とした道徳教育の充実を目指して～

川越市立高階小学校

研究のポイント

- 道徳の時間、特別活動の授業を中心とした指導法の工夫やコミュニケーション能力の育成
- 全教職員による教育活動全体を通じての道徳教育の実践

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「相手を思いやる心」や「自分の気持ちや考えをしっかりと伝える力」を高め、望ましい人間関係を築く力を身に付けさせたいという願いのもと、以下のような目指す児童像を掲げ、研究を進めていった。

- ① 自分の思いや目標を持ち、表現できる子
- ② 相手の立場に立って考えられる子
- ③ 自ら気づき、考え、行動できる子

(2) 研究主題設定理由

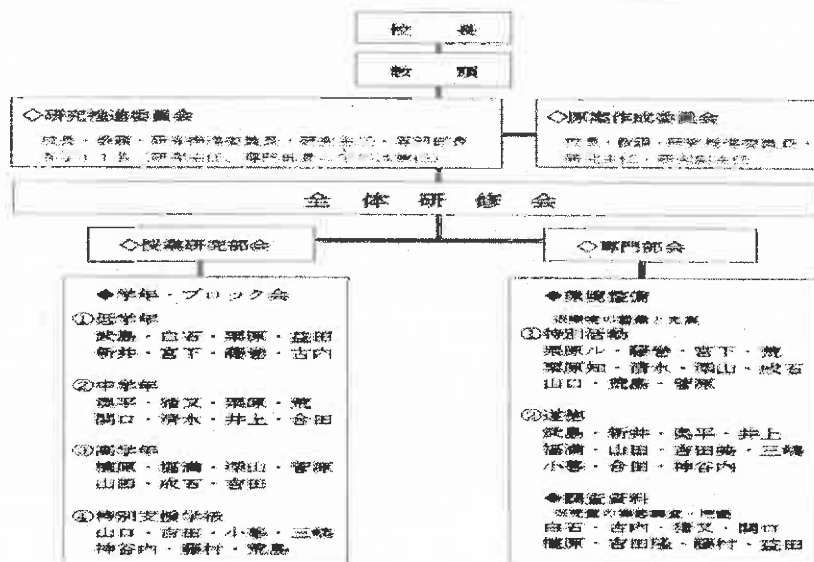
本校児童は、素直で明るく、授業に誠実に取り組む子どもが多い。反面大人しく、相手のことを考えることが苦手な子どもも少なくない。また、昨年度保護者を対象に行ったアンケート調査では、「友達と仲良く関わってほしい」「きまりを守れる子になってほしい」などの願いが多くみられた。

このような児童の課題や保護者の願いを踏まえ、本校では、自己表現・自己主張ができ、且つ他者を大切にできる児童の育成が必要であると考えた。

そのためには道徳の時間を要とし、子ども達の心をゆさぶり、考えを深めさせる指導を行うとともに、話し合い活動で、他者を認める態度を育てたいと考えた。

(3) 研究組織

平成27年度 高階小学校 学校研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 授業の充実

#### ① 道徳の時間

- ア 指導案、多様な指導方法の工夫
- イ 「道徳ノート」の活用
- ウ ユニバーサルデザインの活用

#### ② 特別活動（学級活動）

- ア 計画委員会の指導（事前指導、活動計画）
- イ 板書の工夫
- ウ 話し合いコールの活用

### (2) 環境整備

#### ① 道徳の時間

- ア 副読本の場面絵の作成、保存
- イ 教室の「道徳コーナー」の活用
- ウ 道徳だよりによる啓発

#### ② 特別活動（学級活動）

- ア 学級目標、学級のあゆみの掲示
- イ 系統性を考えた学級会グッズ、各種カード類の作成
- ウ 学級会コーナー、係コーナーの充実

### (3) 全教職員による教育活動全体を通じての道徳教育の実践

- ① 全体計画、年間指導計画の見直し
- ② 道徳と学級活動の「学級における指導計画」の作成と活用
- ③ 道徳と教科等の関連一覧表の作成
- ④ 「こころの日」の設定（「私たちの道徳」の活用）
- ⑤ 学習規律、あいさつ運動、無言清掃の共通理解、読書活動の推進
- ⑥ 授業参観、学校公開日での授業公開



## 3 実践事例

### (1) 道徳の時間を中心に

#### ① 指導案の工夫

「発問・指示・説明」を明確にし、指導案に表記したことで、誰もが一定レベルの授業を展開できるようにした。

→ 指導法の共有

#### ② 多様な指導方法の工夫

説明：東京へ移動しておかずの付いたごはんが食べられるようになりました。  
発問：避難所の生活と比べてどう思いますか。  
指示：手を挙げて発表しましょう。



導入の工夫



紙芝居の資料提示



意見交換（ペアトーク）



終末の工夫

また、平成30年度からの教科化へ向けて、以下のことに意識して取り組んだ。

ア 児童が主体的に取り組むことができる

→ テーマ発問（自分の考えを直接発表すること）の導入

イ 多様な感じ方や考え方に接する

→ 話し合いの工夫（ペア、グループ、討論）

ウ 問題解決的な学習、体験的な学習を取り入れる

→ 他教科等の関連一覧表の活用、本時のテーマ・めあての提示

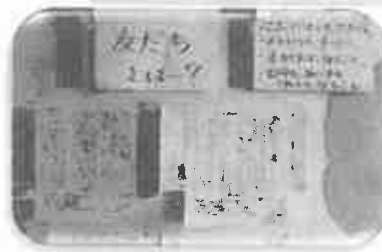
エ 子どもたちの伸びしろを評価する

→ 道徳ノートへの活用、記述による評価



### ③ 教室の道徳コーナーの活用

児童のワークシートや学習内容を掲示し、友達の考えにふれたり、学習を振り返ったりすることができるようにした。



## (2) 特別活動（学級活動）を中心に

### ① 板書の工夫

提案理由を意識して賛成・反対の意見を述べるができるように、キーワードを3つ提示した。このことにより、意見が分類しやすくなり、児童にとってわかりやすい板書になった。



### ② 学級会グッズ、各種カード類の作成

1～6年生まで児童誰もが主体的に活動できるように、低・中・高学年ごとに系統性を考えた学級会グッズや計画委員会進行用紙などのカード類を作成した。

### ③ 学級目標、クラスのあゆみの掲示



学級目標は、わかりやすく、児童や十人十色と個人個人の思いを連動させるように考える



学級のあゆみを掲示し、学級の愛着や誇りを向上させる



(3) 学校の教育活動全体を通じて

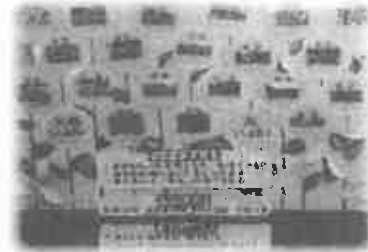
① 「こころの日」の設定（「私たちの道徳」の活用）

毎月第4月曜日の朝15分間、児童は「私たちの道徳」の好きなページを読んだり書き込んだりして自分の心と向き合った。穏やかな空気が流れ、落ち着いた心地よい週の始まりとなった。



② 「笑顔の花」の作成

各クラスの児童の写真を本校の研究の流れと共に校長室前の廊下に掲示した。児童もよく通る廊下であり、楽しそうに眺めており、廊下が明るくなった。



③ あいさつ運動の強化

昨年度から児童会のスローガンは、「あいさつでどんどん広がる笑顔の輪」とあいさつをテーマに作成した。また、児童集会では、「あいさつじゃんけん列車」や「あいさつ3択ラリー」を行い、あいさつを通して、人とのかかわりやつながりを意識させた。



④ 「自分と友だちを見つめるコーナー」の設置

学年掲示板に「友だちのよいところ」、「してもらって嬉しかったこと」をハートのぼかぼかカードに書いて掲示した。

⑤ 「親守詩」の取り組み（家庭との連携）

親守詩（おやもりうた）とは、親子のキャッチボール短歌であり、子どもが上の句で親への「感謝」を詠み、親が下の句で子への「親心」を詠むものである。6月に全校で取り組み、入選作品を廊下に掲示した。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 道徳、特別活動の授業を全学年で系統的に指導を行うことができた。
- ② 道徳の時間の「指導法の工夫」（「発問・指示・説明を明確にする」「発問の工夫（場面発問、テーマ発問）」「ワークシートの工夫」等）を全職員で共有し、指導に生かすことができた。
- ③ 様々な教育活動（掲示物、あいさつ運動、「こころの日」、親守詩の取組等）を充実させ、人とのかかわりやつながりを意識させることができた。
- ④ 話合いグッズを学年で統一し、話合い活動の基本型を示すことにより、充実した話合い活動ができた。

(2) 課題

- ① 平成30年度からの「特別の教科 道徳」に向けて、さらに指導法・評価の工夫（児童が課題の発見と解決に向け、主体的・協働的に学ぶことができる等）に取り組む必要がある。
- ② 家庭・地域等の身近な方とふれあう体験活動等を充実させ、児童の豊かな心や道徳的实践力（人間としてよりよく生きていく力）を育てていく必要がある。

## 「伝え合い、学び合う子どもの育成」

～国語科「読むこと」の指導を通して～

川越市立上戸小学校

### 研究のポイント

#### ○単元の本質を捉える

「読むこと」の領域を中心とした授業の改善を図るために指導目標と言語活動を吟味し、単元を構想する。

#### 【単元づくりの進め方】

- ・児童に身に付けさせたい力(単元の目標)の設定
- ・単元を貫く言語活動の設定
- ・教材文の選定、解釈・分析
- ・補助的教材の活用

#### ○主体的な読みを具現化する

主体的な読みの育成をめざすために、単元を貫く言語活動を位置付けた単元の指導過程の工夫を通して、「読むこと」の授業改善を行う。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

現行の学習指導要領の国語科改訂の趣旨には、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」等を一層重視して国語科の授業改善を図ることが示されている。その際に、「ここで音読する」「ここで話し合う」といった一元的な活動ではなく、児童が自ら学び、課題を解決していくための学習過程を明確化し、単元を貫く言語活動を位置づけるための授業改善が求められている。

#### (2) 研究主題設定理由

本校は、学校教育目標を「強く・正しく・美しく」とし、その具現化に向けた教育活動を行っている。これまで理科や国語科を柱に、言語活動を充実させた学習指導の学校研究に取り組み、児童に自分の思いや考えを話したりまとめたりする力が付いてきた。しかし、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う力や相手の考えを自分の考えに生かす力が課題となった。また、学習に対する意識調査から、自分の考えに自信をもてず発言に消極的である児童も見られた。

そこで、国語科の学習を通して、自分の考えを伝えることに自信を持ち、学ぶ意欲の向上を図る授業の改善が必要であると考えた。国語科の「単元を貫く言語活動を位置付けた単元づくり」は、目指すゴールを示すことで、児童自らが主体性を発揮して読み進めていくのに適した方法であると捉えた。その中で、一人学びから生まれる自分の読みを抱えた時に、児童は自ずと隣の子やクラス全体に伝えたいと思われる。その気持ちを大事にしつつ、交流の場を設定することで、伝え合いから学び合いへと発展していく場になると考えた。

以上のことから児童自らが主体的に課題を解決できる魅力ある単元づくりを工夫すれば、伝え合い学び合う児童を育てることができると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織

①研究推進委員

- ・ 校長（大野）・ 教頭（馬橋）・ 研究推進委員長（町田）・ 研究主任（小野寺）
- ・ 国語主任（金子）

②研究組織について



③各研究部

◎部長 ○副部長

各研究部	1年	2年	3年	4年	5年	6年	教務部
授業研究部	田中	伊藤	西宮	◎金子	○國本	八木	
調査・環境部	○飯田	清野	小島	杉本	◎野口	三浦	益子
	行森	小畑	江口				柴山

(4) 学年・ブロック部会

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
飯田	伊藤	西宮	杉本	國本	小野寺
田中	清野	江口	金子	野口	八木
行森	小畑	小島	柴山	益子	三浦

2 研究の内容

(1) 研究の仮説

主体的な読みの育成をめざすために、単元を貫く言語活動を位置付けた単元の構想や指導過程の工夫を通して授業改善を図ることを主に研究を重ねた。

仮説①単元や一時間の導入を工夫し、目標や見通しを共有化することで、友達とともに進んで読む意欲や態度が育つであろう。

仮説②学習内容を明確化し、学習課題に基づき、自力で読む時間を確保すれば、根拠をもとに表現することができるであろう。

仮説③自分の考えに自信を持たせ、互いを認め合う中で交流を重ねれば、考えを深めていくことができるであろう。

(2) 手立て

① 指導目標と言語活動を吟味し、単元を構想する。

ア 単元構想表の作成

学年等で話し合いながら、単元づくりのステップを踏まえた単元構想表を作成した。教材研究により、児童に身につけさせたい力や児童の実態に適した言語活動、単元構想の型が明らかになっていった。

イ 並行読書における厳選した選書

単元のねらいに合致する図書の選定に重点を置き、第二次で培った力を生かし、第三次でも自力で解決できるようにした。



ウ 用語系統表（「読むこと」）の作成

用語の系統表を作成することで、各学年で押さえておくべき力を確認した。

② 指導事項（学習内容）の明確化・具体化に重点を置いた指導過程の工夫

ア 授業（一時間）の基本・板書の基本の作成と共通理解

課題解決的な学習に取り組むことを基本とし、一時間の学習過程や配慮事項について共通理解を図った。

特に、「見通しのもてる導入」「一人読みの時間の保障と手立て」「交流する場の確保」「教師が教える場の確保」を重点とし、実践を行った。また、一時間の学習が見える構造的な板書をめざした。

③ 交流の充実

ア 交流の場面の整理

交流を三つの場面に整理し、目的に合った交流の仕方を工夫した。対話を多く取り入れ、自分の考えに自信が持てる、全員が自分の考えを伝える、話型にとらわれず考えが聞き合えるようにした。

イ 児童向け交流の仕方の掲示物

児童向けに「二人で話すとき」と「みんなで話すとき」の二種類を作成した。必要な時に提示し、指導を行っている。

④ 言語環境を整える。







ア 教室の掲示物

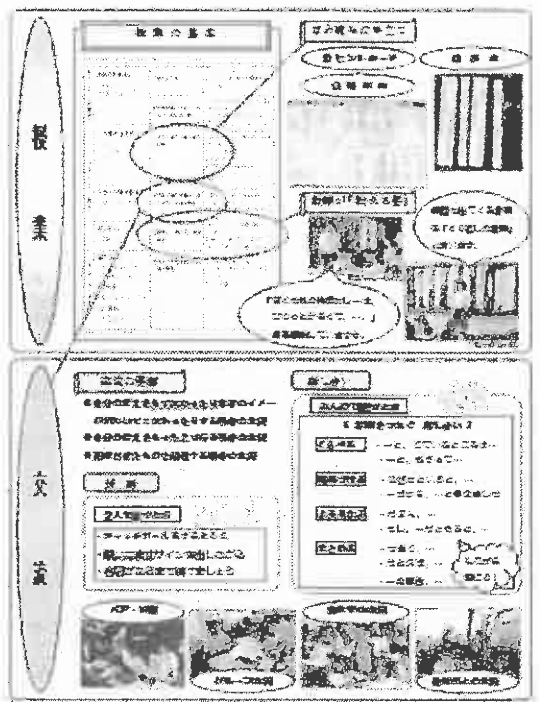
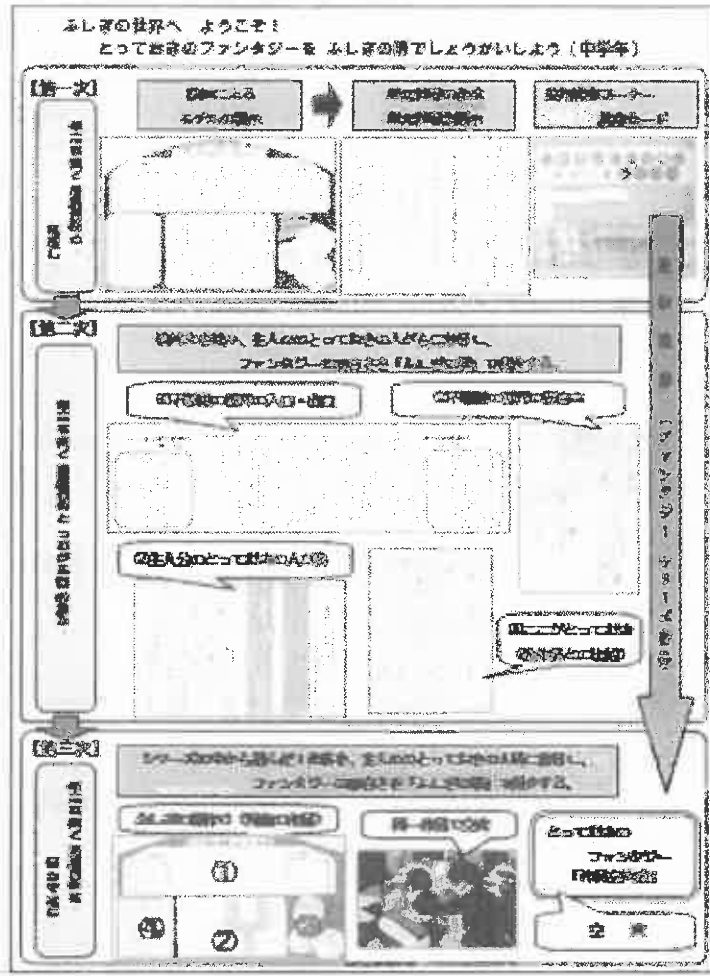
基本となる発表の仕方や話の聞き方、声のものさしの教室掲示を統一し、児童に指導した。また、文ちゃん人形を作成し、活用している。

イ やまびこ朝会・詩集の作成

言葉の響きやリズムを楽しむことと、声の出し方を鍛えることをめあてとし、月一回、やまびこ朝会を行っている。低・中・高学年別に詩集を作成した。

3 実践事例

<p><b>1年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・あらすじ</li><li>・好きな所</li><li>・言ってあげたい事</li></ul> <p>本の小箱を作って、お気に入りの本の すきなところをしょうかいしよう 『ずうっと、ずっと、大好きだよ』</p>	<p><b>3年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・登場人物の性格</li><li>・不思議の世界</li><li>・登場人物の変化</li><li>・自分との比較</li></ul> <p>ふしぎの世界へようこそ！ 本の面白さを「読書会」で紹介しよう 『海をかつとばせ』</p>	<p><b>5年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・登場人物の関係</li><li>・情景描写</li><li>・クライマックス</li><li>・朗読</li></ul> <p>こちら上戸放送局！ 朗読CDで自分の語りを全校に聞かせよう 『大造じいさんとガン』</p>
<p><b>2年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・登場人物</li><li>・台詞・場面</li><li>・好きな所</li><li>・シナリオ作り</li></ul> <p>お話の大好きなところを 「ペープサート」でしょうかいしよう 『お手紙』</p>	<p><b>4年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・あらすじ</li><li>・登場人物の性格</li><li>・自分との比較</li><li>・お気に入りの場面</li></ul> <p>外国の物語の面白さを見つけ、 ステキなステッキで紹介しよう 『三つのお願い』</p>	<p><b>6年生</b></p>  <ul style="list-style-type: none"><li>・賢治マップ</li><li>・工夫された表現</li><li>・作者のメッセージ</li><li>・おすすめの本</li></ul> <p>これぞ、宮沢賢治の世界！ 作品の魅力をポスターで紹介しよう 『やまなし』</p>



#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 成果

- 一人読みができる児童が増えた。
  - ・児童向け調査の結果から、「一人読みをすることができますか」という質問に対し、「とてもそう思う」と回答した児童が、26年度では、39%から27年度では、53%に増加した。
  - ・単元を貫く言語活動を中心とした単元づくりを実践することにより、児童が主体的に読む力が伸びた。また、児童が進んで文章を繰り返し読んだり、友達と交流したりしていく姿がよく見られるようになってきた。
- 教師の指導意識が変わった。
  - ・研究を進めるにあたり、学年やブロック、研究部のメンバーにおいて単元づくりを進めるようになり、授業改善を意識できるようになったことで、一人一人の教職員の授業力の向上に結びついてきた。

##### (2) 課題

- 単元を貫く言語活動を中心とした単元づくりの中で、目標に最適な言語活動をどう設定するか、さらに研究する必要がある。
- 児童は、より意欲的に一人読みの成果を伝えようとする姿が見られるようになってきた。さらに、相手の考えを受け止め、自分の考えを生かすための効果的な交流の方法が必要である。

「生徒のよさを活かし、伸ばす指導法の工夫」

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

- 一年次の成果と課題をふまえ、授業実践を通して本校生徒の「よさを活かし、伸ばす指導法」を工夫する。
- 既存の組織や分掌、教育活動や実践を活かし、組織的かつ効率的に研究を進める。
- 各教科とともに道徳、特別活動、総合的な学習の時間に研究対象を広げる。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校で日常的に実践してきた教育活動を、「生徒のよさを活かし、伸ばす」視点に立ってさらに充実させ、学校教育目標の具現化を図る。

(2) 生徒の実態を踏まえた研究の方針

研究を進めるに当たり、「生徒のよさ」を教師が共通理解するとともに、生徒が自分自身の「よさ」をどうとらえるか、また、生徒の学習意欲が高まるのはどのような授業なのかという実態把握から始めた。その結果を踏まえ、以下のように、本校生徒の「よさ」のうち、「自己表現力」や「高い学習意欲」に主眼を置き、各教科における具体的な授業実践を通して指導法の工夫・改善を図ることとした。

教師が活かしたい「よさ」	教師がさらに伸ばしたい「よさ」	生徒の自己評価
○学習意欲や関心	○自信を持って行動する、発表する	○学習意欲、授業の参加態度
○集中力	○自己表現・自己主張	○わかるとうとする努力
○向上心	○創意工夫	○仲間のよさを認める
○素直さや真面目さ	○コミュニケーション能力	○責任感
○たくましさ	○積極性	△発表力・表現力
○公共心や正義感	○自主性	

教師は、「表現力・発表力」を生徒の「よさ」として考えているが、生徒自身の自己評価は高いとはいえず、教師と生徒では認識に違いがある。

生徒の学習意欲が高まる授業・生徒が好きな授業

- ・ 授業内容に興味を持てる授業
- ・ 授業がわかりやすい授業（わからないことがわかるようになった）
- ・ 実験などの活動や作業、調べて追究する場面がある授業
- ・ グループで話し合ったり、発表したりする授業
- ・ 学習の目的が明確で、見通しが持てる授業
- ・ 新聞やレポート、論文などで学習のまとめを行う授業

「自己表現力」や「学習意欲・関心」を中心とした本校生徒のよさに着目して、授業研究を通して指導法の工夫・改善を図ることとした。

2 研究の内容

(1) 一年次のおもな研究内容

- 研究と関連付けた校内研修の効率的な実施と校内掲示の見直し
- 指導者を招いての授業研究や教科部会での情報交換等を通じた授業改善
- 既存の評価手段を用いた研究成果の具体的な検証による成果と課題の確認

(2) 授業実践を通して、効果が確認された指導法

◎学習意欲を高め、生徒主体の授業にする手だて

- 生徒の活動を取り入れる。 → 体験的・作業的な学習  
話し合い活動や発表など、役割分担も効果的
- 多くの意見を出させる。 → 多面的・多角的な考察、比較や関連付け  
お互いのよさの認め合い、自信を持たせる、など  
導入やまとめの場面での活用
- 生徒同士のかかわりを活かす。 → 意見交換、学び合い、相互評価、など
- 目標や主題を明確にし、学習に具体的なイメージを持たせる。
- 生徒の実生活と学習内容に結び付きを持たせる。

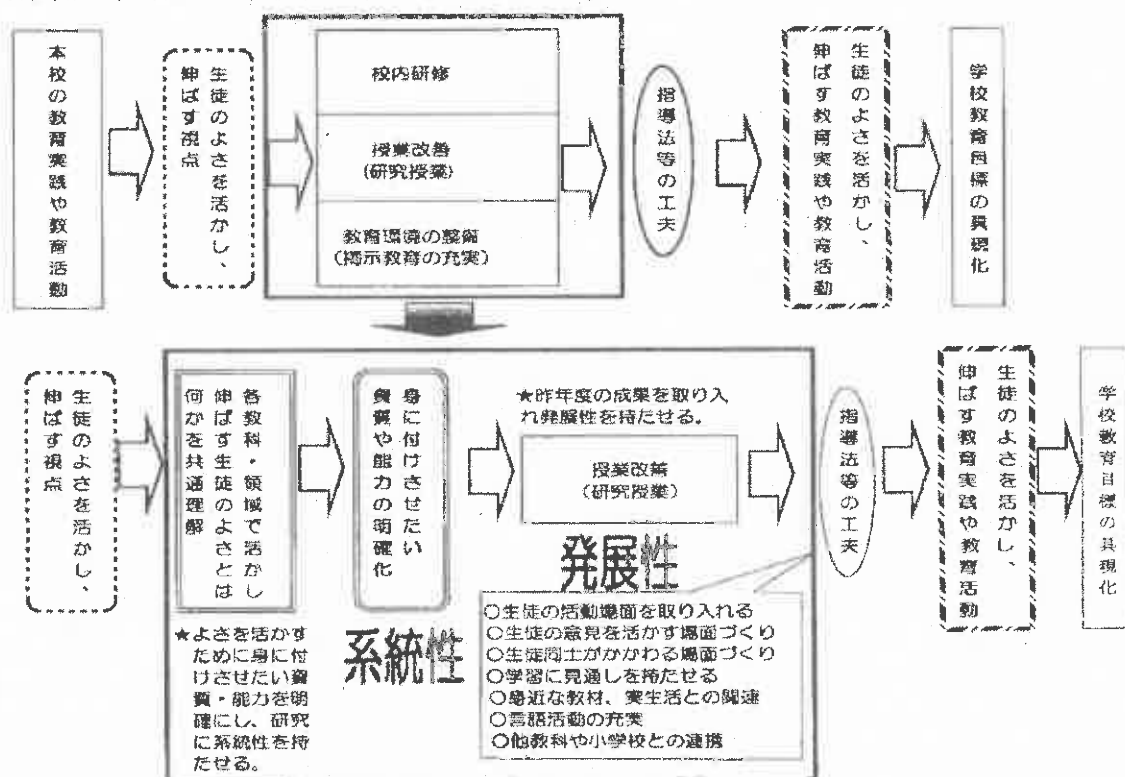
◎表現・コミュニケーション能力等をさらに伸ばす手だて

- 言語活動の充実 → 自分の思いを言葉や文字で表現する活動、伝え合う活動  
まとめや振り返りを文章で書く活動、など

◎小学校の学習や他教科の学習との連携 → 話し合いの仕方や実験など

(3) 二年次の研究構想

一年次の成果と課題を踏まえ、今年度は各教科・領域で身に付けさせたい資質や能力を明確化し、研究の系統性と発展性を図った。



(4) 「身に付けさせたい資質・能力」の明確化 (例)

	重点的に養育する生徒のよさ	身に付けさせたい資質・能力	指導法や学習活動の工夫
園児	・自主的・積極的に学習する。	・生徒自ら課題を設定し、小グループで追究し、発表する能力	・課題を意識しながら教材を読む。 ・個人やグループでの課題追究 ・役割分担をしながらの発表 ・グループ学習を通じた学び合い
社会	・学習意欲の高さ ・表現力	・社会的事象に対する関心を持ち、主体的に課題をとらえる力 ・多面的・多角的に考察する力 ・他者とのかかわりの中で 思考を深め、公正に判断する力 ・思考・判断した結果を適切に表現する力	・ニュースキャスター ・主体的・協働的な学習の工夫 ・グループ学習の成果を活かして個人の思考力を深める。 ※平成29年度関東ブロック社会教育研究大会の研究を兼ねる。 ・多目的室の効果的な活用

### 3 実践事例

#### (1) 授業実践を通しての研修と成果の共有

今年度はのべ58名の教師が研究授業や公開授業を校内で実施し、ほぼ全員が他の教師の授業を参観し、そのうちの80%が2回以上参観した。その結果、教科を超えて効果的な指導法や工夫の成果を共有することができた。



#### (2) 生徒のよさを活かし、伸ばす指導法

前年度の各教科の授業実践において効果が確認された指導法をもとに、今年度はさらに工夫と改善を加えることにより、身に付けさせたい資質や能力の育成に迫ることができた。また、主体的・協働的な学習の充実をめざし、知識構成型ジグソー学習を取り入れた授業も実施している。



#### (3) 全教師による研究のまとめ「わたしの工夫」

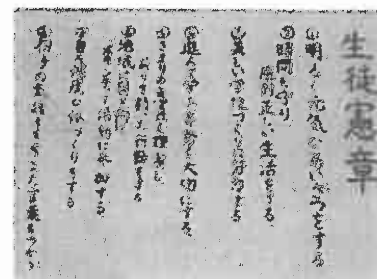
全教師が、「生徒のよさ」に着目して取り組んだ指導法の工夫や実践事例を「わたしの工夫」としてまとめ、振り返りを行った。

#### (4) 組織的な道徳の実践

道徳部会が中心となり、話し合い活動やロールプレイングをマニュアル化して取り入れたり、学年共通の教材を活用したりしたほか、校内研修において学年ごとに職員合同で指導案を作成し授業を実施するなど、組織的な道徳の実践に努めた。

#### (5) 既存の活動を見直す特別活動の実践

学校生活の様々な場面や学校行事における生徒主体の活動を、今年度は、「生徒のよさを活かし、伸ばす」視点で見直すとともに、平成7年3月に制定された「生徒憲章」と学校生活の具体的な関わりを、委員会活動などを通して改めて生徒に意識付けている。また、学年で共通して学級活動を実施したり、計画的に行事と関連付けて構成的グループエンカウンターを実施したりしている。



#### (6) 成果を受け継ぎ発展させる総合的な学習の時間の実践

本校では、学習の成果を表現・発表する場面を多く設けている。今年度は、上級生の作品をグッドモデルとしてさらに効果的に活用し、成果が確実に下級生に継承されよりよいものに発展していくよう努めている。1年生が作成する「一中リーフレット」を小学校で活用してもらうなど、小学校との連携も図っていききたい。

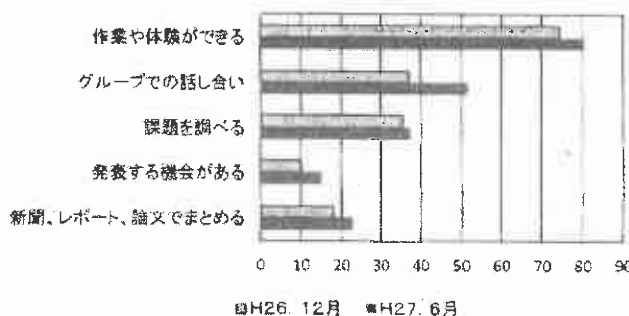


### 4 研究の成果と課題

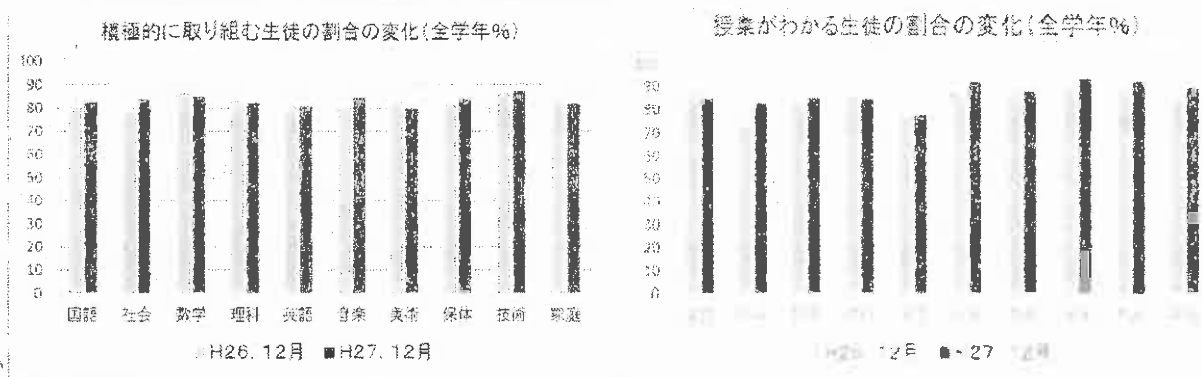
#### (1) 授業実践で取り入れた指導法に対する生徒の肯定感の高まり

右のグラフから、多くの生徒が「意欲が高まる」あるいは「好き」と回答した授業を指針とし工夫した指導法は、生徒自身も肯定的に受け止める割合が高まった。この結果から、授業で実践された指導法は研究のねらいを達成するために効果的であったと考えられる。

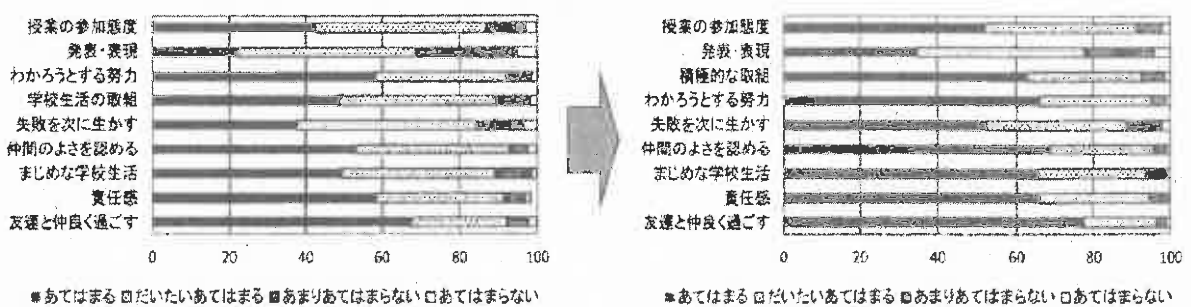
生徒が好きな授業(全学年%)



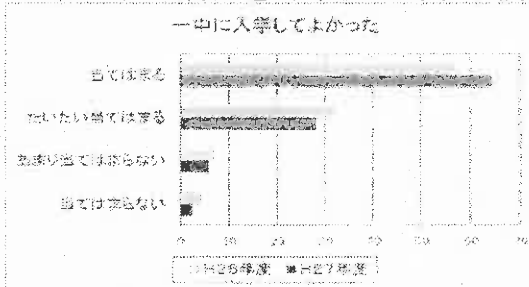
(2) 授業への積極性や理解度の高まりーA評価の回答率が上昇



(3) 生徒自身の「よさ」に対する自己評価の高まりー「発表・表現」の数値の上昇



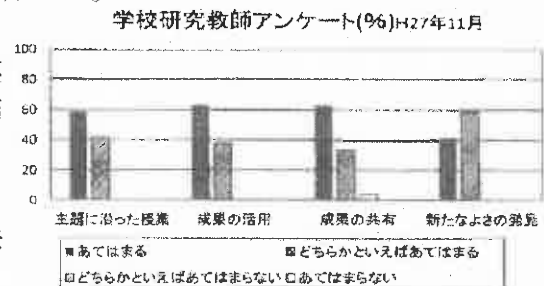
(4) 生徒の自己肯定感や学校に対する満足度の高まり



昨年同時期と比べ、生徒対象のアンケート結果によると、18項目中、学習習慣や基本的な生活習慣、相手を思いやる心、夢の実現に向けた前向きな姿勢などの15項目で、A評価の割合が全校で5%以上上昇した。そして、92%の生徒が、「一中に入学してよかった」と回答した。

(5) 教師アンケートによる検証

昨年度と比べ、ほぼ全員が校内の研究授業や公開授業を複数回参観し、一人一人の教師が研究成果を共有し適切に活用できた。



(6) 本研究のまとめ

生徒のよさを活かし、伸ばす視点で指導法の工夫に取り組むことにより、

- 教師の日常的な授業改善が促され、生徒は学習意欲や積極性ととも自己肯定感を学校に対する満足度を高めた。
- 自校に対する誇りを持って生活する、他者とのかかわりの中でよりよい自分を目指そうとする、などの本校生徒のよさを再認識することができた。

と結論付けることができ、本研究は、「自主 練磨 敬愛」の学校教育目標の具現化につながった。

今後も 研究の成果を継承・発展させ、教育活動の質的向上に取り組み、生徒のよさを活かし、伸ばし続ける学校として、生徒、保護者、地域の期待に応えていきたい。

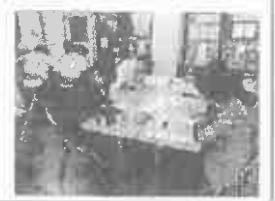
研究主題

「仲間との交流を深め、進んで表現する仙波っ子の育成」

川越市立仙波小学校

研究のポイント

- 表現力の形成を意識した取組を全校で行う。
- 「書くこと」に関わる言語活動の充実に指導の重点を置く。
- 目指す児童像をキャッチフレーズにして共通理解を進める。  
→キャッチフレーズ・・・「いきいきと」「じっくりと」「にっこりと」



1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の教育目標、「心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を図るため、以下のねらいで学校研究に取り組んだ。

- ①国語科の授業実践を通して、児童の思考力・判断力・表現力を身に付けるための指導方法の工夫・改善を図る。
- ②各種学力調査やアンケート等を分析・活用して、本校児童の実態にあった指導計画の改善・指導法の工夫や学習環境の整備充実を図る。
- ③単元を貫く言語活動を位置付けることで育成すべき国語の能力の向上を図る。

(2) 研究主題設定の理由

学校教育目標は「心豊かでたくましく生きる児童の育成」である。

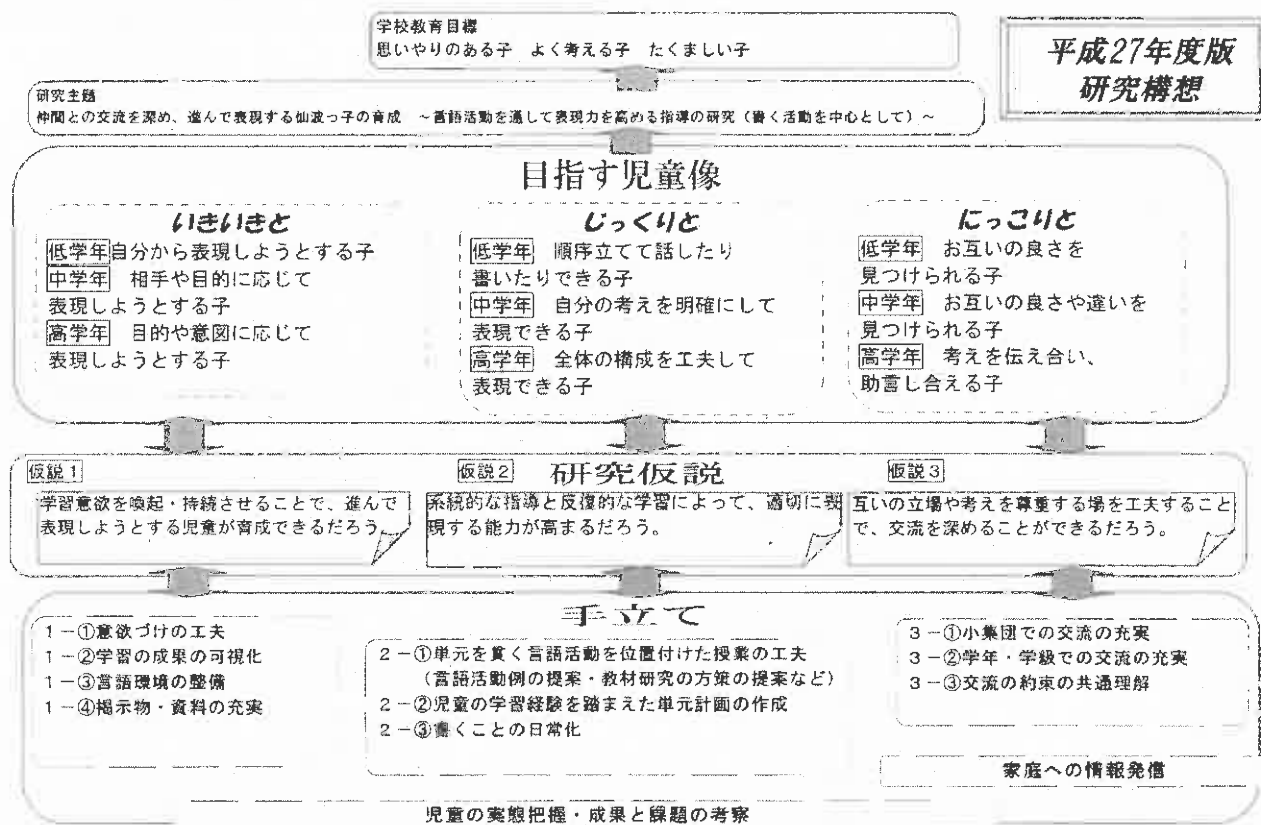
平成26年度の研究結果から、言語に関する能力の育成を図ることが重要である(\*1)ことが明確となった。これを受けて、①表現力の形成を意識した取組を全校で行うこと、②「書くこと」に関わる言語活動の充実に指導の重点を置くこと、の2点を研究の重点に設定した。研究主題を「仲間との交流を深め、進んで表現する仙波っ子の育成」とし国語科指導法の実践研究に取り組み、以下の具体的な方策で研究を進めている。

\*1 「言語力や言語感覚、国語科の目標である伝え合う力」を十分に向上させるには至らなかった・・・H26研修反省より

(3) 研究組織



(4) 研究構想図



2 研究の内容

平成26年度は研究領域を「書くこと」に絞り、「課題設定→構成→記述→推敲→交流」の各段階における指導の充実を図った。本研究により、何を学ぶべきかがはっきりしていたために見通しを持って学習に取り組めたこと、視写課題への取組により記述の速度が上がったこと、実態に応じた原稿用紙やワークシートを活用したことで書くことへの抵抗を減らすことができたなどの成果がみられた（H26研究だよりNo. 19より抜粋）。

平成27年度は更に研究を推進するため、全校で共通した取組、仮説に対する具体的な手立てと実践、言語活動の工夫と検証に焦点をあて、国語科指導法の実践研究に取り組んだ。

3 実践事例

(1) 単元名・教材名 のはらの仲間になりきって詩を書こう  
「のはらうた」「のはらに集まれ」

(2) 単元について  
①児童について（略）  
②教材について

「のはらうた」シリーズは、詩人がのはらに暮らす様々な人物を思い浮かべ、そのものになりきって作った詩が収められているものである。詩人になってとらえたそのものの属性が、まず「かたつむりでんきち」「ふくろうげんぞう」のような名前（作者名）に表れ、そしてその人物が作った詩に表れる。リズムがよく、しっかりと連に分かれているものもあれば、つぶやきのような一言で終わるものもあり、児童は様々な詩の世界を楽しむことができる。また、「自分ものはらの仲間になって」という条件のもと、詩を創作する活動につなげやすい。



(3) 単元を貫く言語活動とその特徴

本単元では、中学年の「書くこと」の言語活動例「ア 身近なこと、想像したことなどをもとに、詩をつくったり、物語を書いたりすること」を具現化したものである。何かになりきった詩を読むことを生かして「何かになりきって書く」という活動を行うようになっている。そこで、本単元を貫く言語活動として、児童がのはらの仲間になりきって詩を書き、自分ののはらうた詩集を作ることを位置づけた。

本単元で取り組む言語活動は、のはらの仲間になりきって詩を書くことである。見えるものや性格を想像したり、思ったことなどを考えたりしながら詩を書いていく。そのためには、詩を創作することを想定し、いろいろな詩にふれさせ、表現の工夫や詩の技法に気付かせたり、自分になりたいものを決め、見えるものや思っていることなどを想像したりする活動が必要である。また、様々な詩を読み、好きな詩を書き写したり、好きな理由や表現の工夫を書き込んだり、自分が好きな詩について友達と交流し合い、自分の感想が友達の感想と比べてどのように違うかを認識することも大切である。したがって本単元のねらいとする「想像したことをもとに詩を作り、表現のよさなどについて交流すること」を実現し、本校の研究主題とも合致する言語活動である。

(4) 本単元での具体的な手立て

仮説 2 への具体的な手立て

2-①単元を貫く言語活動を位置付けた授業の工夫

(言語活動例の提案・教材研究の方策の提案など)

・単元を貫く言語活動として、のはらうた詩集作りを位置付けた。

2-②児童の学習経験を踏まえた単元計画の作成

・児童の学習経験を踏まえ、想像したことをもとに詩を作る。

2-③書くことの日常化

・お気に入りの詩を書き写したり、自分で作った詩を書きためたりしていく。

仮説 3 への具体的な手立て

3-①小集団での交流の充実

・「表現の工夫リスト」などを参考にし、想像したことを表現できているかを助言し合えるようにする。

3-②学年・学級での交流の充実

・各時間の終わりに、自分の思いを伝え合う交流の場を作る。

3-③交流の約束の共通理解

・それぞれの詩のよさを見付け、伝えられるようにする。

(5) 単元構想について

\*説明文略

第一次	第二次	第三次
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習計画を立てる</li> <li>・「のはらうた」を読み、感想を伝え合う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「のはらうた」のよさを見付ける</li> <li>・自分が選んだ詩のよさを見付ける</li> <li>・詩の技法や表現の工夫に気付く</li> <li>・詩を書く</li> <li>・書いた詩や選んだ詩のよさや感じたことを交流する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書いた詩を発表し合い、交流を深める</li> </ul>
自分のはらうた詩集作り		

仮説の内容については  
研究構想図を参照してく  
ださい。

(6) 単元の目標 (指導事項)

- ・自分の好きな詩を選び、のはらの仲間の性格や情景を想像しながら読んだり、自分が書きたい詩を書いたりしようとしている。(関心・意欲・態度)
- ・詩の登場人物の性格や思いを想像しながら、詩を読むことができる。(読むことオ)
- ・「のはらうた」で読んだ詩を参考に、自分が作りたい詩を作ることができる。  
(書くこと イ)
- ・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと  
(〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(1) イ (ア))

(7) 本時の学習指導

① 目標

のはらの仲間になりきって、見えてくる風景や聞こえてくる音を想像し、感じたことや思ったことを詩に表現することができる。

② 評価規準 (指導事項)

のはらの仲間になりきって詩を書くことができる。 (書くこと ア)

③ 実際の展開

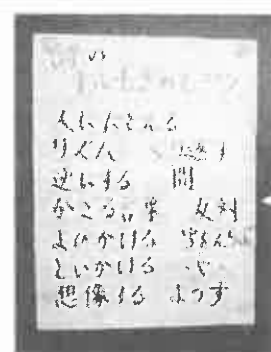
1 前時までの学習を振り返らせた。

2 詩のよさを思い出させた。

★前時の学習をふりかえる中で、詩の技法や表現の工夫について確認し、詩を書く時に生かそうという意識を持たせた。

3 のはらの仲間になりきって詩を書く。

★のはらの仲間になりきって詩を書くという条件を与えることで、何を書けばよいかを明確にさせた。



4 詩を読み合い、交流した。

★友達と詩を読み合い、いいなと思える表現を見つけて、伝え合った。



5 学習の振り返りと次時の予告。

★次の時間は、作った詩集を読み合うことを伝えた。

4 研究の成果と課題

成果

全学年で共通した取組、仮説に対する具体的な手立てと実践、言語活動の工夫と検証に焦点をあて、国語科指導法の実践研究に取り組むことができた。

課題

各研究組織と日常授業との有機的な接続を図る。

## 研究主題

# 「心豊かで、温かい関わりを深める南古谷っ子の育成」 ～自ら問題意識をもち、生き方を考える道德教育の創造～

川越市立南古谷小学校

### 研究のポイント

- 「特別な教科道德」を見据えた道德の時間の創造
- 自ら問題意識をもつ、道德の時間の指導法の工夫
- 話し合い活動を取り入れ、考えを深める言語活動の充実
- 道德実践力を高める教育環境・地域保護者との連携

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校は、児童数974名、学級数31学級（特別支援学級2学級含む）今年度143年目を迎える大規模校である。

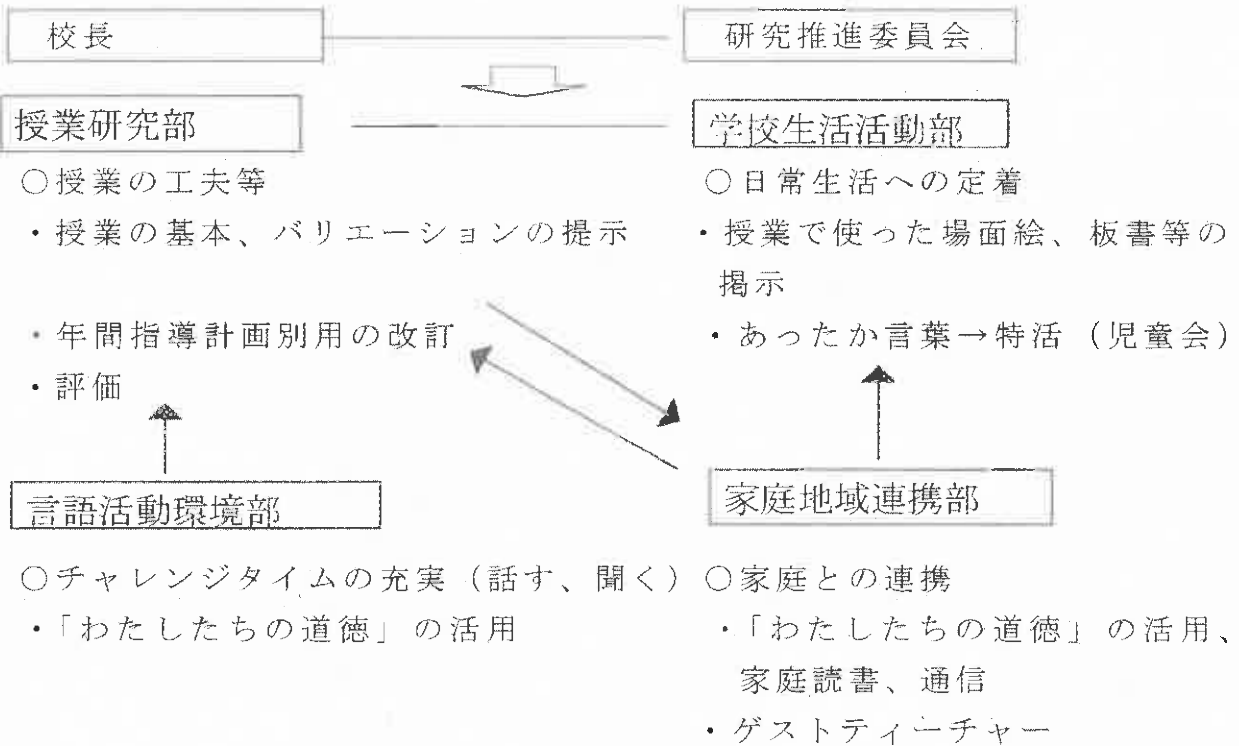
「かしこく ゆたかに たくましく」を学校教育目標として、目指す学校像を「地域とともに生きる信頼される学校」としている。また、「5つの自慢」①あいさつ、②ことば、③なかよし、④読書、⑤歌声を掲げ、日々、教育活動に取り組んでいる。

近年、激しい社会の変化、社会的モラルの低下など子供たちを取り巻く状況は大変厳しく、非社会的・反社会的行為の増加など子供に関わる様々な問題が山積している。このような社会において、子供たちが人間としての豊かな心をもち、規範意識を高めて前向きに生きていくために、学校教育の中での道德教育の重要性がますます高まっている。また、平成30年度から実施される「特別な教科道德」の実施を見据えて研究を推進していく。

### (2) 研究主題設定理由

本校の児童は、元気で明るい子供が多いが、規範意識や思いやりの心をもって人に接することに課題を抱えている子供もいる。今年度、保護者を対象にしたアンケートによる子供たちに身に付けてほしい力、教師たちの観察による願いなどを総じて、本校では、「心豊かで、温かい関わりを深める南古谷っ子の育成」を主題とし、～自ら問題意識をもち、生き方を考える道德教育の創造～という副題のもと道德教育を中心に研究を進めることにした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- ・豊かな心や規範意識など道德教育全般に関する理論研修
- ・自ら問題意識をもつ道德の時間の指導法に関する研究
- ・子供たちの考えを深める話合いに関する言語活動の研究
- ・保護者・地域社会との効果的な連携の在り方に関する研究

### (1) 目指す児童像

- 豊かな心をもち、豊かな関わりがもてる子
- 様々な出来事をしっかり見つめ、判断する子
- 自他を理解し、他者と共によりよく生きる子
- 「自分ならどうするか」と考え、実践する子

### (2) 研究の仮説

仮説1 『心に響く道德の時間の指導の工夫を行うことで、自己の生き方について考えを深められるであろう』

手立て

- ① 道德の時間の指導の工夫
- ② 自分の思いを伝え合い、高め合う工夫

仮説2 『自分の思いを伝え合う力を高めることで、互いに認め合えるであろう』

手立て

- ① 自分の成長を振り返る場の工夫
- ② 言語活動の充実

仮説3『規範意識を高め、豊かな心を育み、学校・家庭・地域のよさを実感させれば、よりよく生きようとする児童が育つであろう』

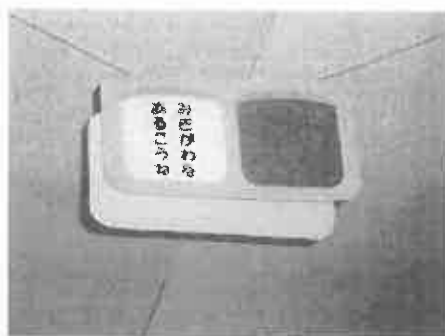
手立て

- ① 学校・家庭・地域との連携の工夫
- ② 学校生活環境の整備

### 3 実践事例

#### (1) 事例1 規範意識の向上

今年度当初、本校の昇降口は靴が無頓着に入っており靴そろえに課題があったり、廊下歩行などに課題があった。そこで、校長の指導の下、声掛けや学校課題研究（道徳）学校生活活動部と生徒指導部の関連した取組で、規範意識の育成を図っている。



くつそろえの徹底

信号を模した標示による廊下歩行の啓発

#### (2) 事例2 規範意識を高める授業の工夫

事例の授業では、事前アンケートや日々の児童の様子で自分でできることを自分で行おうとする力に課題があったので、「自分のことは自分で」を主題に授業を行った。

#### 第4学年 道徳の時間 「ぼくの部屋」

段階	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点 *評価	資料等
導入 5	1 アンケート結果を知り、気づいたことを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・できている人が少ない。</li> <li>・学校よりも家でできてない人が多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級の結果を提示し、ねらいとする価値への方角付けをする。</li> <li>*価値への方角づけが出来たか。</li> </ul>	アンケート結果
展開	2 「ぼくの部屋」の資料を聞き、話し合う。 ①自分の部屋をもったとき、洋太はどんな気持ちでしたか？ ②お母さんに怒られ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の部屋ができてうれしい。</li> <li>・新しい部屋で友だちと遊ぼう</li> <li>・ぼくの部屋なのだか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・状況がつかみやすいよう、登場人物の紹介をする。</li> <li>・片づけや整理整頓なんて簡単だと、軽い気持ちで約束してしまったことをおさえる。</li> <li>・自分でやらなくてはい</li> </ul>	場面絵 ①

	たとき洋太はどんな気持ちでしたか？	ら散らかしてもいいじゃないか。 ・後で片づけるからいいだろう。	けないと思いつつ、片づけや整理整頓を面倒に感じ、できるだけやらずに済まそうとしている洋太の気持ちを考えさせる。	場面絵 ②
深める	③「うちは、ちょっと・・・。」といった洋太はどんなことを考えていたのでしょうか？	(片づけない) ・ここはごまかそう。 ・呼びたいけど、片づけは面倒だ。 (片づける) ・恥ずかしい。 ・部屋を片づけたら気持ちもすっきりする。 ・友だちを呼びたいからきれいにしよう。	・部屋をきれいにしないと友だちを呼べない。 呼びたいけれど、片づけは面倒な揺れ動く気持ちに気づかせるようにする。	心情円盤
見つける	3 自分の生活を振り返る。	・自分も片づけをしっかりとやろう。 ・家で自分でできることはもっと頑張ろう。	☆自分の生活を振り返り、今後どうしていい期待か、これからの自分について考えられたか。 (ワークシート・発表)	ワークシート
終末	4 本時のまとめ 家の人からの手紙を読む。		・家の人からの励ましの手紙で、価値への印象づけ、意欲付けを図る。	ゲストテーブル チャー手紙

#### 4 研究の成果と議題

##### (1) 成果

- 授業の工夫改善により、児童一人一人が自分の考えをもって授業の臨むようになってきた。
- 友だちとの話合い活動を取り入れることで、子供たちが共に高め合い、考えを深める様子が見られるようになった。
- 教師が道徳の時間の様々な指導法を知ることによって授業展開のバリエーションが増えた。

##### (2) 議題

- さらなる授業の充実を目指し、心豊かな児童の育成を図る。
- 言語活動の充実をさらに図り、児童の話合いを深める方策を工夫する。

## 研究主題

# 豊かな体験を通して探究する力を育む授業づくり ～理科・生活科の授業を通して～

川越市立大東西小学校

### 研究のポイント

- 工夫された授業・環境整備を行うことで児童の理科・生活科に対する興味関心を高めることができる。
- 職員に対する継続した研修を行うことで理科・生活科の授業に対する苦手意識を解消することができる。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本研究は下記を目指す児童像として掲げ、研究を進めていく。

- 生活科・理科を好きな子
- 観察・実験の結果から論理的に考察できる子
- 疑問（ギモン）や不思議（フシギ）を探究できる子

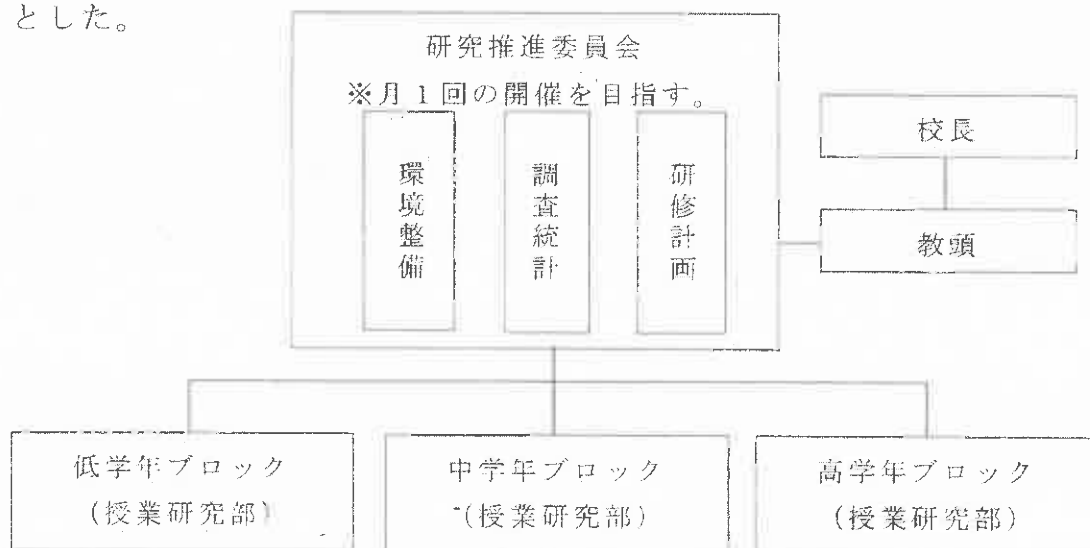
また理科・生活科の授業に対して苦手意識をもつ職員の苦手意識の緩和にも取り組んでいく。

### (2) 研究主題設定理由

小学校における理科の全国的な課題として児童の理科離れ、科学的な思考力の低下があげられる。本校でもアンケートを行った結果、理科・生活科を好きと答える児童が多く、実験や観察などの体験的な活動が好きと答えている。しかし結果をもとに論理的に考えることや考えたことを共有し、話し合ったりまとめたりすることを苦手としているという実態が見られた。さらに平成27年度に行った標準学力検査（NRT）の結果、本校の平均正答率が全国や市内の小学校よりも低いことも明らかとなった。これらを受けて研究主題を「豊かな体験を通して探究する力を育む授業づくり～理科・生活科の授業を通して～」と設定し研究を開始した。

### (3) 研究組織

研究主題に迫るために以下の研究組織を立ち上げ、全校で組織的に取り組むこととした。



## 2 研究の内容

### (1) 授業研究部

- ① 1人1公開授業（全職員が公開授業を行う）
- ② ブロック単位による研究授業



放課後理科実験教室の様子

### (2) 調査統計部

- ① 児童アンケートの実施（9月・2月）
- ② 職員アンケートの実施（9月・2月）



子ども理科実験教室の様子

### (3) 研修計画部

- ① 放課後理科実験教室の実施（月1・2回の教材研究を目的とした研修）
- ② 校内研修の実施（理科の授業作りの基礎や国研の情報提供に係る研修）
- ③ 生活科の授業作り研修会（児童の気づきを生かす授業作り）

【川越市立広谷小学校 宮崎厚校長先生】

### (4) 環境整備部

- ① 給食時の理科・生活科に関わる給食時の校内放送
- ② 理科実験コーナー（常設の顕微鏡等の実験器具）
- ③ 理科質問コーナー（児童の疑問に回答し掲示する）
- ④ 子ども理科実験教室（不定期で児童向け実験教室）
- ⑤ 図書室でのおすすめ理科本
- ⑥ 実験器具の使い方カード（実験器具の使い方をまとめ、設置したもの）
- ⑦ 小テスト用器具写真（理科・生活科特有の器具の写真を共有する）
- ⑧ ゲストティーチャーの招聘



質問コーナーの様子

## 3 実践事例

### (1) 1年生 生活科「ふゆをたのしもう」

- ① 特色 冬の特色である風について様々な気づきを促すために遊び（試し）の場を複数設定したり、互いに見合う時間を確保したりした。
- ② 目標
  - ・気づきをもとに話し合うことを通し、風を利用して遊ぶものを工夫してつくる。
  - ・遊びを通して、風によって起こる現象の不思議さや風を利用して遊ぶ楽しさに気付くことができる。

### ③ 展開

児童の活動	教師の支援（◆）
1 前時の活動で気付いたことを話し合う。	◆本時の活動に活かせるように、児童の気づきを交流させる。
2 学習のめあてを確認する。	◆風と風で動くおもちゃ（風車）とを関連付けて考えた発言を称賛する。

じぶんだけのかざぐるまで もっときたかぜさんとあそぼう！



<p>3 自分だけの風車を作り、遊んだり改良したりする。</p>	<p>◆遊びの途中で、随時改良してよいことを伝える。 ◆どの児童も活動に取り掛かれるように、「羽の数を増やす・紙の種類を変える」等、何を試したいかを出し合い、ホワイトボードに明記する。 ◆自分の風車が回った児童は、「回ったよマーク」をホワイトボードに貼るようにする。まだ回せていない児童を中心に支援する。</p>
<p>4 作った風車を見合い、工夫したことや気付いたことを伝え合う。</p>	<p>◆自分の風車、やってみた遊び方を紹介し合うことで、それぞれの風車のよさや風と遊ぶ楽しさを伝え合えるようにする。 ◆児童から出た遊び方を試させる。</p>

(2) 4年生 理科「ものの温度と体積」

- ①特色 実験結果からわかる石鹼膜の動きと目に見えない空気の動きを関連付けて考える授業構成。
- ②目標 閉じ込められた空気はあたためると膨張することを見出すことができる。

③展開

学習活動	主な教師の発問 (T)
<p>3 本時の問題をとらえる。</p>	<p>問題 空気をあたためたら、どうなるか。</p>
<p>6 個人で考察をする。</p>	<p>T 予想は、たしかめられたかな。 みんなの予想を振り返って、その予想がどうだったかを考えてみよう。まず、自分で考察をしてみよう。</p>
<p>7 グループで考察をする。</p>	<p>T グループで考察を話し合っ、一つの考えにまとめてみよう。</p>
<p>☆発表して学級で共有</p>	<p>T グループで話し合った考察を発表しましょう。</p> <div data-bbox="534 1411 1125 1579" style="text-align: center;"> </div> <p>T あたためると空気がふくらむという考察になりました。本当に空気がふくらむのかやってみます。 ・ペットボトルをお湯であたためる。</p>

(3) 6年生 理科「水溶液の性質」

- ①特色 問題に対する予想と実験結果に対する見通しを二重で考えさせることで結果から、目には見えないものを推論しやすいようにしている。
- ②目標 炭酸水には気体の二酸化炭素が溶けていると推論し、自分の考えを表現している。

③展開

学習活動	主な教師の発問 (T)
1 問題の把握・設定	問題 二酸化炭素は、水に溶けるのだろうか。
2 予想・仮説の設定 I 問題について予想し、その理由を話し合う。	T 二酸化炭素は、水に溶けるでしょうか。
3 検証計画の立案 実験方法を確認し、見通しを立てる。	T 水を入れたペットボトルと二酸化炭素ポンベを使ってどのように実験をしたいと思いますか。 T 水を入れたペットボトルに二酸化炭素を入れ振るとどうなると思いますか。
4 予想・仮説の設定 II	



4 研究の成果と課題

(1) 児童の成果

①理科コーナーの設置→興味・関心が高まってきた。

②授業を通して

低学年＝五感を使って、動植物の観察や体験活動を行った。

→「見つけたよカード」に詳しく書けた。

高学年＝一人一人の体験活動（実験・観察）を増やした

→内容理解につながり、テストの平均点が上がった。

小テストの実施

→基本的な事項（実験器具の名前や使い方、身近な物や現象）について、知識が高まった。

(2) 教師の成果

①「先生のための実験教室」

単元の系統性を理解し、指導内容が明確になった。実験器具や教材の扱い方がわかった。

②「1人1授業研究会」

学年や他の教員と教材研究（単元計画を練ったり、予備実験をしたり）する機会が増えた。

(3) 児童の課題

①1年間を通して、様々な単元（自然・科学・物理・地学など）の興味・関心を高めていく必要がある。

②問題を解決するために「どうしたらよいか。どのような方法があるか。」を考えることができていない。

③目の前の現象から、「なぜそうなるのか。」を考えることができていない。

(4) 教師の課題

①生活科の中で、児童の気付きを引き出し、広めていく。

②問題（課題）設定に必要性をもたせ、「調べてみたい」と興味・関心を継続させる。

## 研究主題

# 「学び合い 高め合う 授業の創造」 ～アクティブ・ラーニングを取り入れた算数科学習～

川越市立霞ヶ関小学校

### 研究のポイント

- 1 単位授業や単元の中にアクティブ・ラーニングを取り入れることにより、児童は、主体的・協働的な学びを通して、課題を解決していく力が身に付く。
- 学習集団や学習方法、家庭学習・学習環境を整備することにより、学習意欲を喚起し、学習内容の定着を図る。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

算数の授業を通して、主体的、協働的に学ぶ方法を取り入れることで、「学び合い・高め合う」授業を創造していくこととした。

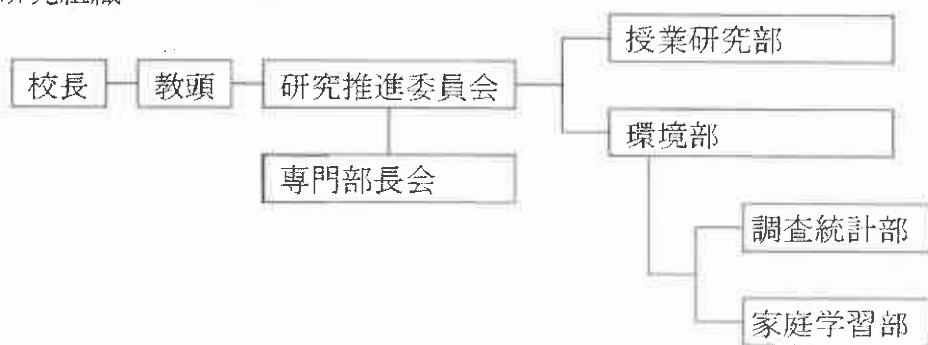
### (2) 研究主題設定理由

本校は25・26年度に、研究主題「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら学ぶ子の育成」、副題に「学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して」として、委嘱学校研究に取り組み、児童の実態把握をし、授業改善に取り組むとともに、学習環境整備を行うことで、児童は生活科、理科に対する関心、意欲が高まるとともに学力の向上を図ることができた。しかしその一方、科学的思考力、表現力を今後も高めるために、総合的に学ぶ力の育成が必要であり、研究の成果が今後も続くような組織作りと研究が必要であるといった課題が浮かび上がった。

また、世の中の動きに目を向ければ、新学習指導要領の改訂に伴う中央審議会等が開かれ、新しい我が国の教育の方向性が示された。その中で、教育課程の構造化が進められ、「育成すべき資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」すなわち、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業が重視されている。

そこで、本校では「主体的・協働的な学び」を算数科の学習過程の中に位置付けた研究を行うこととした。

### (3) 研究組織



(4) 全体構想

学校教育目標

かしこい子 すこやかな子 みりよくある子

目指す児童像

課題に対し、主体的に取り組むとともに  
自分の考えを表現し、発表・説明でき、  
他者の意見を取り入れながら、  
自分の考えを見直し、整理できる児童

協働的な学び

- ペアやグループによる話し合い活動
- アウトプット  
の機会を多くする事による定着



主体的な学び

- 美事に即した課題設定
- 視点の明確化
- 適切な評価
- 学習過程の工夫



学習環境の整備

- ★ 児童の算教科における実態把握
- ★ 「家庭学習のすすめ」の配布
- ★ 算数コーナーなどの教室整備

研究主題

学びあい 高めあう 授業の創造  
～アクティブ・ラーニングを取り入れた算数科学習～

児童の実態

(1) 学力分析より

- 平均点は、川越市平均より少し下。
- 算教科における学習状況を度数分布で調べると、きれいな正規分布を表す。つまり低学力の児童も多数いる。基礎基本が身に付いていない児童もいる。
- 2014年6月に行ったNRTにおいては、オーバーアチーバーが5%に対し、アンダーアチーバーが17%である。つまり、学習方法と学習習慣を身に付ければ、学力は上がる。

社会の要請・新しい時代に必要な資質能力

- ① 自立した人間として、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力
- ② 我が国の子供たちにとって今後重要と考えられる、何ごとにも主体的に取り組もうとする意欲や、多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、豊かな感性や優しさ、思いやり等
- ③ 新学習指導要領の方向性

### 3 実践事例

#### (1) 授業実践例（第4学年 わり算の筆算を考えよう）

##### ① 研究仮説に対する本単元の手立て

仮説1	単位授業や単元の中にアクティブ・ラーニングを取り入れれば、子どもたちは、主体的・協働的な学びをとおして、課題を解決していく力が身に付くであろう。
-----	--

<手立て>

- ア 単位授業は問題解決的な学習で進める。
- イ 主体的な学びとなるような課題を設定するなど、学習過程を創る。
- ウ 単位時間の中に協働的な学び入れる。(単元段階を実態に応じて)
- エ 単元を通して、アクティブ・ラーニングを取り入れ、より主体的、協働的な学びの場を設定する。
- オ 小集団活動の約束をきめ、自分の考えを発表しやすくする。

仮説2	学習集団や学習方法、家庭学習・学習環境を整備すれば、学習意欲が沸き、学習の定着が図れるだろう。
-----	---

<手立て>

- ア 単元により学習形態を変えていく。一斉、TT、習熟度別、少人数と内容によって選択し、定着を図る。
- イ 教室に算数コーナーを作り毎時間の発表を掲示していくことで、次の時間に活かす。
- ウ 教材の工夫により、導入、学習内容などに活かす。
- エ 教室に学習の進め方や自力解決のヒント、きまりなどを掲示していく。
- オ 家庭学習の習慣をつける。「学習のススメ」の活用や少しの時間での計算の定着度などを利用する。

##### ② 本時の学習（習熟度別学習 発展コース・15/16時）


###### ア 本時のアクティブ・ラーニング

単元のまとめの段階である本時では、16世紀のガレー法を提示し、自力解決後、グループで話し合い、協働的に解決していく過程をアクティブ・ラーニングとして取り入れていく。また、適応問題では、解答が進まない児童へ教え合う場を設定し、全員が自信をもって活動できた喜びを感じさせる。まとめは、児童の言葉で説明させたい。

###### イ 目標

- ・ ガレー法におけるわり算の計算の仕方について考え、グループでの話し合いで意見を出すことができる。 【関心・意欲・態度】
- ・ 既習事項を活用しながら、ガレー法の計算の仕方を考えている。 【数学的な考え方】
- ・ ガレー法におけるわり算の計算の仕方について説明できる。 【技能】

ウ 展開

学習活動 T：教師 C：児童	指導上の留意点 (AL：アクティブ・ラーニング ◎評価規準 ☆支援)	時間
1 問題を知る。	<p>問題</p> <p>173÷8の計算の仕方を考えよう。</p>	3
T：今日の問題は今までと少し違います。	<p>16世紀のガレー法を見せる</p> <p>☆プロジェクターでガレー法の式を何も言わずに提示する。</p>	
2 課題をたてる。	<p>課題 ガレー法の計算の仕方を説明しよう。</p>	
3 自力解決	<p>☆机間指導を行い、手立てを支援する。</p> <p>◎既習事項を活用しながら、ガレー法の計算の</p>	5
4 グループで発表し合う。	<p>仕方を考えている。【数学的な考え方】</p>	8
<p>AL1</p> <p>小グループで課題を解決する。</p> <p>①真ん中に式が書かれている用紙に見つけたことを書き込みながら話し合いを進める。</p> <p>②意見を比較しながら、ガレー法の解き方に隠れた式があることに気付かせる。 (ひき算や九九・短除法など)</p> <p>③意見をまとめる。発表者を決める。</p> <p>◎ガレー法におけるわり算の計算の仕方について考え、グループでの話し合いで意見を出すことができる。【関心・意欲・態度】</p> <p>☆話し合いがうまくまとまらないグループに、注目すべき点を助言する。</p>		
5 グループの考えを全体に発表する。	<p>・自分たちの考え方と類似点、相違点を比較させる。</p>	5
6 適応問題に取り組む。 (自力解決)	<p>◎既習事項を活用しながらガレー法の計算の仕方を考えている。</p>	3
7 グループで確認し合う。	<p>AL2 わからないところは教え合う</p>	3
8 自分の言葉でまとめる。	<p>【技能】</p>	3
9 本時の学習を振り返る。	<p>・本時の自己評価する(振り返りカード)</p>	2

4 成果と課題

① 成果○と課題●

- 実態に応じた学習課題の設定や話し合いの視点の明確化により、グループ活動が効果的にはたらき、児童のより深い理解や学習内容の定着に資することがわかった。
- 全学年で授業研究会を開催することにより、職員のアクティブ・ラーニングへの理解が深まり、主体的・協働的な学びを意識しての授業展開を行うことができるようになった。
- 学習過程のどの場面で、どの方法のアクティブ・ラーニングを取り入れていくかが体系化されていない。さらなる研究が必要である。

## 「友だちとかかわり、技能を高め合う児童の育成」

～わかる・かかわる・できる体育科授業を目指して～

川越市立霞ヶ関東小学校

### 研究のポイント

- 器械運動（器械・器具を使つての運動遊び）に関する教材研究と教具の作成
- 児童が運動好きになるための学校全体での取組
- 友だちとのかかわりを大切にした器械運動分野の授業実践

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

学校教育目標「たいようの子」の1つである「生き生きと活動する子」を目指すためには、「運動好きな子」の育成が大切であると考えた。そのためには、体育科授業の中で、苦手意識を持ちやすい「器械運動」に焦点を当て、取り組むこととした。

#### (2) 研究主題設定の理由

適切な運動は、私たちの生活を豊かにしてくれる。現行の学習指導要領では、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視している。学校体育では、「それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、基礎的な身体能力や知識を身に付け、生涯にわたって運動に親しむことができるように指導する。」となっている。

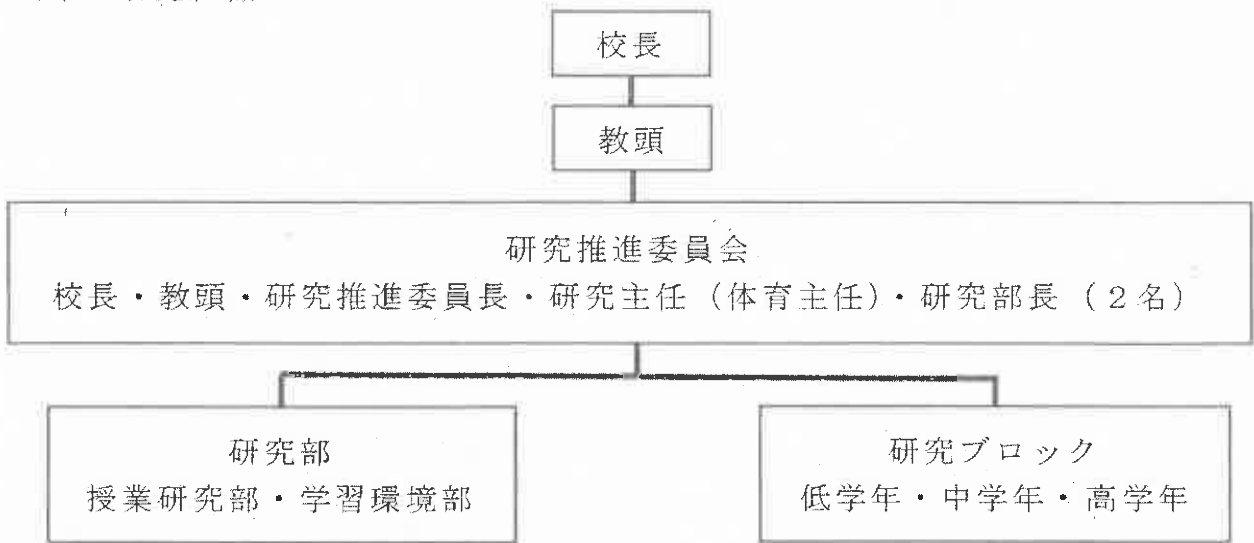
本校では、名人の取組（漢字・算数・運動・挨拶・読書）が定着し、各種学力テストの結果から、基礎学力については概ね全国や埼玉県の平均程度といえる。しかし、新体力テストの結果では、県平均には程遠く、学年によつての差も大きい。また、どの学年も握力や柔軟性、投力に課題がある。学校生活の様子をみると、明るく元気な児童が多いが、運動をする子とそうでない子の二極化が大きく、外遊びをしている児童が決まっており、外遊びをしない児童も多く見受けられる。

体育の授業では、体育が好きで意欲的に取り組む児童が多い。一方で、教師が身に付けさせたい運動の技能や特性を正確に理解することなく授業を進めてしまい、児童の運動量は豊富だが、思考する場面が少ない授業となることも少なくない。そのため、児童は思考判断を有する励まし合い、教え合いなどのコミュニケーションを進んで取ろうとする児童は少なく、与えられた課題を黙々と行っている姿が多く見受けられる。

そこで本研究では、体育科授業を通して、児童の体力・技能の向上を目指すとともに、目標に向かって練習する過程での励まし合いや教え合いなどの友だちとかかわり合う能力の育成を目指す。そのため、教師が運動の特性や

魅力、運動の仕方、技のポイントを理解し、児童への提示の仕方を研究していくことで、児童が安心して教え合い、関わり合える環境を目指す。

(3) 研究組織



2 研究の内容

《研究主題》

友だちとかかわり、技能を高めあう児童の育成

～わかる・かかわる・できる体育科授業をめざして～

目指す児童像【友だちとかかわり、技能を高め合う児童】

- 友だちと励まし合って、楽しみながら運動する子
- 友だちと協力して、進んで挑戦する子
- 友だちと教え合い、めあてに向かって努力する子

仮説に迫る手立て

研究仮説

- 仮説1 児童に運動の特性や魅力を味わわせ、技のポイントを理解させることができれば、児童の技能が向上するであろう。
- 仮説2 児童相互のかかわり合いを大切にしていけば、意欲を持って運動に取り組み、互いに技能を高め合うことができるであろう。

- 仮説1
- ①器械運動の技能分析・技の系統表の作成
  - ②教具の工夫
  - ③児童の体力向上を目指した取組



- 仮説2 ①場と学習形態の工夫  
 ②児童相互の声かけの工夫

### 3 実践事例

#### (1) 研究授業の実施

##### ①低学年ブロック 第1学年

日時 平成28年1月21日

単元名 マット遊び

(マットを使った運動遊び)

にんじゃにへんしんしよう

児童が意欲的に取り組める学習過程  
 (ストーリー性)と一時間毎に一つの共通の課題を設定し、教え合いのポイント  
 を明確にした児童相互の関わり合いに  
 視点を置き、授業を行った。

##### ②中学年ブロック 第4学年

日時 平成27年11月19日

単元名 マット運動(器械運動)

連続技に挑戦しよう

基本技の確実な習得のための指導の  
 工夫とグループでの教え合いに視点を  
 置き、授業を行った。

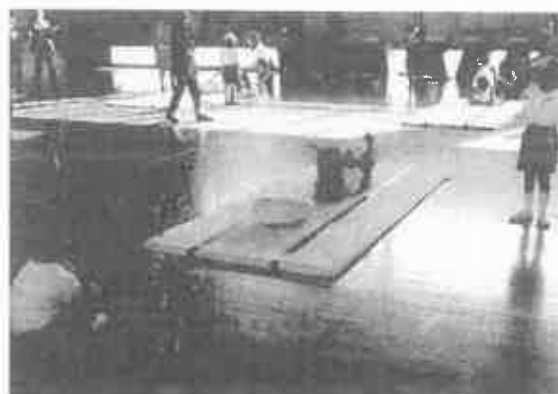
##### ③高学年ブロック 第5学年

日時 平成27年12月10日

単元名 跳び箱運動(器械運動)

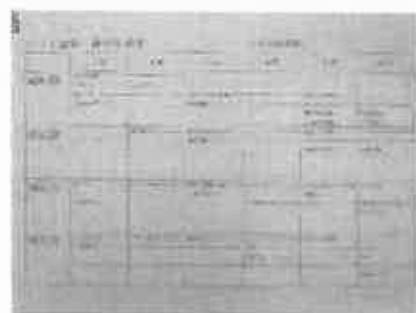
できそうな回転技挑戦しよう

多様な場の設定と教え合いに視点を  
 置き、授業を行った。



#### (2) 器械運動の技能分析・技の系統表の作成

本校で体育科準教科書として使用している  
 「体育の学習」(光文書院)等を使用して器械運  
 動の技能分析と技の系統表の作成を行った。



### (3) 学校全体での体力向上の取組

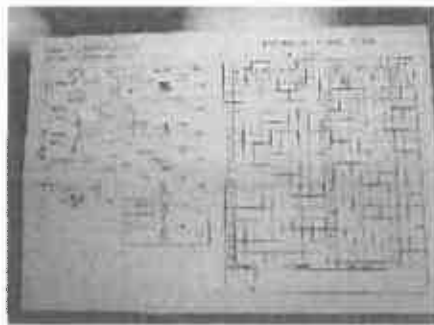
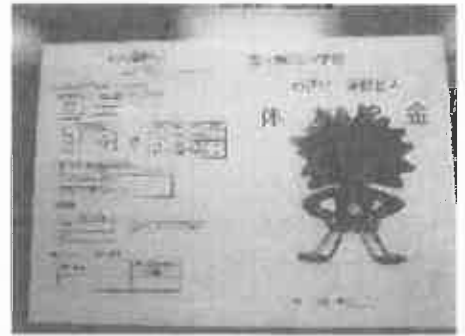
#### ① 運動名人の取組

学校全体で、休み時間や家庭での体力向上を目指し、体力貯金カードを活用した取組を行っている。

学期毎の重点内容

- 1学期 握力
- 2学期 持久力（持久走）・投力
- 3学期 持久力・跳躍力（縄跳び）

新体力テストの結果を参考に内容を決定した。



## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・「器械運動技の系統表」を作成し、それを活用することで、教師が技の系統性を意識して指導することができた。また、各学年での到達目標を明確に意識して指導することができた。
- ・器械運動の技の技能分析をもとに、授業の中での基本の運動や運動名人の取組に生かすことができた。
- ・作成した掲示物を活用することで、児童が技のポイントを視覚でとらえることができ、技のポイントを明確に意識させることができた。
- ・運動名人の取組や、休み時間に実施した鉄棒運動教室を通して、運動好きな児童を育成することができた。

### (2) 課題

- ・安全面や運動量の確保を考慮した上で、多様な場の設定について今後さらに検討していく必要がある。
- ・指導をさらに充実させるために、実技研修会などを取り入れ、指導力の向上を目指す。
- ・学校全体としての体育科授業の流れのさらなる統一を図り、児童の技能の向上を目指す。

研究主題

「子どもたち一人一人が『わかる・できる』を実感できる授業づくりの工夫」  
～ユニバーサルデザインの視点を取り入れた算数科指導～

研究のポイント

川越市立名細小学校

- ユニバーサルデザインの視点を取り入れて「すべての児童にとってわかりやすい授業の実施」と「学習環境の整備」を図り、学力と学習意欲の向上を目指す。
- 自ら課題を解決する児童の育成に向けて、ユニバーサルデザインの視点から、指示のしかたや資料の提示のしかたなどを工夫し、授業改善を図る。

1 研究の概要

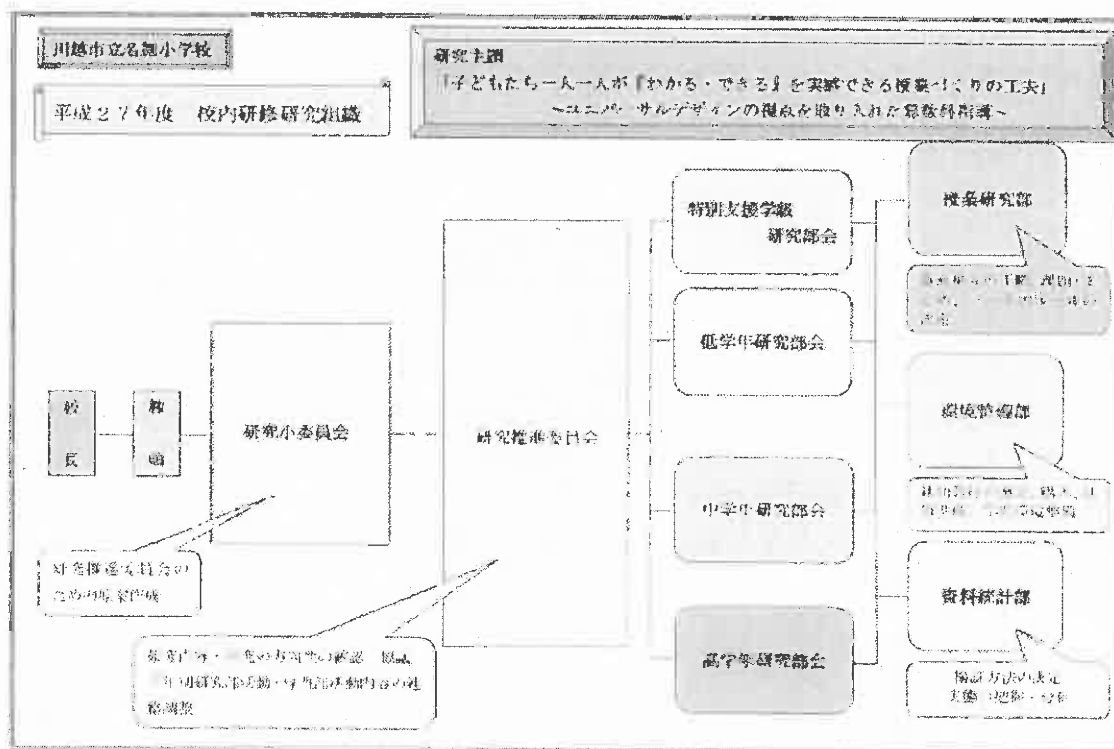
(1) 研究のねらい

配慮を要する児童だけでなく、すべての児童にとっての「わかる・できる」を実感できる授業を目指し、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについて理解を深め、授業の工夫改善をする。

(2) 研究主題設定理由

文部科学省の調査（平成24年度）によると、知的発達の遅れはないものの通常の学級における特別な教育的支援を要する児童生徒の割合が約6.5%にのぼるといわれている。本校において、各学級に支援を要する児童が、文部科学省の調査の割合よりも多く在籍する実態がある。学力の二極化も見られる本校の現状では、すべての児童が「わかる・できる」経験を実感できる授業づくりを行い、学習意欲を高めていくことによる基礎基本の定着が必要とされる。そこで、本研究では、このような授業づくりはどうか、その在り方を探り、児童の学力と学習意欲の向上を図っていきたいと考えた。

(3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) めざす児童像について

基礎的・基本的な内容を身につけ、自ら課題を解決する児童

### (2) 仮説について

多様なニーズに応じた支援や配慮を行えば、「わかる・できる」を実感できる授業になるだろう。

#### ※ 仮説についての補足

以下の3つのステップで仮説について実践し「めざす児童像」の実現を図る。

ア 明確で具体的に決めたルールや手順を徹底すれば、基礎的・基本的な内容が身につくだろう。

イ 基礎的・基本的な内容を身につけさせた上で、多様なニーズに応じた支援や配慮を行えば「わかる・できる」を実感できる授業になるだろう。

ウ 「わかる・できる」が実感できる授業を続ければ、自ら課題を解決する児童になるだろう。

### (3) 具体的な手立て

#### ① 授業の見通し・組み立て

ア スタートとゴールの明確化（見通しを持たせることで学習意欲を喚起する）

- ・重点単元では「課題」と「まとめ」を毎時間、学年間で統一する。（授業研究部で検討・決定）

イ 一定の流れによる授業の組み立て

- ・授業の中で使用する「問題」、「課題」、「解く」、「まとめ」の文言を全校で統一する。（授業研究部で検討・決定、環境整備部で掲示物作成）また、授業のはじめは「重点単元に関連する復習」、最後は「適用問題」を行う。

ウ 明確で具体的なルールや手順

- ・ノートのルールの共通理解（児童への徹底）  
1マスに1数字で大きく使う。式と式の間をしっかりとあける。補助計算も大きく書く。何度も消さずに新しく書き直す。等（授業研究部で検討・決定）
- ・重点単元の具体的な手順・方法の共通理解（児童への徹底）  
「1年」→たし算のくりあがりの数字を書く場所等  
「6年」→分数の計算の途中式の内容等（授業研究部で検討・決定）

エ 多様なニーズに応じた支援や配慮

- ・補助教材の選定、購入、活用、作成
- ・学習環境の整備（プリント・カードの保管場所の整備）（環境整備部で検討・決定）

#### ② 本年度の重点単元

スキルアップタイムでの継続的な習熟、指導時数の増加、夏の補習で取り上げる等の取り組みを行う。

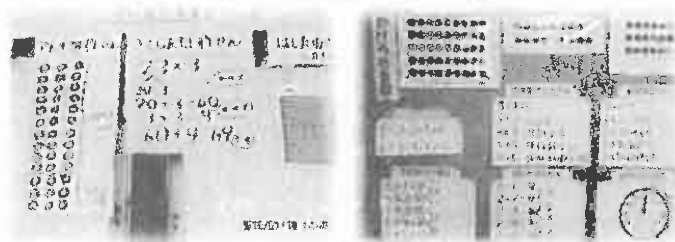
- 1年 くりあがりたし算、くりさがりのひき算
- 2年 かけ算九九
- 3年 かけ算の筆算
- 4年 2けたのわり算（わり算の筆算）
- 5年 小数のかけ算・わり算（数直線の書き方）
- 6年 分数の計算

### 3 実践事例

#### (1) 授業研究部

- ア 重点単元の明確な手順・方法の検討・決定。
- イ 重点単元の1時間毎の課題とまとめの検討・決定。
- ウ ノートのルール of 検討・決定。
- エ 指導案の形式の決定・周知。

既習事項の掲示



#### (2) 環境整備部

- ア 補助教材・プリント資料選定・購入
- イ スキルアップタイム用プリント作成
- ウ 全クラス共通黒板掲示用マーク作成
- エ プリントの保管場所の整備
- オ 算数科資料室整備・教具移動
- カ 本年度使用教材の収集・保管

プリント保管用ケース



#### (3) 資料統計部

- ア 児童への意識調査
- イ 学力調査結果の課題領域調査
- ウ 意識調査の統計・分析
- エ 検証方法の決定
- オ 検証結果の統計・分析

#### (4) 講演

- ア 講演『ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり』  
講師：越谷市立特別支援学校 教頭 高橋 雄一 先生
- イ 講演『発達障害児童への対応の仕方』  
講師：川越特別支援学校 教諭 新井 真由美 先生
- ウ 講演『ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践と児童対応』  
講師：十文字学園女子大学 人間生活学部児童教育学科 阿子島 茂美 先生

#### (5) 授業実践事例

- ア 平成27年10月 5日 第2学年『新しい計算を考えよう 「かけ算(1)」』

一定の授業の流れ (も：問題 か：課題 と：解く ま：まとめ)



- イ 平成27年10月20日 入間地区算数数学教育研究協議会授業研究会  
第1学年『たし算』  
第4学年『面積のはかり方と表し方』  
第5学年『単位量あたりの大きさ』
- ウ 平成27年11月12日 第6学年 『比例と反比例』
- エ 平成27年11月24日 特別支援学級『面積のはかり方と表し方』
- オ 平成28年 1月18日 第3学年 『かけ算の筆算(2)』

スキルアップタイム



付箋紙とワークシートを使用した研究協議



#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 成果

- ・毎時間の授業の流れを同じにし、毎回「スキルアップタイム（重点単元の習熟）」から授業を開始することで、授業に対する心の準備（学ぶ構え）ができた。
- ・「課題」と「まとめ」を明確にすることで、児童が見通しを持って学習できるようになり、教師側も本時の到達目標を意識することができるようになった。
- ・視覚に訴える具体物や具体的な操作を伴う教材を示すことで子どもたちの興味、関心をひくことができ、意欲喚起につながった。
- ・「算数コーナー」に既習事項を掲示することで、児童が既習の学習内容を想起することができ、本時の学習の手がかりとなった。実際に多くの児童の活用が見られた。

##### (2) 課題

- ・具体物の活用は効果的だが、発達段階に応じて使用場面を検討する必要がある。
- ・支援を必要とする児童に対し、習熟度と発達段階に応じて支援を行いたい。
- ・資料を視覚化する際は、どこを焦点化するかを意識してシンプルに視覚に訴えるものにした
- ・配慮が必要な児童の座席を検討し、すぐに支援できる場所に配置したい。
- ・学年をまたぐような基礎基本の未定着がある児童の本時の課題への取り組みせ方をどうすればよいか。

具体的な操作



「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究」  
～言語活動の充実を踏まえた「わ・た・しの授業」の実践～

川越市立高階西中学校

— 研究のポイント —

- 知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動を授業の中に位置付ける。
- 学ぶ意欲を引き出し、自己肯定感を高めるための学習環境を整える。
- 授業規律、あいさつ、発言の仕方を見直し、主体的に授業に取り組む姿勢を育てる。
- アンケート結果を、分析し、生徒の実態を把握して取り組む。

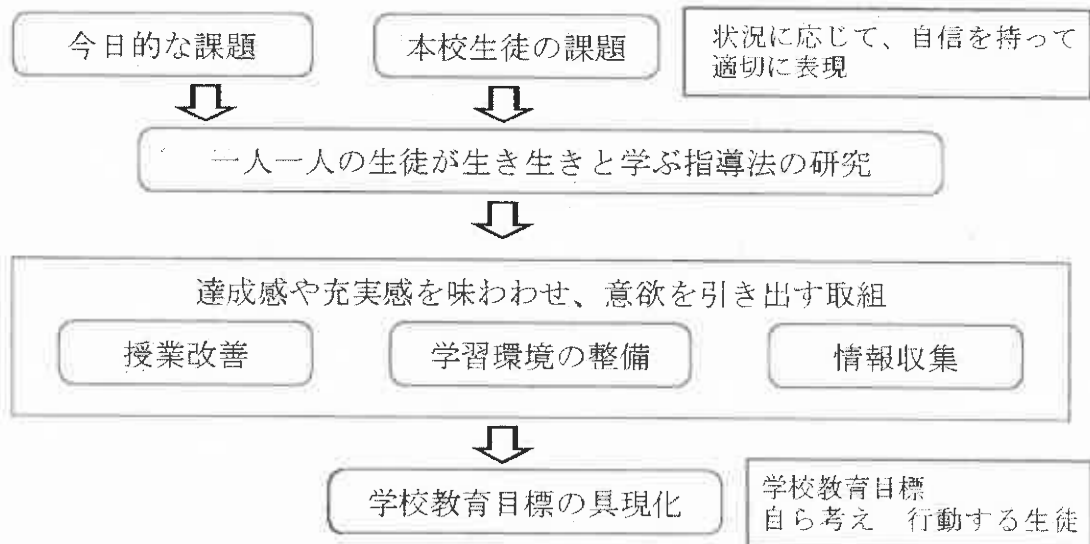
1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「わかる授業」「楽しい(たのしい)授業」「主体的(しゅたいてき)な授業」の『わ・た・しの授業』を合い言葉に、生徒が主役となり、教師主導型の授業から、問題解決的な生徒主体の授業への転換をし、達成感や充実感を味わえる授業の取り組みと指導法について研究をする。

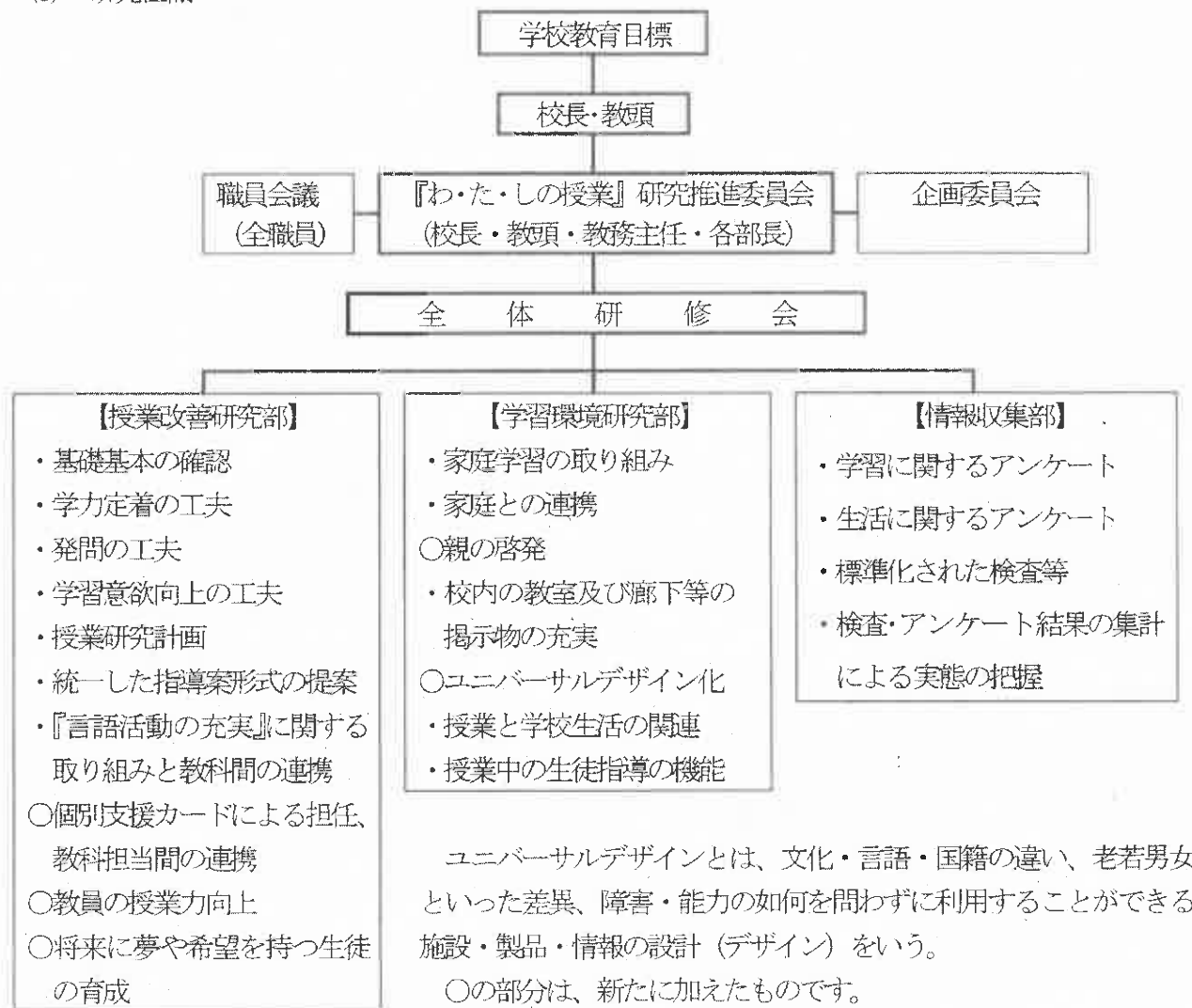
前回の研究では、「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法」を具現化するために、教師が「わ・た・しの授業」を充実させ、基礎・基本の確実に定着させるとともに、言語活動の充実が必要であると考えた。前年度までの2年間の研究に引き続き、今回の2年間を合わせ4年間の研究になる。前回は踏襲した内容を含み、「言語活動の充実」を、思考力・判断力・表現力の育成を図るためのものと捉え直すとともに、新たに『一人一人』の部分に着目した。授業の中でどのように『一人一人』の生徒が自ら学んでいけるか、場面設定や、アンケート等を通じた意識の変化についても調べていくことにより、生徒の変化を確かめていく。

(2) 研究を含めた全体の流れ



『状況に応じて自信を持って適切に表現する』ことが、本校生徒の一番の課題である。その課題解決のためには「わ・た・しの授業」を充実させることが重要であると考え、全教職員で取り組んできた。さらに「一人一人の生徒が生き生きと学ぶこと」を本主題として設定することにより職員一人一人の研究の方向性が定まり、大きな成果が得られるものと考えた。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 研究仮説

知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ることにより生徒が生き生きと学ぶことができる。

#### ① 手立て1

各教科において、言語活動を充実させた授業を行えば、生徒の思考力、判断力、表現力を育むことができ、生徒が生き生きと学ぶことができる。

ア 年間指導計画の見直しを図り、『言語活動の充実』の項目を加えるとともに、各教科・領域で『言語活動の充実』を図る授業を展開する。



イ 学習指導要領における目標・内容をもとに、学習目標、4観点（「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」）の学習評価を明確にし、各単元の評価規準、学習活動における評価規準をもとに、指導と評価を行う。

ウ 授業では、1時間あるいは1単元を通して、基礎・基本の定着を重要視して授業を行う。

## ② 手立て2

学習内容を精選し、指導方法の工夫・改善により、「基礎・基本」の定着を図れば、生徒が自信を持ち、生き生きと学ぶことができる。

ア 授業計画(1時間、1単元)の中で評価場面を設定することにより、生徒のつまづき、理解や習熟の度合いを観察・把握する。

イ 個別指導や繰り返し指導、補充学習を行うことにより、個に応じたきめ細やかな授業を行うことにより、基礎・基本の定着を図る。

ウ 自己評価カード等を活用することにより、学習の定着、自己の成長が見い出せるような工夫をする。

エ 習熟度別学習、個別学習、グループ学習等の学習形態を取り入れ、学習内容に合わせた取組をする。

オ 学校図書館やコンピュータ教室等の施設を活用するとともに、デジタル教科書の活用により、生徒の興味・関心を高める工夫をする。

カ 観察・実験、調査・研究、発表・討論などの体験的な学習、問題解決的な学習を通して、言語活動の充実を図る授業を展開し、思考力、判断力、表現力などを育成する。

キ 課題を与えるだけでなく、自分で見つけられるような授業の展開を工夫する。

## ③ 手立て3

学習規律を確立し、学習環境を整えれば、落ち着きがあつて、しっかり考え安心して発表ができる授業が展開され、生き生きと学ぶことができる。

ア 始業、終業、号令、あいさつ、発表の仕方等の確認と確実な実施。

イ 教室、廊下を含めた教室環境、及び、昇降口、各階踊り場、特別教室、職員室等の掲示物の充実と整備を図る。

ウ 学級活動、特別活動等の充実を図る。(自主的な活動、自己存在感の感じられる学級・集団)

エ 家庭学習ノートの活用により、自分から進んで学習に取り組む姿勢を育てる。

## 3 実践事例

### (1) 研究授業の実施

校内研修として、各自が「わ・た・しの授業」を実践し、年間1回以上、指導者を招いた授業研究会を実施した。

### (2) 家庭学習の取り組み

全校生徒が家庭学習を毎日行い、取り組んだ内容をノートに記入し、翌日の朝に提出をする。毎日忘れずに提出した生徒、工夫したノートを作成した生徒に賞状を出す。

賞状：○年間完璧提出賞 ○月間完璧提出賞 ○ベストノート賞

提示：○週間完璧提出賞

意欲的に家庭学習に取り組ませることで、学力向上を目指す。

また、「家庭学習ナビ」という家庭学習への取り組みを解説した冊子を作り、年度初めに学年集会等で家庭学習について指導する。

(3) 授業改善のための取組

知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動を授業の中に位置づける。

- ① 基礎基本を身に付けさせるための取り組みを行う。
- ② 助言の工夫をする。
- ③ 言語活動を充実させる。

(4) 教室、校内環境の整備

授業規律・挨拶・発言の仕方など当たり前にやってきたことを明文化し、統一して掲示した。また、「高階西中学校生活の基本」をもとに、

- ① 時を守り → ノーチャイム      ② 場を清め → 洗心無言清掃
- ③ 礼を正す → 語先後礼

を具体的な取組として実践した。『洗心無言清掃』に取り組み、静寂の中で清掃に取り組める環境づくりをしている。

(5) 教育センターに研修の会場を変え、複数の教科書会社の教科書を見比べながら指導する内容を確認し、年間指導計画作成に向けて教科研修に取り組んだ。

#### 4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 今日の課題を提示し、言語活動の充実を図る活動の場面を、授業の中に意識的に取り入れるようになった。
- ② 教材研究への取組を増やすなかで、導入の工夫や生活に関連した資料の提示をする機会を増やし、生徒の意欲的な態度につなげることができた。
- ③ 家庭学習ノートの取組を行うことで、学習習慣の定着が図られ学習意欲を喚起できた。
- ④ 教員の共通理解を図り、基本的な学習環境を統一していくことで、教員が一体となって取り組んでいこうという態度が生まれ、環境整備や授業改善の意識向上につながった。
- ⑤ 共通理解を図るなかで、学習規律を確立し、学習環境を整えたことで、落ち着いた授業が展開され、安心して発表ができ、生徒が生き生きと学ぶことができた。

(2) 課題

- ① わかる授業・楽しい授業・主体的な授業を展開するために、与えられた課題だけでなく、自ら課題を見つけられるような授業の展開を図ること。
- ② 効率的に基礎・基本の定着を図りながら、生徒の主体的な活動の充実を図ることとともに、評価の工夫をしていくこと。
- ③ 授業の改善や環境づくりを継続的に取り組むために、より一層の共通理解を図ること。
- ④ 来年度からの新しい教科書に向けた年間指導計画を作成し、各教科・領域等で1時間毎の評価規準とともに、「言語活動の充実」の手立てを明確にしていく。
- ⑤ 家庭学習ノートの取組を意識させ、より充実した計画的な家庭学習に取り組ませること。

## 研究主題

### 「豊かな心の育成と自己実現の支援」

～生徒一人一人が主体的に活動し、満足感や充実感を味わえる教育活動を目指して～

川越市立寺尾中学校

#### — 研究のポイント —

- 「わ・た・しの授業」に取り組む。
- 自ら研究テーマを決め「一人一研究」に取り組み1年間研究を進める。その際、自己評価シートとリンクさせた目標設定を行う。
- 職員一人一人の特性、経験年数、実践、校務分掌を活かした研究を進める。
- 外部講師を招聘し、広い視野から研究を評価していただくことで研究を深める。
- アンケートを分析し生徒の実態を把握する。PDCAサイクルの下で取り組む。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

#### ①学力の向上

- ア 「わ・た・しの授業」(わかる授業・楽しい授業・主体的な授業)を行う。
- イ 基礎学力の定着を図る。
- ウ 家庭学習ノートの充実を図る。

#### ②自尊感情の育成

- ア 「わかった」「できた」「伸びた」が実感できる授業づくりを行う。
- イ 道徳教育を充実する。
- ウ アンケートを分析し生徒の実態をつかむ。

#### ③職員の指導力向上

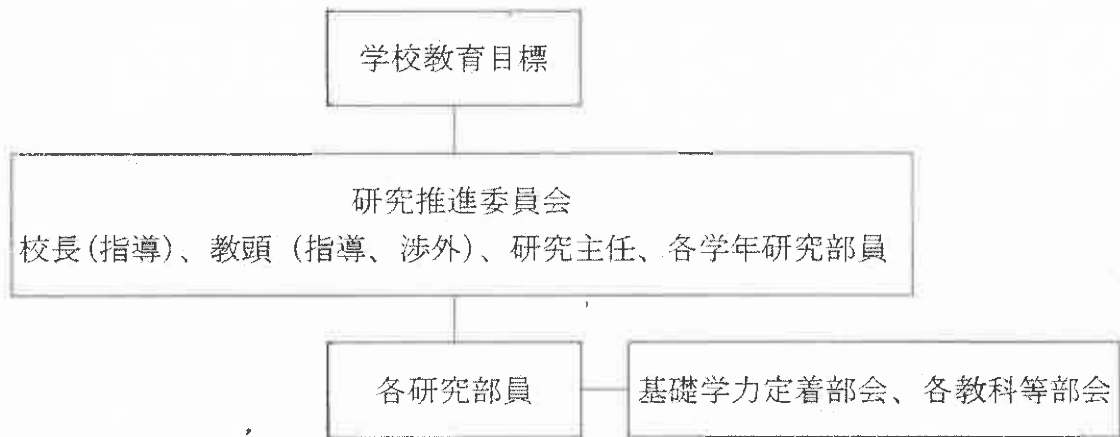
- ア 校内研修の指導者を校内でまかない、職員の指導力向上を図る。
- イ 研究主題を踏まえ、研究テーマを職員一人一人が決定し、主体的な研修とする。
- ウ 自己評価シートとリンクさせ、日々の実践の中で研修を深める。

### (2) 主題設定の理由

本校の学力は県、川越市の平均をやや下回る傾向にあり、特に活用の場面では課題がある。全国学力・学習状況調査質問紙では「話を聞き発表する」「あいさつ」に課題がある。また、「自分には良いところがあると思いますか」では65.9%となっており学力の向上と自尊感情の育成は喫緊の課題である。

校長の掲げる学校教育目標「気づき 考え 実行する 心豊かな生徒」の育成のため、「P3Cチーム寺尾」として総力を挙げて取り組む。そのため、研究方針を「チーム寺尾の底力」3つのP(誇り、情熱、期待)の向上とした。主体的な研修を進め、「誇り」である生徒が寺尾中に通えること、保護者が通わせていること、職員が働けていることにそれぞれ「誇り」が持てるという学校を目指していく。

### (3) 研究組織



### 2 研究の内容

- (1) 研究推進委員会を組織し、研究の基本方針、重点、計画等を検討し職員に共通理解させる。本年度の重点を「自尊感情の育成」とし、研究を評価する項目として「学校が楽しい」と感じる生徒が85%以上になることを目指す。
- (2) 「一人一研究」を行う。
  - ① 校務分掌等を生かした校内研修の場での発表もしくは指導者として、成果を還元する。
  - ② 「わ・た・しの授業」を実践し、研究授業と研究協議を行う。指導案を教科部会で検討し、学年を横断した研修とする。外部から指導者を招聘する。
- (3) 教育フェスタKAWAGOE、川越市教育研究協議会に参加し意見をいただき、研究を深める。
- (4) 外部講師を招聘し全国、県、市の動向について研究し理解を深める。

### 3 実践事例

#### (1) 道徳のシラバス作成、通知票への評価

生徒と先生	
道徳	道徳の時間
単元・単時の名称	評価
道徳の時間	道徳の時間

第3学年「道徳」シラバス		
単元・単時の名称	単元・単時の内容	評価
道徳の時間	道徳の時間	道徳の時間

通知表の上部に道徳の時間の評価欄を設けた。

シラバスは道徳部会を中心に検討を重ね、保護者会で配布した。

## (2) 道徳授業研究会の実施

	月 日	授業者	単元・題材名	指導者
道徳	7月2日(木) 第6校時 2年3組	渡邊 学 (道徳教育推進 教師)	「ロスタイムの続き」 夢を持ち続ける生き方 1-(4)	古川慶子先生 (三芳町立三芳小 学校長)

道徳教育は「豊かな心」を育成する基盤と捉え道徳教育部会で指導案を検討、全職員が研究協議に参加した。

特別の教科、道徳の授業展開の工夫と評価について協議が行われた。



## (3) てらりんぴっくの取り組み

基礎学力定着テストを「てらりんぴっく」と称して年2回実施した。全校一斉のテストであり、クラス単位で平均点上位をめざす。全校で家庭学習に取り組んだりクラスでは班ごとに教え合ったりする姿が見られた。



### ① 第1回てらりんぴっく(漢字)の実施(7月)

基礎学力の定着を図るため、基礎学力定着部会・国語科部会を中心として7月に全校一斉に漢字テスト(50題)を実施した。合格は80点以上である。

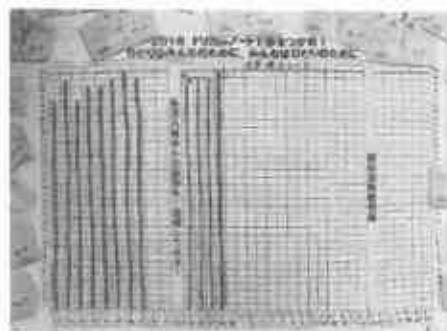
あらかじめ部会で検討しておいた漢字100題を生徒に配布し、家庭学習で練習させる。全学年共通問題のテストのため、基本的な漢字も出題されるが、とめ・はね・はらいなど間違いやすい問を意図的に出題し、基礎基本の定着を図った。

### ② 第2回てらりんぴっく(数学)の実施(10月)

基礎学力の定着を図るため、基礎学力定着部会・数学部会を中心として10月に全校一斉に数学計算テスト(50題)を実施した。部会で選定した100題を家庭学習や授業の導入で取り組ませた。2年生、3年生にとっても既習事項を再確認することができ、自信と意欲が向上した。

## (4) 家庭学習ノートの取り組み

家庭学習の定着を図るため、家庭学習ノートに全学年で取り組んでいる。学級会で目標を定めたり、目標を達成するための策を話し合ったりして生徒が主体的に取り組めるようにしているまた、学校だより、学年通信等で家庭に協力を求め、よいノートの例を掲示している。



## (5) 研究授業・研究協議

	月 日	授業者	単元・題材名	指導者
道徳	7月2日(木) 第6校時	渡邊 学 2年3組	「ロスタイムの続き」 1-(4)	三芳小学校 古川慶子校長先生
国語	11月4日(水) 第2校時	高橋 北斗 3年4組	いにしへの心と語らう 「歌物語をつくろう」	南古谷中学校 天達新一校長先生
社会	11月11日(水) 第2校時	八代 徹平 2年3組	歴史分野 「開国と近代日本の歩み」	川越市教育委員会 矢部智史主幹
理科	11月11日(水) 第3校時	副田愛綾奈 1年3組	身のまわりの物質 「物質の融点と沸点」	高階中学校 大野光男教頭先生
家庭	11月25日(水) 第2校時	富士 夏実 2年1組	家庭分野 「日常着の活用」	藤小学校 酒本希未教頭先生
美術	12月2日(水) 第3校時	清水眞由美 1年3組	A表現(1) B鑑賞(1) 「自分カレンダーの制作」	霞ヶ関南小学校 石野道子先生
英語	12月10日(木) 第5校時	宮根千佳代 2年3組	Program 9-1 A priest in a Mask(比較)	港区赤坂中学校 北原延晃先生
保体	12月16日(水) 第2校時	佐藤 維子 3年1, 2組	陸上競技 (長距離走)	山田中学校 文屋芳浩校長先生
保体	1月18日(月) 第2校時	田端 政弘 2年3, 4組	「武道」(柔道)	川越市教育委員会 谷口泰夫副主幹
保体	1月19日(火) 第2校時	中澤 逸郎 1年1, 4組	「武道」(柔道)	芳野中学校 藤下純二教頭先生
数学	2月17日(水) 第2校時	渡邊 学 2年3組	図形の性質 「図形の性質と証明」	ふじみ野市立花の木中学校 榎本一夫校長先生
数学	2月29日(月) 第2校時	守岡 信一 3年1組	課題学習 「折り紙を折って考えよう」	川越市立教育センター 馬場雅史副主幹

## 4 研究の成果と課題

＜川越市児童生徒学習・生活状況調査 H26, H27年度 より＞

調査	質問内容	H26 1年	H27 2年	H26 2年	H27 3年
No.5	だれに対しても進んであいさつをすることができますか。	84.1%	84.1%	79.7%	84.7%
			昨年度比-		昨年度比◎
No.10	先生の話や友だちの発表を聞き、自分の考えを伝えることができますか。	79.5%	75.1%	73.7%	81.0%
			昨年度比△		昨年度比◎

## (1) 成果

- ・昨年度「あいさつ」に関しては、学年が上がるにつれて生徒の自己評価が下がる傾向であったが、今年度は全校の平均が84.1%となった。
- ・「話を聞き発表する」では3年生が昨年度よりも7.3%上昇した。
- ・本年度の生徒・保護者アンケート結果から
  - 「わたしの授業」に対しては約80%の家庭が好意的に評価している。
  - 「洗心無言清掃」については97.5%の生徒が進んで取り組んでいると評価している。

## (2) 課題・本年度の生徒・保護者アンケート結果から

- ・学習面では基礎学力の向上に大きな期待がある。また、粘り強く取り組んで、精神面でも大きく成長して欲しいという期待が大きい。職員の自己評価では指導が形骸化しているという意見もある。校長の指導の下、指導方法の見直しを行い、職員間で共通理解の下、組織的な指導を行えるよう研修を継続していきたい。

## 研究主題

### 「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」

～つくりだす喜びを十分に味わわせ、豊かな表現力を育成する図画工作科指導の工夫～

川越市立川越第一小学校

#### 研究のポイント

- つくりだす喜びを十分に味わい、造形的な創造活動の基礎的な能力を培う授業が展開できるようにする。
- 児童の実態を把握し、得手不得手に応じて基礎的な能力を高めることで、つくりだす喜びを十分に味わうことができる児童の育成を図る。
- 図画工作科と実生活を結びつけるために、校内展示や鑑賞力アップコーナーを設置し、五感を豊かに働かせることができるような環境を整備する。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校では、教職員のアンケート結果から、図画工作科指導における悩みや思いとして、次の二つのことが挙げられた。一つ目は、「『絵画』『版画』『粘土』等の技法を学びたい。また、その指導方法を身に付けたい」ということであり、二つ目は「豊かに表現させるための支援の仕方を知りたい」ということであった。

さらに、児童の実態調査からは、9割以上の児童が図画工作科の学習を楽しみにしている反面、「学年が進むにつれ、発想の段階で困っている児童が増えている」や、「用具の使い方や様々な技法を知り、参考にしたいと思っている児童が多い」ということが分かった。

このような実態を踏まえて、教職員の図画工作科指導力の向上とともに、つくりだす喜びを味わい、思いを豊かに表現できる児童の育成を目指して図画工作科の研究に取り組むこととした。

### (2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標である「四つのだいじ」教育の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「つくりだす喜びを十分に味わわせ、豊かな表現力を育成する図画工作科指導の工夫」とした。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

### (1) 研究仮説

- ① 一人一人の思いを生かせる場作りをすれば、つくりだす喜びを十分に味わう児童を育成できるだろう。
- ② 題材のねらいを存分に味わえる学習過程の工夫を行えば、豊かに表現できる児童を育成できるだろう。

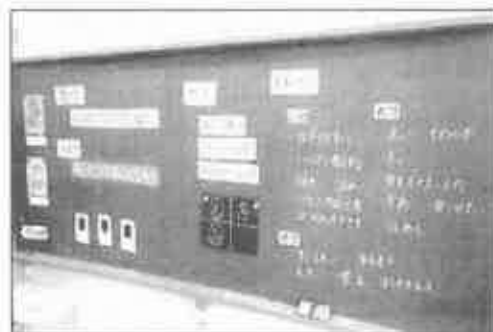
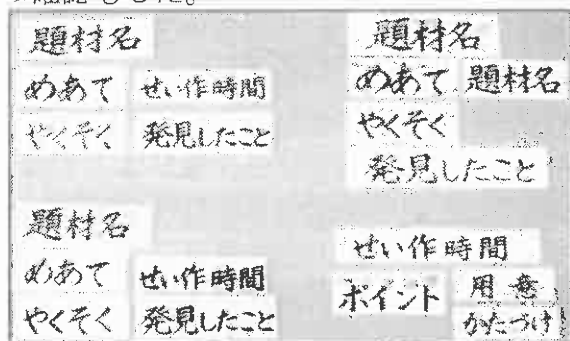
### (2) 研究の手立て

- ① 技法を学ぶための実技研修の実施
- ② 指導者による授業実践指導
- ③ 提示資料や掲示物の作成と図工室及び用具の整備
- ④ 授業研究会による効果の検証

## 3 実践事例

### (1) 授業研究部

- ① 「題材名」「めあて」「約束」「ポイント」「制作時間」「発見したこと」等、よく板書に使用するカードをマッピング、クレヨンのぼかし、絵の具のにじみ、ローラーの4種類の技法を背景にして作成し、各学年に配布した。また、板書形式の確認もした。



- ② 先進校の指導案を参考に、本校の指導案の形式を決め、授業研究会では授業を見る視点を焦点化した。
- ③ 授業で使った学習カードのデータを学年ごとに保存し、共有できるようにした。
- ④ 各学年の授業実践を指導系統性として一覧表に整理した。

図工の指導系統性（2学期まで）

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
絵画	【絵の具の使い方】 ・共同絵の具 ・筆の使い方 【クレヨン】 ・スクラッチ ・こすり 【ローラー】	【絵の具の使い方】 ・パレットの約束 ・3色で色作り 【クレヨン・パス】 ・ぼかしの方法 【シャボン作り】	【絵の具の使い方】 ・ぼかし・混色 ・筆の使い方 【下絵作り】 ・ビー玉・ボンボン ・ブラッシング	【絵の具の使い方】 ・混色（線作り） 【下絵作り】 ・ビー玉・ストロー ・スパッタリング 【クレヨン】 ・スクラッチぼかし	【用具の使い方】 ・ローラー ・クレヨン ・わりばしペン ・墨汁 小筆 【イメージスケッチ】 【デジカメの使い方】	【技法】 ・遠近法 ・墨を使って絵を描く
版画	【紙版画】 ・スタンピング	【スチレン版画】 ・ローラーの約束 ・片付けの仕方	【木彫り版画】 ・彫刻刀の使い方 ・インクの刷り方 【ローラーの技法】	【木彫り版画】 ・彫刻刀の使い方 ・インクの刷り方 【ローラーの技法】 ・一つのかたまりから作る ・紙粘土 ・アイディアスケッチから作成	【糊り進み版画】 ・ローラーの使い方 ・試し刷り	【スチレン版画】 ・グラデーション ・糊りの工夫
粘土		・かたまりから作る ・つものつもの ・あなあな	・絵の具を混ぜる ・ダイナミックな作品作り ・にぎる・ひねる ・つまむ・のばす等	・一つのかたまりから作る ・紙粘土 ・アイディアスケッチから作成		
木工			・のこぎりの使い方 ・やすりの使い方 ・接着剤の使い方		糸のこの使い方 ・車輪 片付け ・曲線の切り方	・かぎつき ・たばつき ・塗りの仕方
立体	・空き箱の接着方法 ・組み立て ・材料の組み合わせ		・光と影のいっし方			【接着方法】 ・紙と紙 ・紙と布



(2) 調査技法部

① 児童の実態把握のため、アンケート調査を7月と12月の計2回行い、変容を考察分析した。

② 子どもたちが自分の作品をつくるときに、今までに習った技法を思い出して使えるようにするため、掲示物としてまとめた。取り扱ったのは、以下の4種類である。

ア クレヨン技法「ぼかし」



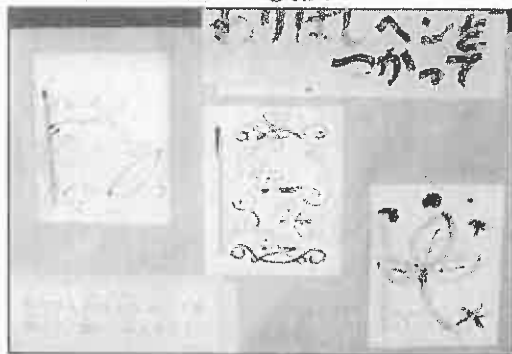
イ クレヨン技法「スクラッチ」



ウ 絵の具技法「にじみ」と「かさね」



エ 割りばしペン技法



③ 各学年の授業実践から、どの学年でどのような道具の使い方を指導し、どのような技法を身につけさせるべきかを明確にし、系統表にまとめた。

(3) 環境整備部

① 児童にとって学習が進めやすくなるよう、以下のように道具の使い方や置き場所を表示し、図工室の環境整備を行った。

ア 彫刻刀の使い方



イ 電動糸のこぎりの使い方



ウ 収納棚に写真を表示



エ 収納の仕方を表示



- ② 児童が普段通っている廊下等に絵や作品を置き、いつでも鑑賞することができるようにした。実際に見て、絵の不思議さや面白さを実感できるようにした。

ア わくわく広場・職員玄関の作品展示コーナー



イ 鑑賞力アップコーナー



ウ 図書室の図画工作関連書籍の展示



#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 成果

- ① 実技研修会で学んだ様々な技法を指導に生かすことができた。
- ② 授業実践指導により、児童の動線を考えた場作りが充実し、授業展開に広がりが見られ、児童への声かけ場面も増えた。
- ③ 児童が技法を紹介する掲示物を参考にして作品づくりに生かすようになった。
- ④ 道具の正しい使い方や生かし方が分かり、児童の表現力が広がった。
- ⑤ 授業研究の回数を重ねるごとに学年の系統性を意識した指導場面が増え、指導力の向上につながった。

##### (2) 課題

- ① 立体作品の指導についてはまだ課題が見られ、技法を学ぶ必要がある。
- ② 系統性を意識して技法指導ができるよう題材や年間指導計画の見直しが必要である。

## 研究主題

### 「規律ある態度を育成し、学力向上を図る教科指導と学級経営に関する研究」

川越市立古谷小学校

#### — 研究のポイント —

- 第6学年児童については、79名の当該学年を3学級編制とし、きめ細やかな指導を実施することで、学級経営の充実を目指す。
- 担任と連携した算数科少人数指導と生徒指導の実施により、学力の向上と生徒指導の充実を目指す。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

ア 第5学年児童の算数科の学級コース別指導を通して低学力の児童の学習規律の定着と学力向上を図る。

イ 第6学年児童の算数科の学年コース別指導を通して学力のレベルに合わせた指導で、学力向上を図る。

ウ 第5学年、第6学年児童の担任と連携した生徒指導の充実を図る。

### (2) 研究主題設定理由

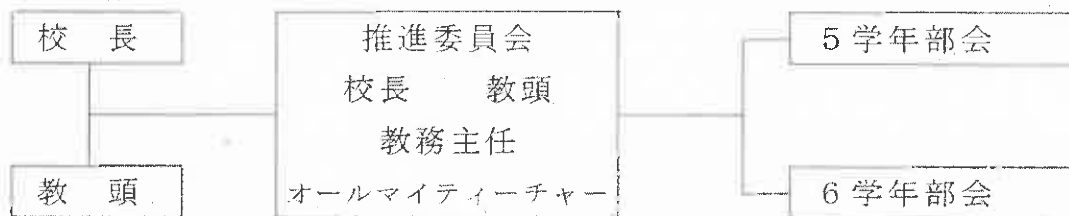
現6学年は、一昨年度、40人ずつの2クラスの学級編制で新学期がスタートしたが、生徒指導上の課題を抱える児童が多数在籍していることもあり、1クラスが6月ごろから、次第に担任の指導が通らない状況に陥った。このため、学級が上手く機能しない状況に係る臨時講師を県教育委員会に要請し、学級の改善を図った。

昨年度は、オールマイティーチャー制度の活用により、第5学年については、学級を3クラス編制とし、学習時における規律ある態度の育成を図り、合わせて算数の少人数指導を実施することにより、学力向上を図った。

昨年度の成果として、オールマイティーチャーの活用により、活気のある授業が展開されるようになり、算数科の学習に意欲的に取り組む児童が増えつつあった点である。また、発展的な学習に自ら取り組む意欲的な児童も見られるようになってきた点も成果である。しかし、うまく機能しない状況にあった1学級の状況改善に向けて、学校全体で組織的に担任の支援に当たる場面もまだ多く、課題点であると言える。

このような状況から、本年度もオールマイティーチャーの制度の活用により、第6学年については、学級を3クラス編制とし、学校全体で組織的な生徒指導体制の意識を高め、規律ある態度のさらなる育成を図る。合わせて、算数の少人数指導で、事前・事後の情報交換を生かした、きめ細やかな指導の実施により、学力向上を図ることとする。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 高学年児童の算数科における算数科におけるコース別学習を通して、個々の学力のレベルに合わせた指導を行い、学力向上を図る。
- (2) 第5学年、第6学年児童の担任とオールマイティーチャーが連携し合い、授業場面を通じた生徒指導の充実を図る。

3 実践事例

第6学年3組 算数科学習指導案（しっかりコース）

平成27年10月8日(木)第5校時 算数学習室 児童数男子6名 女子9名 計15名  
授業者 蓬 菜 孝 子

1 単元名 拡大図と縮図 (2)縮図の利用

2 単元について

(1) 題材や教材観

本単元では、拡大図や縮図の意味や性質が分かり、既習の合同な三角形のかき方を活用して拡大図や縮図やを書くことができるようにする。また、縮尺について理解させ、縮図から実際の長さを求めることができるようにする。また、建物の高さなど直接はかれない長さも、縮図を利用して計算することにより実際の長さが求められることに気づかせる。生活日常生活の中にも縮図が用いられている場面があることに気づかせ、縮図を活用することのよさを味わわせていく。

(2) 児童観

本コースは、算数の学習に積極的に取り組む児童が多いコースである。少人数指導の問題解決学習を楽しみにしていて、自分なりにいろいろ考えている。しかし、算数は、テストで良い点を取るためや中学校に行くために学習していると考えている一面が見られる。算数学習は、授業の中だけのものではなく、生活に役立つことを実感させたい。

(3) 指導観

しっかりコースは、児童一人一人にしっかり考えさせることを大切にして授業を進めたい。自分なりの考えを持つことにより算数学習の楽しさを知るようにさせたい。また、日常生活では様々な縮図の考え方が活用されていることに気づかせ、自ら進んで生活に生かそうとする態度を育てていきたい。

3 単元の目標

拡大図や縮図の観察やかくことを通して、拡大図、縮図の意味や性質について理解し、図形の理解を深め、図形に対する感覚を豊かにする。

4 指導計画(10時間扱い)

- (1) 拡大図と縮図 5時間
- (2) 縮図の利用 3時間・・・本時 8/10
- (3) まとめ 2時間

5 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】・・・拡大図や縮図を用いることよさに気づき、拡大図や縮図をかいたり、測定などに用いようとしている。

【数学的な考え方】・・・合同の意味や比の考え方を基に、拡大図、縮図の意味や性質、作図の仕方について考え、表現することができる。

【技能】・・・対応する辺の長さや角の大きさを求めたり、拡大図、縮図をかいたりすることができる。

【知識・理解】・・・拡大図、縮図の意味や性質を理解する。

6 本時の学習指導 (8/10時)

(1) 本時の目標

- ・縮図をかいて、実際の長さを求めることができる。

(2) 本時の評価規準

- ・直接はかれない長さを求めるには、縮図を用いればよいことに気づき、用いようとしている。 【関心・意欲・態度】
- ・直接はかることのできない長さを、縮図をかいてもとめることができる。 【技能】

(3) 展開

学習活動	主な発問(○)と予想される児童の反応(・)	指導上の留意点(・)支援(☆)評価(□)
1 問題を知る。	<p>はるかさんが校舎から10mはなれたところに立って、校舎の上はしAを見上げているようすを表したものです。</p> <p>校舎の実際の高さは何mですか。</p> <p>○どうやって求めますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・屋上にのぼる。</li> <li>・三角形をかく→縮図から。</li> </ul> <p>○絵の中に三角形をかきましょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・三角形ABC</li> <li>・Aと地面を結んだ三角形</li> <li>・見上げているから目の位置が頂点になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・屋上にのぼり、実際に高さを測ることは困難であることをつかませる。</li> <li>・今までに学習した内容を使って学習することを想起させる。</li> <li>・はるかさんの目、校舎、見上げている上はしを結ぶと三角形になることをとらえさせる。</li> </ul>
2 課題をとらえる。	<p>直接はかることのできない長さを、縮図をかいて求める方法を考えよう。</p>	
3 見通しを立てる。	<p>○三角形ABCをかくのに必要な辺の長さや角の大きさは。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・辺BC</li> <li>・角B</li> <li>・角C</li> </ul> <p>○直角三角形ABCの1/200の</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題を書かせ、本時の課題をとらえさせる。</li> <li>・合同な三角形の決定条件を想起させる。</li> </ul>

	縮図のかきかたはどうしますか。	
	①実際のBCの長さをはかり、 1/200の長さを求め、対応する辺をかく。	・教科書104ページにある、 角Bの大きさの測り方について触れ、見上げるときの角度の測り方にふれさせる。
4 自力解決をする	②実際の角Bの大きさをはかって(今回は50°)かく。 ○では、直角三角形ABCの 1/200の縮図をかいて校舎の 実際の高さを求めましょう。	・縮図が正しくかけたか確かめて から計算に入るよう指示する。 ☆作図の個別支援 ☆ひらめきコーナーの活用
5 発表をする。	・縮図上で辺ACの長さは約 6cm $6 \times 200 = 1200$ $1200 \text{ cm} = 12 \text{ m}$ $12 + 1.4 = 13.4$ 答え約13.4m	・発表カードを活用して発表さ せる。
6 学習のまとめをする。	直角三角形ABCの、辺BCの長さ と角Bの大きさがわかっている らば、縮図をかいて辺ACの 実際の長さを求めることができる。	
7 次時の予告を聞く。	○次回は拡大図と縮図のまとめ をします。	

#### 4 研究の成果と課題

- ・ オールマイティーチャーが週毎に作成した具体的な指導計画を担任が活用することで、学期末までの見通しを持って指導できるようになった。また、常に進度を意識でき、歩調を揃えて学習できるようになった。
- ・ オールマイティーチャーがテストの採点や評価等で担任を支援する体制が確立し、学級担任が学級経営に、より大きな力を注ぐことができた。
- ・ 第5学年、第6学年ともに2学期算数テストの平均得点に伸びが見られた。

第5学年	1学期…77.2点	2学期…79.0点 (1.8点アップ)
第6学年	1学期…73.5点	2学期…78.7点 (5.2点アップ)

- ・ 授業後に、児童の様子についてオールマイティーチャーと担任とで情報交換を行った。情報交換で出た情報を次時の授業時に生かし、個々の児童に応じた指導を心がけながら学習指導することができた。
- ・ 6学年で授業規律が守られ、落ち着いて学習する態度が定着しつつある。今後も学校全体で組織的に生徒指導体制を整え、授業場面を通じた積極的な生徒指導を継続していくことがさらなる学力向上につながると言える。

「観察・実験等に主体的に取り組み、実感を伴った理解ができる理科学習」

川越市立高階南小学校

研究のポイント

- 自ら問題を見つけ、主体的に取り組み、実感が伴った理解ができるよう、観察・実験等の充実を図る。
- 第4・5・6学年の授業で、T・Tを実施し、学習内容を確実に身に付けさせるため、個に応じた指導に当たる。
- 科学展、科学クラブの担当として、クラブ活動のねらい・特質を踏まえ、活動の充実を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

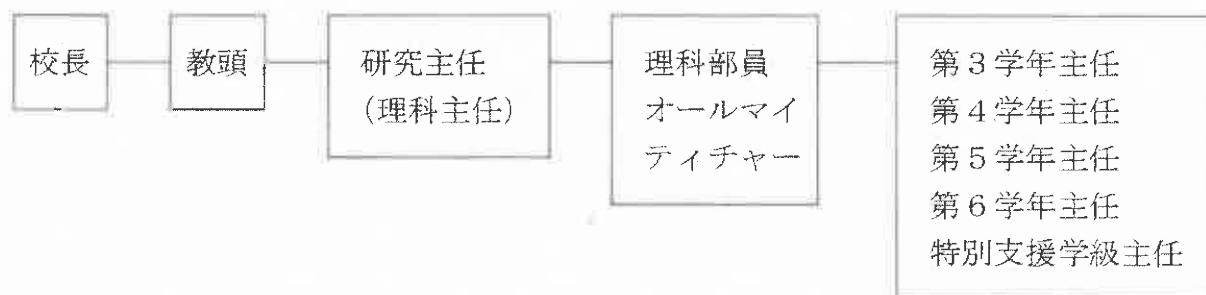
- ① 一人一実験、少人数観察・実験を目指し、一人一人が主体的に取り組む学習と個に応じた指導の充実を図る。
- ② 観察・実験等を充実させることを通して、自然に対する興味関心を高め、見通しを持った観察・実験を行い、結果を整理し考察するなど、科学的な思考力の育成を図る。
- ③ 児童の学習意欲が高まる評価に努めるとともに、一人一人の学習状況を適切に把握する。
- ④ 学校内外の自然環境の教材化、視聴覚機器・教材の充実を図るなど、学習環境を整備する。
- ⑤ 観察・実験に当たっては、その方法・器具の正しい扱い方の基本を押さえ、事故防止の徹底を図る。
- ⑥ クラブ活動のねらい・特質を踏まえ、活動の充実を図る。

(2) 研究主題設定の理由

平成26年度の児童の理科アンケート調査によると、「理科の授業」「観察・実験」を「好き・どちらかといえば好き」と答える児童の数値は、両方とも90%を超えていた。しかし、「予想から考えたり・結果から分かったことを考えたりすること」は、70%前後であった。また、平成27年度全国学力・学習状況調査結果（現6年生対象・調査内容については5年生）によると、「理科への関心等」については、県平均に近いものの、「学力」については県平均より8ポイント近く下回る状況であった。

そこで、授業における「観察・実験」の時間を確保し、科学的思考力「何故・どうして・理由など」を意識した授業の展開とノートを中心に自分の考えを表現させることで、「学力・科学的思考力」を育てようと考えた。

### (3) 研究組織



## 2 研究内容

- (1) 一人一実験、少人数観察・実験を目指し、一人一人が主体的に取り組む学習と個に応じた指導の充実
  - ① 一人一実験、全員一実験の実施
  - ② T・Tによる個別対応、個別指導の実施
  - ③ 子どもたちが自ら予想や仮説を立てる支援
  - ④ 主体的に自然に働きかけ、発見できるような実験になるよう支援
- (2) 自然に対する興味関心を高めるとともに、見通しを持った観察・実験を行い、結果を整理し考察するなどの科学的な思考力の育成
  - ① 導入では、子どもたちの学習意欲が高まる内容を準備し、問題を自分のものとして把握した学習活動の実施
  - ② 学習の見通しを持ち、自分の考えを広めたり、深めることの出来るノート指導
  - ③ ノートを活用し、児童の学習意欲が高まる評価と、一人一人の学習状況の適切な把握
- (3) 学校内外の自然環境の教材化、視聴覚機器・教材の充実を図るなどの学習環境の整備
  - ① 学校内外の自然環境の教材化
  - ② デジタルカメラ・コンピュータ・教材提示装置等の活用と視聴覚機器の整備
  - ③ NHK「ふしぎいっぱい」をはじめとする教材ソフトの充実とコーナーの設置
- (4) 観察・実験の方法・器具の正しい扱い方の基本と事故防止の徹底
  - ① 理科室の約束、実験準備をするとき・実験するときの注意の徹底
  - ② 正しい実験器具の使い方、安全に実験する方法の徹底
- (5) クラブ活動のねらい・特質を踏まえた主体的な活動の充実

## 3 実践事例

- (1) 児童が主体的に取り組む一人一実験の工夫
  - 6年生「地層の作り方」
    - ・ 火山灰に含まれているものを、双眼実態顕微鏡を使って観察した。
    - ・ 火山灰のつぶ、角ばったものが多くガラスのような透明なものも見られた。
  - 5年生「ふりこのきまり」の導入 (次ページ)



【火山灰の洗い出し】



(2) 自然に対する興味・関心を高め、単元に見通しを持たせる取組

○ 導入では、子どもたちの学習意欲が高まる内容を準備し、問題を自分のものとして把握した学習活動が展開できるように工夫した。

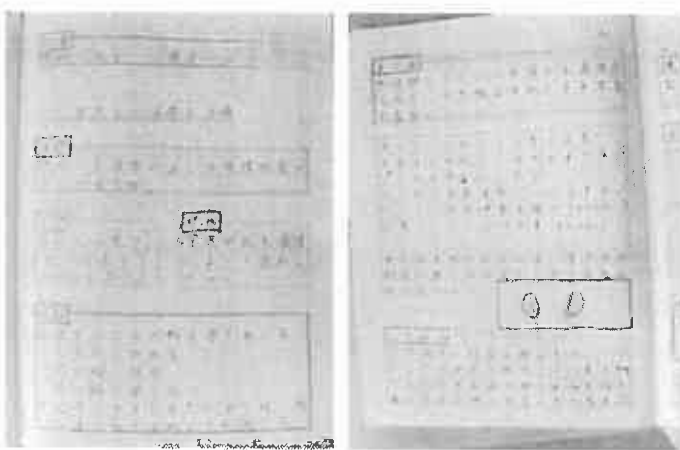


○ 5年生「ふりこのきまり」の導入

・ ふりこが1往復する時間が変わるのはどんなときか、「ふりこの長さ」「おもりの重さ」「ふれはば」を変えて実験した。同じにする条件を確認しながら、真剣に取り組んでいる姿が印象的であった。

○ 4年生「もののあたたまり方」「冬の生きもの」

・ ノートは、児童が後から見直したときに、授業の内容やその時の自分の考えや友達の考えを記録し、さらに自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。ノート指導中心に、科学的な見方や考え方を育てる取組をした。自分の疑問や考え、分かったことなどを中心に、単元

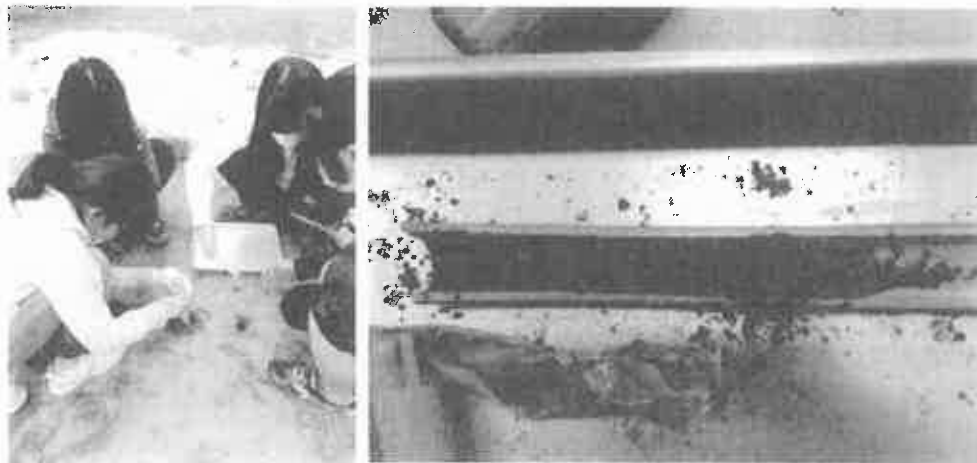


【授業の流れがよくわかるノート例】

ごとに児童が意欲を持てる評価をし、一人一人学習状況を適切に把握した。

右上のノートは、課題に対する予想と理由、まとめと振り返りが大変よく記録されている。

(3) 学校内外の自然環境の教材化



【ボーリング実験の様子】

○ 6年生「大地のつくりと変化」

・ 私たちの学校の下は、どんなつくりになっているのか調べた。学校の立地環境

や時間割などの関係から、実施に向けて難しい課題があるが、児童にとっては野外で実際に地層に向き合うことは重要な学習経験である。そこで、試行錯誤の結果、竹の筒で校庭をボーリングし、試料を取り出し調べた。その結果、大きく3層が観察でき、児童は地層の広がりを実感できた。その後、学校建築時のボーリングサンプルと柱状図を使い、さらに学校の下の地層のつくりについて学んだ。

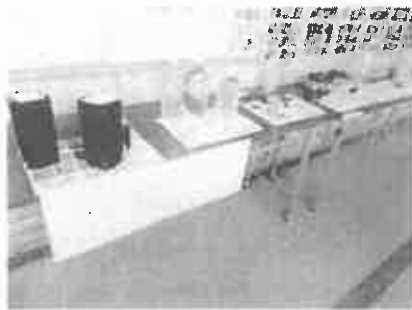
(4) 学習環境整備

- 観察・実験が難しい単元は、実感をもなった理解がしにくいいため、モデル、視聴覚機器および教材ソフトを整備し、効果的に活用した。
- 特に、教材ソフトではNHK「ふしぎいっぱい3・4・5・6年」・マイクロシリーズを中心に約70番組を取りだめし、DVD教材として使いやすいようにコーナーを設けた。



【教材ソフトの整備】

(5) 主体的な活動の充実を図るクラブ活動・理科研究



【科学クラブの作品展示】

- 理科・ものづくりへの興味関心を高めるために、科学クラブの作品を廊下に展示したところ、多くの児童が休み時間に見学に訪れ、体験もした。
- 夏休み中の理科研究は、事前に全児童に研究マニュアルを配布したこともあり、30点を超える作品が集まった。

4 成果と今後の課題

(1) 成果

- 観察・実験の回数（約1.5倍）と内容の充実が図られ、理科の本質的な「おもしろさ」を実感し、より意欲的に取り組むことができた。
- 児童のノートからは、予想（理由を含む）を自分で立て、結果から自分の考えを書く児童が多く見られた。

(2) 課題

- TTの授業を実施するにあたり、十分打ち合わせることが難しく、教員相互の指導力を高めていける環境づくりを考えたい。

「学びのよさを味わえる子どもの育成」  
～算数科における指導法の工夫・改善を通して～

川越市立大東東小学校

研究のポイント

- 「練り上げ」の重視
- 「協働・共有・供用」を意識した算数科指導の充実

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校では、問題解決的な学習のしかたを身に付け、未知の問題や新しい内容に取り組む場面でも意欲的に取り組むことや既習を生かして自力解決できる児童が増えてきたことが昨年度までの研究の成果として挙げられる一方で、学力の個人差や練り上げをさらに深めていくことが課題となった。例えば、入間地区算数数学学力調査（以下、入間調査）の結果からもこれまでの問題解決的な学習で身に付けた数学的な考え方や知識・技能が十分な成果となって現れず、学んだことが各種の調査や次の単元・学年に結び付いていないことが分かった。また、本校の児童は問題を読み取る力に課題があり、問題を解くことを諦める傾向がうかがえ、無回答率も高くなっている。そこで、練り上げを重視していく中で算数科指導の工夫・改善のポイントを「協働・共有・供用」として、研究を進めていくこととした。

「協働」とは、数学的な考え方や公式への一般化など目標の達成に向けて、仲間と協力しながら活動することである。これからの学びで重要視されるであろう「アクティブ・ラーニング」は、子どもたちの学習意欲や問題意識の高まりなど問題解決的な学習の充実に結び付くものであり本校の研究に深く関連するものと考えた。

「共有」とは、練り上げの際児童の多様な考えや表現に表れる数理的処理のよさを教師の問いを基に学級全体で考え、理解を深めることである。そのために、練り上げ構想図の中心発問や補助発問を基に児童の考えを深めたり広げたりすることや、既習事項を活用できるよう算数コーナーなどの環境整備をしたりすることである。

「供用」とは、よりよい数学的な考え方や一般化された公式を積極的に活用し、子ども自身が自分のものにしていくことである。そのためには、練り上げで導き出した考え方や一般化した公式を活用して適用問題を解くことや単元の終末段階で習熟の時間を設けること、業前活動の算数タイムで繰り返し問題を解いていくこととした。

(2) 研究主題設定の理由

1つ目は、我が国の要請からである。平成26年3月の『育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会』（以下、検討会）で報告されたことである。この検討会において、今後育成が求められる資質・

能力は自立した人格をもつ人間として、他者と協働しながら、新しい価値を創造する力の育成をめざし、「課題解決力」や「持続可能な社会づくりに関わる実践力」「グローバル化に対応する力」などの力が必要だと示されている。新学習指導要領の改訂を展望したこの検討会で示された「課題解決力」や「実践力」などの言葉の背景には、子どもたちを取り巻く現在の社会が急激に変化を続け、知識基盤社会、国際化、情報化が進展しているとともに、環境問題、少子・高齢化などの問題があり、さまざまな問題に立ち向かい未来を切り拓く力が求められていることが分かる。これらの力をどのように算数科学習の中で具現化していくべきかは、大きな課題といえる。

2つ目は、子どもの実態からである。本校では平成24～26年度の3年間にわたり、算数科を学校研究に取り組んできたが、問題解決的な学習の成果が各種の調査や生活に十分に反映されているとは言い難いことである。

3つ目は、昨年度までの学校研究の課題からである。研究の課題として2点が挙げられている。1つは学力の個人差について、もう1つは練り上げについてである。練り上げたことが、人間調査など各種の調査で知識レベルにおいて学力の底上げや満足できる児童の変容につながっていないことが明確になった。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容と実践事例

### (1) 本校における練り上げの検討

研究主題に掲げる「学びのよさ」における練り上げとは何かをブロックや全体で再度検討した。練り上げは、「練り上げとは、〇〇である」という短い一文でまとめられる程簡単なものではないことが分かった。しかし、練り上げには「学びのよさ」につながる様々な要素を含んでいることを改めて確認した。

#### 練り上げについて本校で共通理解を図ったこと

- ・ 考え方の良さに気付くことができること
- ・ 様々な考え方や既習事項から一般化した公式などを共通理解できること
- ・ 様々な考え方をさらに深化、統合、発展することができること
- ・ 思考力、表現力などを獲得するためのアプローチであること
- ・ 身に付けた力を他教科等へ広げることができること
- ・ 練り上げ構想図を基に指導を進めていくこと
- ・ 教え込みからの脱却を図ることができること など




(2) 授業の実践

① 練り上げ構想図を基にした授業の実践

算数科の研究を進めるにあたって、事前に検討・作成した練り上げ構想図を基に第1学年・第4学年・第5学年が授業研究会を実施した。以下は、第4学年の練り上げ構想図とその解説を示す。

(3) 練り上げ構想図

①本時で取り上げる児童の考え

<p>C1 長方形+長方形</p>  $4 \times 3 = 12$ $2 \times 3 = 6$ $12 + 6 = 18$	<p>C4 長方形-長方形</p>  $4 \times 6 = 24$ $2 \times 3 = 6$ $24 - 6 = 18$	<p>C8 (または C9) 長方形1つ分</p>  $2 \div 2 = 1$ $4 - 1 = 3$ $3 \times 6 = 18$
--	--	--

②練り上げの視点

<p>○練り上げの型</p> <p>並列 ・ 片列 ・ 統合</p>	<p>○中心となる発問</p> <p>「どのように考えましたか。」</p> <p>※児童の発表した言葉から「長方形」と出てきたら発表用紙の下に板書する。</p> <p>※1つずつ考えの作戦名を考える。</p> <p>例：「大きい長方形と小さい長方形の面積を合わせたんだね。これは何作戦かな。」</p>	<p>○予想される児童の発言</p> <p>C1について【分ける作戦】</p> <p>「線(補助線)を引いて長方形を2つ作りました。」</p> <p>「長方形は前に習ったのでたて×横で計算しました。」</p> <p>C4について【たしひき(つけたし)作戦】</p> <p>「足りないところを付け足して、大きな長方形にして、後でいらぬところを引いて考えました。」</p> <p>C8について【移動作戦】</p> <p>「一部を移動して長方形の形に変えました。見付けるのが大変だけど、長方形に変形させると計算はしやすいです。」</p> <p>○「どの考え方も長方形にして計算している。」</p> <p>○「どの考え方の式にも長方形や正方形を求める公式が使われている。」</p> <p>・「いろいろな求め方があるけど、すべて答えは18cm<sup>2</sup>で面積は同じです。」</p> <p>・「そのままでは計算できないから、形を変えています。」</p> <p>○「『たて×横』(または『公式])が使えるからです。」</p> <p>○「今までに習ったことが使えるからです。」</p>
<p>○本時で児童に獲得させる数学的な考え方、または知識</p>	<p>○本時で身に付けさせたい考え方や知識の活用場面</p> <p>・本時の適用問題</p> <p>・10、11月のまとめの時間</p> <p>・家庭学習の算数プリント</p> <p>・第5学年複合図形の体積</p>	

本時で取り上げる児童の考えを絞り、本時の目標達成に向けた焦点化を図る。

本時の練り上げの型を示す。

【考えを発表する児童】

中心となる発問や補助発問を示す。

本時で身に付けさせたい考え方や知識を示す。

本時で身に付けさせたい考え方や知識の活用場面を示す。

上記の練り上げ構想図の他にも、以下の手だてを基に研究を進めた。

- 構造的な板書計画
- 児童の考えのネーミング
- 考えを伝える場の設定
- 自力解決時における時間の確保
- 算数コーナーの常掲
- 小集団指導の活用
- 個に応じた指導(机間指導の充実)
- 適用問題を解く時間の確保(時間配分)
- ノート指導の書き方の統一 など

### (3) 実践報告会

授業研究会のほかに、各学年1回の実践報告会を行った。授業研究会と同様に、練り上げ構想図を作成し、取り上げる児童の考えから絞り込んだ意図や中心となる発問、実際の子どもの反応等を報告し、協議を行った。実践報告会の協議を通して、練り上げ等以下のことについて共通理解を図った。

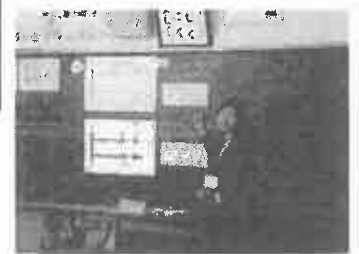


【6年生実践報告会】

- 児童の考えを発表させる時は、あらかじめ教師が考えを記入した用紙を準備しておく。(時間短縮・見やすさ)
- 児童の考えの良さが見えるように別の数値を使って練り上げたり適用問題で取り上げたりする。
- 必ず子どもたちに考えを1つ以上もたせてから練り上げを行う。
- 学習内容の視覚化を推進していく。
- 児童の身近な問題を取り上げて、興味を高めて考えさせることが大事である。 など



【友達に考えを伝える】



【5年生授業研究会】

## 3 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・練り上げ構想図によって、取り上げる考えや発問が明確になった。
- ・学年内で練り上げのしかたや取り上げたい考えを絞ったことで、学習のねらいの焦点化が図られ、関連を見付けたりして考えを深めたりすることができ、子どもたちの意識や達成感を高められた。
- ・子どもたちの実態に応じた練り上げの進め方ができた。
- ・学級全体で練り上げる前に説明する時間を設けたことで、ペアやグループ内で自分の考えを説明する機会が増え、説明や発表等の表現力が高まってきた。
- ・自分で解くことや発表することに自信を持てるようになった児童が増えた。
- ・適用問題にかける時間が増えた。

### (2) 課題

- ・昨年度までの入間調査など各種の調査で通過率が低かった問題や理解が不十分であった単元をさらに教材研究し、練り上げ方の検討や習熟の機会を図る指導計画の改善をしていく必要がある。
- ・既習事項が定着していない児童は自力解決が難しく、どのように補充していくかがさらに課題である。
- ・「分かった」や「できた」、生活の中で算数を実感できる場面をつくり出す授業の工夫改善をし、学習意欲の向上に努めていく必要がある。また、保護者とさらに協力・連携を図り、家庭学習の充実にも努めていきたい。

## 「低学年の児童の学習規律と学力向上の研究」

川越市立霞ヶ関西小学校

### 研究のポイント

- 低学年の児童の学習規律を確立するとともに、個人差の出やすい算数科の学習において基礎・基本の確実な定着を図ることで、学校全体の学力向上を目指す。
- 低学年にはパワーアップ加配教員を配置し、個に応じた指導や支援を充実させ、達成感や充実感を味わわせることで学習意欲も高める。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

家庭の教育力の低下や、自分をコントロールする力の未発達による、いわゆる「小1プロブレム」、確かな学力の育成は、今日的な教育課題の一つである。本校は、豊かな自然に恵まれ、社会が少子化の中にあっても、ここ数年児童数が増加している。子どもたちは明るく素直でのびのびとして学校全体に活気がある一方、低学年の基本的生活習慣の確立と学力の向上は学校課題でもある。

学校教育目標「心豊かで たくましい児童を育成する」の具現化を図る本校において、「知・徳・体」の調和のとれた子どもの育成を目指し、本研究を推進する。

#### (2) 研究主題設定理由

小学生にとって、基本的な生活習慣の確立と学力の向上は表裏一体をなす。また特に低学年の児童については、学校生活の様々な場面で個に応じたていねいな言葉かけや具体的な支援・指導は大切である。「授業中は座って先生の話聞く」「宿題などの家庭学習に取り組む」「忘れ物をしない」といった学習規律を確立するとともに、「できた」「わかった」等の達成感や充実感を味わわせることは、新しい課題や困難な問題にも進んで取り組んでみようとする学習意欲を育む。

学年が上がるにつれ、進んで学習する子とそうでない子の二極化が進んでいる本校の算数学習において、低学年における学習規律と学習内容の確実な定着を図ることは、学校全体の学力向上に直結すると考え、本研究主題を設定した。

#### (3) 研究組織

校長—教頭—教務主任（校内研修主任）—

パワーアップ加配

1年担任

2年担任

## 2 研究の内容

本校では、3年から6年までの算数は少人数指導担当教員と学年担任による学級枠を取り払った習熟度別学習を進めている。一昨年からパワーアップ加配教員が配置され、1年生と2年生の各学級においては週3時間、パワーアップ加配と担任によるTTを実施している。

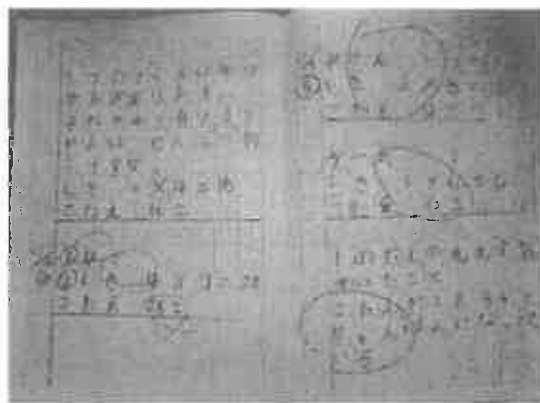
### (1) 指導形態の工夫等

- ① 各学級で授業をしているパワーアップ加配がT1を担当し中心となって授業を進めるとともに、子どもをよく理解している担任がT2となり、その児童にあった支援や助言を行うだけでなく、時には家庭とも連携し学習の確かな定着を目指した
- ② 具体的な操作活動やノートの指導などは、二人で分担し行うことで、どの子どもにも十分な活動を保障したり、よさを認め励ましたり小さなつまずきにも対応したりした。

また、ノートについては使い方を統一することで、担任だけの授業でもパワーアップ加配教員と担任による授業でも同じ流れで学習を進めることができるようにした。

日付	←赤で線を引く
課題	
予想	
考え	
解決	
まとめ	
練習	

【ノートの使い方】



【実際のノート】

### (2) 指導条件の整備等

毎週金曜日の6時間目を打ち合わせ時間として確保した。年間指導計画を基本に子どもたちの実態に合わせた学習課題の設定や時間配分、必要な練習問題等について話し合った。結果は記録に残し、次年度にも役立てるようにしている。また、学習規律について共通理解を図り、低学年全体、同一歩調で指導を進めた。

## 3 実践事例

### (1) 2年かけ算(2) 【九九をつくろう】

#### ○単元の目標

乗法の意味について理解を深め、それをを用いることができるようにする。

#### ○本時の学習指導 15 / 17時間

#### ○本時の目標(数学的な考え方)

ものの数の求め方を、かけ算九九を活用して考えることができる。



○本時の展開

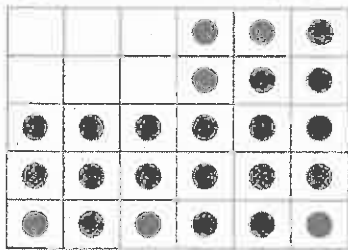
主な発問と予想される児童の実態

問題を  
知る

T1:かけ算九九練習に挑戦しまし  
う。

T1:問題です。

チョコレートはなんこありますか。  
九九を使ってもとめましょう。



・指導上の留意点 ☆支援 ◇評価

・かけ算九九のまず計算に3分取り組む。T1とT2で学級の半数ずつの児童を担当、どの程度九九が定着しているか児童の様子をチェックする。

・T1が授業を進め、T2が掲示物を黒板に貼ったり、プリントを児童に配ったりする。

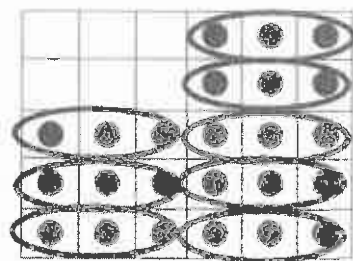
・簡単に九九が使えないわけについて考えさせる。

課題を  
つか  
んで  
解  
く

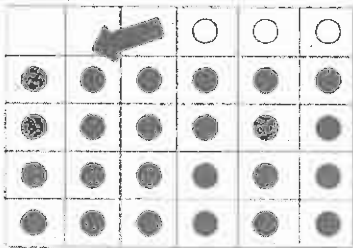
T1:今日の課題です。

くふうして九九をつかって●  
の数を求めましょう。

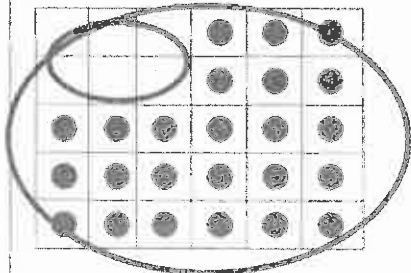
C1:  $3 \times 8 = 24$     24こ



C2:  $6 \times 4 = 24$     24こ



C3:  $5 \times 6 = 30$      $2 \times 3 = 6$



・●を動かして、へこみのない長方形にするか、同じ数ずつのまとまりがいくつあるのか数えるとよいことに気づかせる。

・ $2 \times 12$ のように乗数が10を超えていて九九が使えない分け方はしないことを確認する。

☆考え方や求め方がわかるように図に印をつけるとともに式に表して数を求めるよう指示する。

☆一つの考え方で求めることができた場合は、プリントを新しくもらってほかの考え方で求めるよう助言する。

◇ものの数の求め方をかけ算九九を活用して考えることができる。【数学的な考え方】

$30 - 6 = 24$     24こ

※全体から左上の部分をはく。

(2) 2年・長さはどれだけかな

○ 1mものさしを使った実測

身の回りで1mに近いものの長さを探したり、30cmものさしでは、測りきれない長い長さのものを1mものさしで測ったりする活動では、児童の興味関心に応じた学習を進めることができた。



【1mものさしを使った活動】

(3) 2年・図を使って考えよう

○ 個に応じた指導

加法と減法の相互関係を理解して、場面を式に表したり式を読み取ったりして問題を解決する能力を伸ばすことをねらいとする本単元では、理解に個人差が出やすい。

特に減法逆の加法や、加法逆の減法の問題は混乱を招きやすい。そこで学級内で習熟度別学習を進め個に応じた指導の時間を確保し、①問題文からテープ図や未知数を□とした式が作れる児童、②問題文のテープ図を見てどんな式になるのかわかる児童、③問題文のテープ図を見ても立式に迷う児童、に分け、必要な支援を行うことで理解の定着を図った。

○ 減法逆の加法の問題例

ジュースが何本かあります。26本くばったので のこりが8本になりました。ジュースは はじめに何本ありましたか。

$$\square - 8 = 26$$

$$8 + 26 = 34 \quad (\text{または} \quad 26 + 8 = 34) \quad 34 \text{本}$$

※「のこり」という言葉が入っているが加法の問題となっている。

#### 4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 1年生において、学習規律を早く身に付けることができた児童が増えた。また2年生に進級し担任が替わっても、大きな戸惑いなく新しい学級で学ぶことができていた。
- 経験の浅い教員が増える中、共同で教材研究ができたことで、基本的な算数の授業のあり方について教員の理解も深まった。
- 算数が好きな児童が1年から3年で増えた。さらに授業へ取り組む姿勢が積極的となった。(入間学力等による結果は来年度に明らかとなる)

(2) 課題

- パワーアップ加配教員の配置は2年となっており、本校は今年度で最後となる。教員の入れ替えもある中、培った指導のノウハウをどのように次年度に伝えていくのかが一番大きな課題であると考えます。

## 「基礎・基本の定着を図ったわかる授業の実践」

川越市立東中学校

### 研究のポイント

- 教師及び生徒の実態に合わせた指導法の工夫・改善を図る。
- 「書くこと」の能力を高めることに重点を置いた授業実践を行う。
- 「くり返しテスト」「単元テスト」等、小テストを活用して意欲の向上を図る。

### 1 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

基礎的・基本的な知識の習得に向けた授業実践を行うとともに、わかる授業を通して生徒の達成感・成就感を得られるよう授業の工夫・改善を図る。

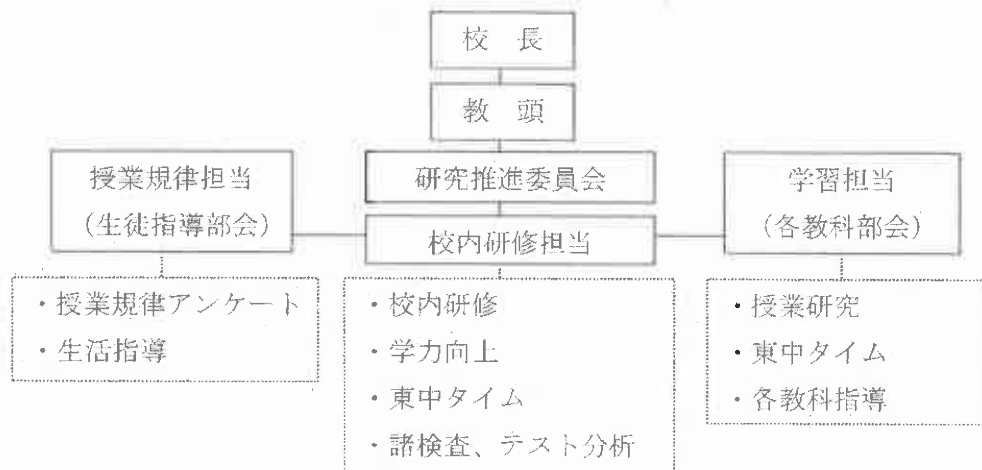
#### (2) 研究主題設定理由

学校生活の基本は、授業である。「わかりやすい授業」「きめ細かい授業」を行うことが学校教育の基盤である。生徒の授業への意欲も向上すれば、学力向上にもつながってくる。また、授業時のあいさつをはじめとした授業規律の大切さも改めて確認し、全校共通のものとすることにした。

埼玉県学力・学習状況調査、NRT（教研式標準学力調査）など生徒の実態を各教科で把握し、生徒の実態の状況について全体で共有することも重要である。

これらをもとに、①教師の授業力の向上、②授業規律の確立を柱として研究を取り組むこととした。

#### (3) 研究組織



※既存の組織を活用

## 2 研究の内容

### 【仮説 1】

授業の課題を明確にし、生徒の学習意欲を喚起する指導法を工夫すれば、基礎的・基本的な学力が育成されるであろう。

- ・ デジタル教科書やパワーポイントを活用し、視覚的効果を生かした授業実践。
- ・ 課題を明確にし、生徒に自分の言葉で振り返りをさせる授業実践。
- ・ 話し合い活動（教え合い）を取り入れた、授業実践。
- ・ 教科に限らず、お互いの授業を見合い、指導力の向上を図る。

### 【仮説 2】

授業のねらいに応じたドリル学習や反復的学習を通じて、基礎的・基本的な学力を身に付ければ、知識・技能が定着するであろう。

- ・ 授業内において、基礎的な学習を取り入れる。（計算・漢字・英単語等）
- ・ 東中タイムの実施。（英単語・漢字 等）
- ・ ドリル学習（深化・補充の問題を繰り返し行う）
- ・ 授業評価カードや家庭学習ノートの実施。

## 3 実践事例

○ 各教科の基礎的・基本的な学習への取り組み \*○番号…各教科の基礎基本

### (1) 英語

#### 【英語の基礎基本】

- ① 単語が書ける。 ② 英作文を書ける。

#### 具体的な取組

- ・ 単語プリントを作成し、繰り返し書く練習を行う。（1年）
- ・ ビンゴで使用した単語を、5分間ノートに練習する。（2年）
- ・ 英作文プリントを活用して練習をする。（3年）

#### 成果

- ・ 単語テスト 中間平均 5.92点 → 期末 7.39点  
※ 少しずつ平均点が上がった。

### (2) 国語

#### 【国語の基礎基本】

- ① 漢字、語彙力の育成。② 短作文（書くこと）。③ 表現力の育成（書くこと・読むこと）。

#### 具体的な取組

- ・ 帯学習（漢字練習ドリル）を使用し、繰り返し漢字練習を行う。
- ・ 週に一回の漢字小テストを実施する。
- ・ 書く活動を日常化していく。

- ・ 朗読の重視。
- ・ 言葉のプリント、振り返りシートの活用。

#### 成果

- ・ 短作文が少しずつ書けるようになってきた。
- ・ 小テストの実施から、漢字の正答率が上がった。
- ・ 朗読への取り組みから、古典への理解が深まった。【繰り返し書く活動】



### (3) 社会

#### 【社会の基礎基本】

① 社会的事項について自分で考えて、自分の言葉で表現する力。

#### 具体的な取組

- ・ 小テストの実施。
- ・ 話し合い学習。(グループ学習)
- ・ グループ発表をフィードバックするための、まとめの時間を設定する。

#### 成果

- ・ 小テストの実施から、自分の考えを表現する「記述式」の問題の正答率が向上した。
- ・ 「思考・判断・表現」の観点の点数が、一学期より、正答率が上がった。



【授業の様子】

### (4) 理科

#### 【理科の基礎基本】

① 教科書の太字語句の理解。②基礎・基本的な技能を身に付ける。

#### 具体的な取組

- ・ ビンゴ形式の穴埋め小テストの実施。(1年)
- ・ 単元ごとに小テストを実施する。(2年・3年)
- ・ パフォーマンステストの実施。(全学年)

#### 成果

- ・ 小テストの実施により、考察の分掌を科学的な思考をもとに書くことができる生徒が増えてきた。【パフォーマンステスト】
- ・ パフォーマンステストにより、ガスバーナーの使い方等、基礎的な技能を身に付けることができた。
- ・ 定期テストでは、基礎的語句の習得ができていた。



### (5) 数学

#### 【数学の基礎基本】

① 基礎的・基本的な計算力。②数学的知識を身に付ける。

#### 具体的な取組

- ・ 単元ごとに確認テストを実施する。

- ・ 帯学習で、5分間計算プリントを行う。
- ・ 本時のめあて、目標を板書する。振り返りを毎時間行う。
- ・ 板書に、基礎・基本的数学的知識について、色を変えて視覚に訴える。

### 成果

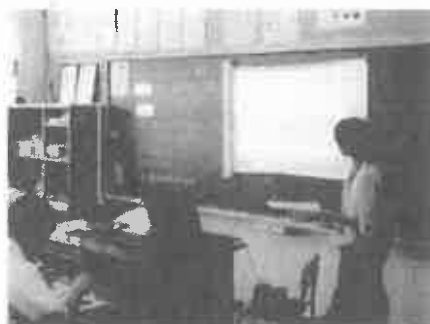
- ・ 定期テストの、計算に関する項目の得点が学期ごとに伸びた。
- ・ 応用問題でも、あきらめずに取り組む姿勢が見られるようになった。
- ・ 重要事項について、自分なりに工夫した分かりやすいノート作りをする生徒が増えてきた。

## (6) 研究授業の様子

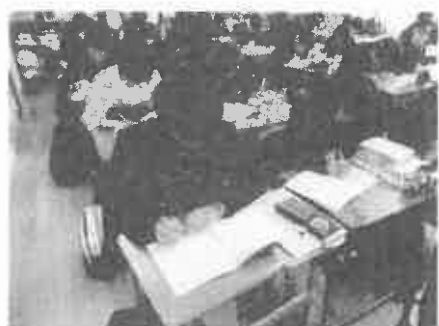
### ① 第3学年 社会科

日 時 平成27年10月7日 (水)

単 元 名 「選挙のしくみと課題」



【デジタル教科書等の活用】



【帯学習のくり返しドリル】

### ② 第3学年 国語科

日 時 平成27年11月11日 (水)

単 元 名 「君待つと一万葉・古今・新古今」



【自分の言葉で説明】

### ③ 第1学年 数学科

日 時 平成27年11月19日 (木)

単 元 名 「比例と反比例」

## 4 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ・ 単元ごとの小テストや毎時間の漢字や単語練習をくり返し行い積み重ねることで、少しずつ基礎的・基本的な知識を身に付けることができた。
- ・ 「書くこと」に重点を置き授業を組み立てたため、静かに落ち着いて授業を受けることができるようになってきた。

### (2) 課題

- ・ 基礎的・基本的な知識は、全体的に身に付いてきているが、それを用いて発展させる応用力にどのように結びつけるか今後の課題であり、確かな学力を身に付けさせるためには必要と考える。

研究主題

「基礎・基本の定着を図る学力向上に向けた授業の創造・改善への取組」

川越市立南古谷中学校

研究のポイント

- ・理科において第1学年及び第2学年の授業でオールマイティーチャーとのTTを実施する。
- ・実験や観察を十分に行うことによって、理科の好きな生徒を増やす。
- ・きめ細やかな指導をすることによって、学力の向上を図る。

1 研究の概要

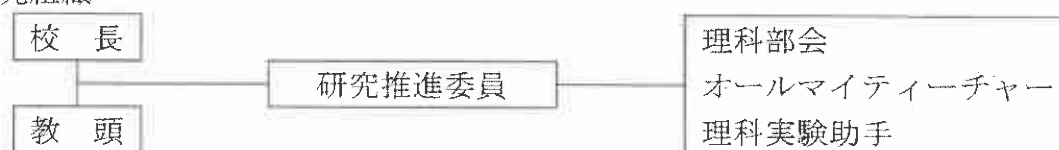
(1) 研究のねらい

- ① 実験や観察を十分に行うことによって、理科に対する生徒の興味・関心を高める。
- ② 生徒の基礎学力を高める。
- ③ オールマイティーチャーを活用することによってきめ細やかな指導をする。

(2) 研究主題設定理由

本校の全国学力状況調査では、粒子の領域は全国平均と比べ、7.8ポイント低いなど、学力に課題がある生徒が多い。オールマイティーチャーを活用することによって、きめ細やかな指導を実施し、観察や実験を充実したものにするとともに、基礎基本の充実を図りたい。

(3) 研究組織



(4) 研究計画

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
4 月	研究推進委員会	会議室	
4 月	教科部会	会議室等	全職員
5 月	標準学力検査実施	教 室	全生徒
5 月	全体研修会	会議室	全職員
8 月	標準学力検査結果分析	会議室	全職員
10月	オールマイティーチャー活用 授業研究会	理科室	理科教員
11月	反省とまとめ及び指導計画の見直し	会議室	理科教員
2 月	次年度に向けてまとめと反省		

## 2 研究の内容

- (1) 実験や観察を十分に行うことによって、理科の好きな生徒を育てる。
- (2) TTによる授業を通して、きめ細やかな指導を実施する。
- (3) 基礎学力の向上を図る。

## 3 実践事例

### 第1学年1組 理科学習指導案

平成27年10月9日(金) 第2校時

授業者 ○○ ○○

#### 1 単元名 身のまわりの物質

#### 2 単元について

##### (1) 教材観

本単元は、身のまわりの物質の性質及び物質の状態変化の様子について、観察・実験を行い、結果を分析して解釈し、物質の性質や溶解、状態変化について理解させ、実験器具の操作や、実験結果の記録の仕方やレポートの書き方などの技術を習得させることが目的である。さらに実験・観察を十分に行わせ、科学的な変化を説明できるようにさせたい。

##### (2) 生徒観

指示をよく聞き、実験・観察を意欲的に行う生徒の多いクラスである。前単元では、関心を持って取り組んだ。そこから生徒なりの科学的な思考を巡らせる力や関心は高い。本校の全国学力状況調査では、粒子の領域は全国平均と比べ、7.8ポイント低い。そのことからこの領域の理解力は高くない。実験や観察は意欲的に行うので、実験・観察から確かな知識・理解の力が伸びるように指導していきたい。

##### (3) 指導観

身近な物質を用いて、物質の性質や分類を行い、興味・関心をひいて知識を理解させたい。また、溶液を用い、溶解度、溶解度曲線を読み取らせ、結果から考察し、正しい答えを導き出せる力をつけさせたい。水や、ろうを用いた実験から状態変化、グラフの書き方を習得させたい。

#### 3 指導目標

身のまわりの物質の実験、観察を通して、固体、液体、気体の性質、物質の変化について日常生活と関連づけて理解するとともに、様々な物質の性質、変化の調べ方の基礎を身に着け、物質に対する興味・関心を高める。

#### 4 指導計画 (21時間扱い)

- (1) 身のまわりの物質とその性質 …… 7時間




- (2) 気体の性質 . . . 3 時間
- (3) 水溶液の性質 . . . 5 時間 (本時は 1 時間目)
- (4) 物質の姿と状態変化 . . . 6 時間

5 本時の学習指導

(1) 本時の目標

- ①溶質、溶媒、溶液、水溶液について、例をあげて説明できる。  
(知識・理解)
- ②純粋な物質と混合物について、例をあげて説明できる。(知識・理解)
- ③質量パーセント濃度を計算し、水溶液の濃度を求めることができる。  
(観察・実験の技能)
- ④水溶液のこさを、水溶液中全体における溶質の割合で表すことを説明できる。(科学的な思考・表現)

(2) 本時の展開

学習内容	教師の働きかけと 予想される生徒の反応	評価及び指導上の留意点 [T2による重点支援]
1 水溶液の性質を理解する。	○ザラ糖、水を用意し、溶質・溶媒・溶液を視覚的に捉えさせる。 ・食塩：溶質 水：溶媒 食塩水：溶液（水溶液）	食塩、水、食塩水の用語を使って食塩水を例にあげ、説明できる。 (知識・理解)【発言】
本時の目標 2 純粋な物質、混合物を理解する。	○身の回りにおける混合物を考えさせる。 ・コーラ ・アクエリアス ・空気 ○純粋な物質と混合物の違いをつかませる ○砂糖水の濃さを変えるにはどうすればいいか考えさせる。 ・もっと砂糖を足す。	身の回りの混合物を説明することができる。(知識・理解) 【発言】  <div style="text-align: right;">▼砂糖水</div> 
3 砂糖水の濃さ（濃度）について考え質量パーセント濃度の求め方を理解する。	○質量パーセント濃度の求め方を「例題」→「計算」の順で取り組む。 ・計算式を知り、実際に値を求める。	質量パーセント濃度を計算し水溶液の濃度を求めることができる。 (観察・実験の技能) 【机間指導】
4 飲み物の質量パー	○4種類の飲み物を示し、そ	計算の苦手な生徒に配慮し机間指

<p>セント濃度を求める。</p>	<p>れに含まれる砂糖の量を示す。</p> <p>○そのうち1つを選んで計算させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・計算する。</li> </ul> <p>○4つの飲み物の濃度の違いから、濃い、薄いをつかませる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・%の値が大きい：濃い</li> <li>・%の値が小さい：薄い</li> </ul>	<p>導を行う。</p> <p>[T2による重点支援]</p> <p>水溶液の濃さを、水溶液中全体における溶質の割合で表すことを説明できる。(科学的な思考・表現)。</p> <p>【発言】</p>
<p>本時のまとめ</p>	<p>○まとめをする。</p>	

※資料抜粋

**水にとける物質のようす**

①電子天秤にかかったビーカー(A・B)の質量をはかる。

②Aの裏面にはコーンスターチが入っている。その質量をはかる。

水の量は約100ml  
砂糖は20g  
高さが約10cmで、水は約10cmまで注いでおく。  
実験の準備は完了!

**水に入れてとかす**

①コーンスターチと砂糖をそれぞれ別のビーカー(B・C)に入れてよく混ぜる。

②水溶液を混ぜ、高さが約10cmになるまで注いでおく。

**ろ過した液を調べる**

①とかした後の液をそれぞれろ過する。

※液は、ガラス棒を伝わらせて入れ、皿の半分目以上上げないようにする。

ガラス棒はろ過液がこぼれないように、皿が重なるように置く。

8分目から過し終わったら約1分、1回ろ過が終わったらろ過液を調べる。

**まとめ**

①とかすまえの水と粉末の質量をはかった。

②とかした後の水と濾過紙の質量をはかった。

③とかした後の液体はろ過した。

④ろ過した液体をスライドガラスにかかわした。

**ものを水にとかす前ととかした後では全体の重さは変わるのかな？**

全体重さは変わらない。

4 研究の成果と課題

- 観察や実験を楽しみにする生徒が増え、理科の授業に活気が生まれた。
- オールマイティーチャーがいることにより、自分から質問をする生徒が増えてきた。
- 生徒の興味・関心をひくような、取組を実施することによって、さらにTTの効果が発揮できると思われる。
- 実験や観察には興味を示すが、それ以外の授業に対して意欲的に参加できない部分もある。さらなる指導法の工夫改善が必要である。

**水にとける物質のようす**

①質量をはかる  
ビーカー(A・B)とコーンスターチと砂糖の質量をはかる。

②水に入れてとかす  
コーンスターチと砂糖をそれぞれ別のビーカー(B・C)に入れてよく混ぜる。

③とかした後の質量をはかる  
ろ過した後の水と濾過紙の質量をはかる。

④ろ過した液を調べる  
ろ過した後の液をそれぞれろ過する。高さが約10cmで、水は約10cmまで注いでおく。

質量をはかる	ビーカー(A)	コーンスターチ	砂糖
質量をはかる	ビーカー(B)	コーンスターチ	砂糖
質量をはかる	ビーカー(C)	コーンスターチ	砂糖

ろ過した液を調べる

ろ過した液を調べる	ろ過した液を調べる
ろ過した液を調べる	ろ過した液を調べる

1年 組 氏名:

## 研究主題

### 「自己を高め、心豊かで主体的に生きる生徒の育成」

～スポーツを通して国際理解を深め、生き方を学ぶ～

川越市立霞ヶ関西中学校

#### 研究のポイント

- 2020年開催予定の東京オリンピックに向けた本市の取組を受け、地域を挙げて士気を高めることに積極的に参画するための取組の工夫。
- 校地周辺の環境についての調べ学習。
- スポーツを通して、精神や生き方を学ぶ取組として「オリンピック教室の開催」を実施。
- スポーツを通して生き方を学ぶ道徳教材を選定し、全学級で授業。
- 国際理解教育の一環として「外国から学ぼう」というテーマでの学習。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

2020年開催予定の東京オリンピックに向け、本市も一部会場となり、諸々の計画が進められている。地域を挙げて士気を高めていくことに、学校として積極的に参画できることを模索しながら、スポーツや大きなイベントを通して、この機を有効に活用し主体的に地域に貢献できる生徒の育成を目指していく。

### (2) 研究主題設定理由

現在の在校生は5年後には18歳～20歳の青年期を迎える。オリンピックの開催準備が進められていく中で、「今、自分たちには何ができるか」と積極的に考え、地域に貢献できる生徒の育成を目指している。その具現化として、地域の環境および世界の国々に目を向けること、スポーツやオリンピック、パラリンピックへの理解を深める取組を実践し、心豊かで主体的に生きる生徒を育成することを本研究の主題と設定した。

### (3) 研究組織

- 環境研究部                   ： 1 学年教員
- 道徳研究部                   ： 道徳部を中心に全教員
- 国際理解研究部           ： 2 学年教員
- 福祉教育研究部           ： 3 学年教員
- オリンピック教室       ： 体育科教員、2 学年教員

## 2 研究の内容

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
6 月	1年総合的な学習の時間 『自分たちの暮らしと環境を見つめよう』 ・県政出前講座の活用 ・川の生き物、植生などを調べる。(採集) ・環境保全について考える。 ・学校周辺環境整備⇒何ができるか考え、実行 *花植え、除草、ごみ拾い等々	校地周辺 南湖畔川	環境研究部 1学年生徒
8 月	校内研修 「心豊かで主体的に生きる生徒の育成」 ・スポーツの精神や生き方に関する資料探し ・学年ごとの道徳の教材研究、資料分析 ・教育センターより指導者の先生を招聘	図書室他	道徳研究部 全教員
10 月	オリンピック教室の開催 ・オリンピックによる出前講座 (学級指導、実技)	教室 体育館	体育科 2学年教員 2学年生徒
11 月	道徳授業の実施 ・全学年、全学級実施 ・公開授業	教室	全学級担任 全学級生徒
12 月	福祉教育 ・高齢者体験 ・身体障害者体験	体育館 教室	福祉教育研 究部 2学年生徒
2 月	国際理解教育 『外国から学ぼう』 ・ラオスの国について学ぶ ・学習院女子大学の研究グループをゲストティーチャーとして招聘 ・関心のある国についての調べ学習	教室	国際理解研 究部 2学年生徒

## 3 実践事例

### (1) 1年「自分たちの暮らしと環境を見つめよう」

本校は、JR川越線笠幡駅から徒歩3分、霞ヶ関カンツリークラブと自然が保たれている南小畔川の狭間に位置する。その学校周辺の環境に目を向け、ゲストティーチャーを招いて「川の用水や生き物調査」を行い、自然環境の維持・向上、環境整備への取組への意欲付けにつなぐことを目的とした。



【南小畔川】

① 実施日 平成27年6月3日

② ゲストティーチャー

- ・ 環境科学国際センター自然環境担当主任専門員（県政出前講座より）
- ・ 南小畔川親水クラブ（地域の方々）6名

③ 内容

- ・ 川の流域の地形や水量、植生、流れの確認
- ・ 川の水や生き物の採集、観察
- ・ 「川のチェックシート」記入、それをもとにした班での話し合い、発表会
- ・ 講師の先生のお話



【生き物調査の様子】

(2) 2年「オリンピック教室」

JOCオリンピックムーブメント事務局、川越市オリンピック推進室のご協力をいただき、本校で開催することができた。オリンピック（オリンピック出場経験アスリート）が教師役となり、ご自身の選手としての様々な経験や「オリンピックの精神や価値」を伝えると同時に、中学生が将来の目標を見据えて日常を生きるという「生き方」を学ぶ機会となった。

① 実施日 平成27年10月20日

② 講師（オリンピック）

- ・ 長岡千里さん 2人乗りボブスレー トリノ大会出場
- ・ 三科真澄さん ソフトボール アテネ大会3位、北京大会優勝

③ 内容

- ・ 2時間続き、3クラス学級単位、計6時間
- ・ 1時間目：講義（教室）  
ご自身の経験から学んだことや伝えたいこと  
オリンピックの歴史、精神、価値について
- ・ 2時間目：実技（体育館）  
トレーニングや軽い運動を通して相手の気持ちを読みとることや仲間と協力することの大切さ等を学ぶ。



【2時間目の実技の様子】

### (3) 2年 国際理解教育『外国から学ぼう』

今、自分たちが生きているこの地球上には多くの国があり、その国の文化、宗教、生活習慣、価値観、考え方の違いがあることを知り、広い視野に立ち理解を深めていくことを目的として学習した。主に開発途上にある国「ラオス」の「ラトゥアン村」を取り上げ、日本との生活の様子を比較し、様々な意見を出し合い発表した。

① 実施時期 平成28年  
2月

② 講師 学習院女子大学  
開発教育研究部  
8名

③ 内容

- ・ ガイダンス：「外国から学ぼう」の学習のねらい、内容を理解する。
- ・ 開発途上にある国「ラオス」について学ぶ。学習院女子大学学生をゲストティーチャーとして迎え、講義とワークショップ、グループ討議。
- ・ 「開発途上国」の抱える諸問題を知るとともに、「豊かさとは何か」、「自分たちのできることは何か」について深く考える機会とした。
- ・ 自分で国を決め、その状況、人々の生活について資料を集め調べ学習。
- ・ 調べたことを掲示物として作成し、展示発表を行う。
- ・ 「国際理解を深められたか」の振り返りシートの記入。

#### 4 研究の成果と課題

それぞれの学年でテーマに沿った研究内容を模索しながら、学校の現状に合った内容を年間計画に組み込むことができた。主に、「総合的な学習の時間」の年間計画に位置づけ、計画的にすすめ、多方面からのアプローチで生徒の興味関心や活動意欲の高揚につながった。また道徳の資料分析等は教員にとって貴重な研修の場面となり、有効であった。

来年度の課題は、今年度の取組で継続し、内容をより深められると考える「道徳」「国際理解教育」「福祉教育」「環境教育」は更に内容を精選し、計画の見直しを経てさらに深めていくこととする。

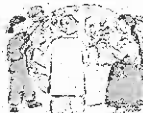
総合的な学習の時間  
テーマ 「外国から学ぼう」

2年 組 番

種も生まれると時期を違えない、身体も違わない、顔も違わない、母語も違わない。

私たちは、ただただこの地球上のどこかの国に、それぞれの身体を持って、それぞれの群のもとに生かされたに過ぎない。ある人は平均寿命が80歳を超える国に生まれ、同じ日の同じ時刻にある人は、大規模戦が行われている平均寿命が40歳にも満たない国に生まれる。

世界に暮らすすべての人も自分が生まれ育った文化の価値観、尺貫、節度などにどっぷりどっぷり、それが一番自然なものと感じている。だからこそ、異なった文化を知ることは自分の文化をより深く考えることにつながる。異なった考え方を知ることは自分の生活方の選択を助め、人生を豊かにし、自分が文化の束縛から自由になると同時に気がつかなかった自分の可能性に目を開かせてくれる。



そこで2年生では、「外国から学ぼう」を自分の生活方を考える最後のテーマとし、国際社会に生きる者たちは、日本人としての自覚を持ち、広い視野に立って異文化を認識し、異なる習慣や文化を持った人々と共に生きる実践や能力を身につける必要性がある。さらに、将来、日本はもろろんのこと、世界の人がが平和で豊かに暮らせる社会を創造できる人材に成長していくことが期待されている。

これからの社会は国際化が一層進んでいくことは、簡単に予想できることです。たとえば、

- 日本の国内においても、異なる文化や生活習慣をもつ外国の人々と共存する機会が増える。
- 外国に出かけていく機会や異文化に共存する機会が増える。

近いところでは、高校の修学旅行等がありますね。

※後述で外国の修学旅行へ3ヶ月以上留学した人は4404人（平成16年）  
海外修学旅行を行っている高等学校は延べ1236校（公立468校、私立767校）で、参加生徒数は16万2700人（平成16年）

- 日本を離れ外国社会の中で暮らす機会が増える。

このようなことは、これから誰にでも起こりうることなのです。では、これからの君たちはどんな力を身につけていけばよいのでしょうか？ ちょっと考えてみましょう。

どんな力が必要だと思いますか？ 自分の考えを記入してください。

## 研究主題

### 「小学校との連携による生徒指導の充実と学力向上」 ～義務教育9年間通じて、規律ある態度を育成し、学力の向上を図る～

川越市立名細中学校

#### 研究のポイント

- 本校職員を小学校に派遣し、指導を通し交流を深めることによって、児童の中学校に対する不安の解消を目指す。
- 小中の「生活のきまり」を作成することによって、児童が入学後スムーズに中学校生活を送れるようにする。
- 中学校での体験的な活動を通して入学後の生活をイメージさせることによって、児童に夢と希望を持たせる。

## 1 研究の概要

### (1) 研究のねらい

本校学校教育目標である「人権尊重の精神に基づく人間性豊かな生徒の育成」を具現化するために、小中の連携を深める。

発達段階に応じた教育を名細中学校区(名細中・名細小・広谷小)の児童生徒に推進し、基本的な生活習慣・規範意識・学習習慣を定着させ、学力の向上につなげる。また、小中学校の教職員同士の互いの教育への理解・関心を高め、義務教育9年間を通して子ども達の育ちを一貫してサポートできるようにする。

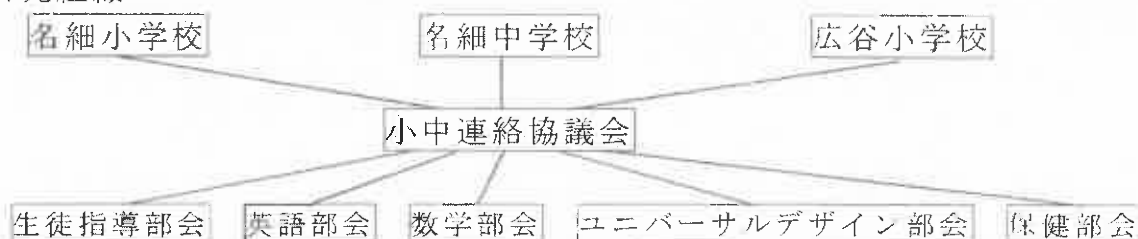
### (2) 研究主題設定理由

本校においては、ここ数年学力の向上、基本的な生活習慣・規範意識の未定着による問題行動、中1ギャップを含めた不登校等の問題が深刻な状況にあり、その解決が大きな課題となっている。

本校ではこれまでも家庭と連携を図りながら、これらの課題を解決するために組織的な取組・指導を進めてきているが、成果が十分に現れたと言える状況には至っていない。

生徒の生徒指導面と学力面の向上は、中学校3年間の短いスパンでの指導では難しく、義務教育9年間を見通して、小中学校が共通の課題を共有し、継続的で一貫性のある指導体制を構築することが肝要であると考え、本研究主題を設定した。

### (3) 研究組織



## 2 研究の内容

- (1) 小中連携生徒指導部会の実施
- (2) 中学校教職員による小学校への派遣事業
- (3) オープンスクールの実施

## 3 実践事例

### (1) 小中連携生徒指導部会の実施

名細中学校を会場に2ヶ月に1度、小中連携生徒指導部会を実施した。参加者は各校の教頭、生徒指導主任、名細中生徒指導推進教員の計7名である。

「中1ギャップの解消」「小学校から中学校へのスムーズな接続のためには」という議題で話し合い、小・中学校で取り組んでいる「生活のきまり」をできる限り統一していくことを確認した。お互いに「生活のきまり」を持ち寄り、共通の視点を明確にし、同一歩調で取り組めそうな部分とできない部分について意見を交わした。話し合いの結果を各校に持ち帰り、職員から意見を聞き、再度部会で検討する。これを繰り返し、登校から学校生活全般、下校までの一日の流れをまとめ上げた。今後、3月上旬に中学生が各小学校に出向き「清掃の仕方」について模範を示した後、一緒に清掃を行うという事業を計画している。合わせて部会開催時には、各校の生徒指導の現状についても情報交換を行い、各校の課題について共有化を図っている。

#### 名細中学校区(名細中・名細小・広谷小)小中連携「生活のきまり」

《平成28年度版》

この「生活のきまり」は小学校から中学校へスムーズに進学し、子どもたちが快適で安心・安全な学校生活を送れるように、小学校と中学校で話し合い、統一できるきまりや小学校から中学校の接続を意識したきまりを考えました。小学校・中学校のそれぞれのきまりを意識しながら、より充実した学校生活を送っていきましょう。

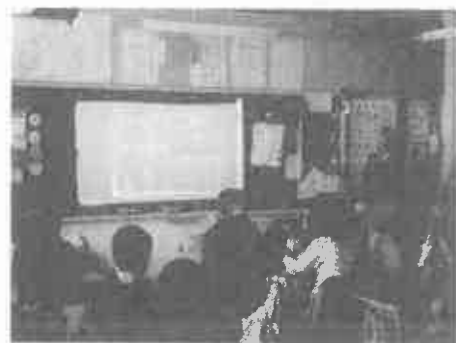
		小学校 (主に高学年)	中学校
登校		朝の活動が始まる前までには、活動の準備をして、その時間を迎える 週1日(15分間) 週4日(10分間)	8:30には、自席に着席している → 座っていないと“遅刻”になる 週4日(10分間) → いつも読みかけの本を持つ
朝読書		週1日(15分間) 週4日(10分間) → 読み聞かせボランティアの保護者も参加	週4日(10分間) → いつも読みかけの本を持つ
下駄箱・傘立て		【Point】 “かかどが揃った下駄箱・しっかりまとめた傘立て” を意識する	
忘れ物		忘れ物に気がついて、取りに帰らない 【Point】 前日にしっかり持ち物を確認する	登校に間に合うようなら取りに帰って良い
朝会		体育館に入った後、しっかりと整列し、話をしないで静かに待つ 【Point】 “静寂” を意識し、話を目と耳と心で聴く	体育館入場前に列・服装を確認し、私語なく入場する → 体育座りで参加
授業	チャイム前	業間休み・昼休み後の予鈴がなったら、着席して待つ 【Point】 「チャイム前着席」 を意識する	予鈴で着席し、授業のチャイムを持つ → 本鈴で座っていないと遅刻
	挨拶[開始]	号令係：「起立、これから〇〇の授業を始めます」 → 生徒全員：「はい」 → 先生が一步前に出る → 生徒：礼 → 生徒全員：「お願いします」 → 先生：礼 → 号令係：「着席」	
	挨拶[終了]	号令係：「起立、これで〇〇の授業を終わりにします」 → 生徒全員：「はい」 → 先生が一步後ろに下がる → 生徒：礼 → 生徒全員：「ありがとうございました」 → 先生：礼	
	授業準備 出席確認	前の授業が終わったら、次の授業準備を済ませてから休み時間をむかえる 【Point】 休み時間のうちに次の授業準備を行う 【Point】 授業開始後に学習用具を取りに行かない	授業開始時に出席確認とともに、服装と学習用具の確認を授業担当が行う
	学習用具	鉛筆・赤鉛筆(赤ペン)・消しゴム・定規 → 多色ボールペンは不可 → 鉛筆・消しゴムは無色 【Point】 自分の学習用具には必ず記名する	刃物類や学習不要物の所持は不可 → それ以外の学習用具は基本所持可
給食		学年ごとに基本的ルールが統一されている	指定の時間までに給食当番以外は着席する → できていないと“おかわり”禁止 → はし・マスク忘れは貸し出し
清掃		※昼休み清掃 「もくもく清掃(話さないで・黙々と)」 【Point】 “しっかり” を意識した清掃活動 ① 時間いっぱい取り組む ② 自分の役割・担当場所に責任を持つ ③ 自分の役割+αで取り組む	※授業後清掃 役割分担を明確にした清掃 → 『シンデレラ拭き』での床拭き → イスはあげて机を運ぶ、etc



(2) 中学校教職員による小学校への派遣事業

本校生徒指導推進教員を毎週月曜日午前中に広谷小、金曜日午前中に名細小に派遣し、5・6年生のクラスに入り、担任との授業を実施した。小学校教諭との指導法についての意見交換や次年度本校に入学する児童の実態把握にとっても貴重な事業となった。

また、本校のさわやか相談員を毎週金曜日に各小学校へ交互に派遣して、児童及び保護者の相談業務を行った。本校教育相談部会にて、小学校の様子について情報提供を行った。



【授業の様子】

(3) オープンスクールの実施（平成27年11月21日（土））

家庭や地域社会との連携を深めるとともに、連携や交流を通して、開かれた学校作りを目的に実施した。

小学校5・6年生の児童に、中学校での授業と部活動を実体験してもらうことで、「入学後、できるだけ早く中学校の生活に慣れて、積極的に活動できる生徒になってほしい。」「名細中学校に入学するという強い気持ちを抱いてもらいたい。」という考えのもと、計画・実施した。保護者にも児童を引率した後、大勢の方々に参観していただき、中学校への理解を高めてもらうことができた。中学校側としては、児童の様子を観察・把握することで、児童への理解を深めることができた。

体験授業の教科および内容

教科	内 容
国語	群読発表会 みんなで早口言葉で「かつぜつ」をよくして詩を読もう！
社会	歴史人物カルタ
数学	潜水艦ゲーム…中学校で習う「座標」の考え方の勉強をゲームを交えてやろう！
理科	微生物の観察
音楽	「名細中学校校歌」とリズム
美術	「墨アートに挑戦！」～水墨画の基本と墨あそび～
技術	簡単な木工作
英語	買い物、自己紹介等

部活動体験・見学

部活動名	晴天時活動場所(雨天時)
野球(男子)	グラウンド(技術室)
ソフトボール(女子)	グラウンド(1-1 教室)
陸上(男女)	グラウンド(3-1 教室)
男子ソフトテニス	テニスコート(1-4 教室)
女子ソフトテニス	テニスコート(2-3 教室)
剣道(男女)	武道場
卓球(男子)	3階少人数教室
男子バレーボール	体育館
女子バレーボール	体育館
男子バスケットボール	体育館
女子バスケットボール	体育館
吹奏楽(男女)	音楽室
美術(男女)	美術室
いきいき	7組
部活動見学	生徒会が引率して一巡



【部活動体験の様子】

【児童のアンケートより】

- ・ 中学校の勉強は難しいと思っていたけど、とても楽しかった。
- ・ 理科の実験でミジンコを見た。実際に動いていてすごかった。

【保護者のアンケートより】

- ・ 初めて中学校に入りました。このような機会があるとイメージがつきやすく、安心します。子どもも一緒だと思います。
- ・ 歴史に興味を持てそうな、とても楽しく子供達も覚えることができそうな授業でした。好印象で安心して中学校へ行けるのではと思わせて頂けるような感じでした。

#### 4 研究の成果と課題

##### (1) 成果

- ① 小中連携生徒指導部会の実施により、小中統一の「生活のきまり」を作成し、同一步調で指導に当たることができる。そのために、新入生にとっては入学時に今までとほぼ変わらない行動で中学校生活を送ることができる。また、情報交換を行うことにより、各校の現状・実態を把握することができた。
- ② 教職員の派遣事業により、児童が中学校に対する壁を取り払うことができたとともに、小学校教諭の指導法の工夫・改善につながった。
- ③ オープンスクールの実施により、児童が中学校の授業、部活動を体験することができ、夢や期待へとつなげられた。また、保護者にも中学校の様子を理解してもらう事ができた。

##### (2) 課題

- ① これまでの「生活のきまり」と若干異なる部分が出てくる場合もあるため、各学校の教員が十分に共通理解する必要がある。
- ② オープンスクールは、原則保護者の引率のため、保護者の都合のつかない児童が参加することができない。どのようにしたらより多くの児童に参加してもらう事ができるか検討していく。
- ③ 「生活のきまり」の取組についての確認、派遣事業、交流事業等を通して学習の基盤となる規律ある態度は育成されつつあるが、学力の向上につなげるまでには至らなかったため、今後の検討課題である。